

# チベット初期中観思想研究序説

## ——パツァブ翻訳師ニマタクの生涯と事績——

西 沢 史 仁

### 序

パツァブ翻訳師ニマタク (Pa/sPa tshab lo tsā ba Nyi ma grags, 以下, パツァブ翻訳師) は、教法後伝期 (bstan pa phyi dar) の初頭、凡そ十一世紀から十二世紀にかけて、主にチャンドラキールティ (Candrakīrti, 以下, 月称) の一連の著作をチベット語に翻訳し、その中観帰謬派説を紹介することに多大な功績があった大翻訳師である。中観派の典籍については、既に教法前伝期 (bstan pa snga dar) において、ナーガールジュナ (Nāgārjuna, 以下, 龍樹) の主要著作を始め、バーヴィヴェカ (Bhāviveka) の『根本中論註：般若灯論』(P5253/D3853) や「中観自立東方三論 (dBu ma rang rgyud shar gsum)」と称される自立派の根本三論書、即ち、ジュニャーナガルバ (Jñānagarbha) の『二諦分別論』(P om./D3881-2)、シャランタラクシタ (Śāntarakṣita) の『中観莊嚴論』(P5284-5/D3884-5)、カマラシーラ (Kamalaśīla) の『中観光明論』(P5287/D3887) は訳出紹介されてきたのに対して、月称の著作は、一部の例外を除き、ようやく後伝期に入ってからパツァブ翻訳師により本格的に訳出紹介された。パツァブ翻訳師とほぼ同時代に活躍したゴク翻訳師ロデンシェーラブ (rNgog lo tā ba Blo ldan shes rab, 1059-1109) が中観自立東方三論に対して註釈を著し講説したことを機縁として、彼が住持したサンブ寺 (gSang phu ne'u thog) においては自立派の思想が主流であったため、パツァブ翻訳師が紹介した帰謬派説は当初は流布しなかった。しかるに、カダム・シュン派の大学匠シャラワ・ユンタンタク (Sha ra ba Yon tan grags, 1070-1141) が後援したこともあり、チャパ・チューキセンゲ (Phya/Phywa/Cha pa Chos kyi seng ge, 1109-1169) の弟子の時代になると、サンブ寺においてもパツァブ翻訳師に随順して帰謬派説を取るものが徐々に現れるようになった。以後、パツァブが紹介した帰謬派説は、パツァブの四大弟子 (Pa/sPa tshab kyi bu bzhi) の一人であるシャン・タンサクパ・イエシェジュンネー (Zhang Thang sag pa Ye shes 'byung gnas, 12c.) が建立したタンサク寺 (Thang sag) や、シャラワの弟子筋に当たるトゥムトゥン・ロトゥタクパ (gTum ston Blo gros grags pa, 1106-1166) が建立したナルタン寺 (sNar thang) を主な拠点として後代へ伝承されていくことになり、十四世紀にはレンダワ・ツォンカバ師弟による《中観復興運動》を契機としてチベットにおいて最も流布し興隆した学統を形成することになった。<sup>(2)</sup>

このようにチベット中観思想史において、さらには、チベット仏教教学史において、パツァブ翻訳師が果たした役割と貢献は甚大なものがあつたが、彼の著作の現存は久しく知られておらず、後代の二次資料に引かれた断片的な情報以外には彼の中観思想の内実は殆ど未知の状態に留まっていた。しかるに、2006年に『カダム全集』(*bKa' gdams gsung 'bum*) 第一集が刊行され、そこに収録されたパツァブ翻訳師に帰される四点の作品が公になったことを契機として、漸く原典資料に基づきパツァブ翻訳師の中観思想を研究できる環境が整ってきた。

本稿では、以上のような状況を鑑みて、パツァブ翻訳師の中観思想研究の予備的研究として、パツァブ翻訳師の生涯と事績について紹介することにした。パツァブ翻訳師の単独の伝記は、現在のところ知られておらず、諸々の史書や関連文献から諸情報を収集して再構成する必要性がある。特にパツァブ翻訳師の一連の翻訳作品に付された翻訳後記 (*dpar/par byang*) や彼の著作の著作後記 (*mdzad byang*) からは、パツァブ翻訳師の修学事情や弘法活動に関する貴重な諸情報を回収することが出来るので、本稿ではそれを一次資料として、『青冊』(*Deb ther sngon po*) 等の記述と照合することを通じて、パツァブ翻訳師の生涯と事績を再構成することを試みた。さらに、『カダム全集』所収の四点の作品の真作性は自明ではなく、慎重な検討を要する課題となっているが、その奥書を分析することで、真作性の確定に努めた。

なお、本研究はこれは筆者がこれまで取り組んできたチベット初期中観思想研究の一環を形成するものである。<sup>(3)</sup>

## 先行研究概観

パツァブ翻訳師の生涯と事績に関する最も早くかつ比較的纏まった研究は、稲葉正就と J. Naudou (以下、ノードゥ) という内外二人の研究者によりほぼ同時期になされた。稲葉の二つの論文(稲葉1966, 1967) は、同氏の表現を使用するならば、「チベット中世初期における般若中観論書の訳出」を主題として、後伝期初頭の代表的な翻訳師達の業績を考察したものであり、稲葉1966ではリンチェンサンポ (*Rin chen bzang po*, 958-1055) とアティシャ (*Atiśa*, 982-1054)、稲葉1967ではゴク翻訳師ロデンシェーラプとパツァブ翻訳師ニマタクの事績が紹介されている。パツァブ翻訳師の事績を紹介するに際しては、『青冊』所収のパツァブ翻訳師の略伝を資料として用い、パツァブ翻訳師の一連の翻訳後記と照合することでその妥当性を検証しており、パツァブ翻訳師の事績の解明に関して一定の成果を挙げている(稲葉1967, pp. 18-23)。パツァブ翻訳師の年代については、具体的な年代こそ挙げないものの、彼の共訳者として、ゴク翻訳師の共訳者と同一人物あるいはその弟子が見られることを根拠として、ゴク翻訳師より「少しおくれた出世」と考証している(同 p. 18)。

他方、ノードゥの研究(Naudou 1968, 英語版1980) は題目通りカシュミールの仏教徒を主題とした包括的な研究であり、パツァブ翻訳師のみならず、彼の共訳者である一連のカシュミ-

ル・パンディタについても有用な情報を提供してくれる。但し、パツァブ翻訳師の事績については、主に『青冊』の記述を祖述するに留まっており（Naudou 1980, p. 212f.）、稲葉1967で為されたようにパツァブ翻訳師の一連の翻訳後記と照合する作業は行なわれていない。年代については、特に典拠を示していないが、スムパケンポ（Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, 1704-1788）が提示した1055年という生年<sup>(4)</sup>を採用しており、その年代に対する批判的検証は為されていない。但し、パツァブ翻訳師がカダム派のランルンパ・ツウンドウシヨヌ（Glang lung pa brTson 'grus gzhon nu, 1123-1193）が十八歳の年に沙弥戒を受戒した際の戒師を務めたことに対する『青冊』の記述に対する言及は見られ、パツァブ翻訳師の没年に関する一定の情報を提示した点は稲葉前掲論文には見られない点である。結論として、パツァブ翻訳師の活動期間を、「十二世紀前半」と考証している（同 p. 213）。

羽田野伯猷もまた、1968年の論文において、『青冊』に基づきパツァブ翻訳師の事績に言及しているが、特に年代考証は行なっていない。なお、羽田野はサツジャナの二人の息子を弟子とする間違いを犯している（羽田野1968, p. 142）。

パツァブ翻訳師の年代については、L.W.J. van der Kuijp（以下、カイク）が1985年の論文において注目すべき考証を行なっている。彼はまず、スムパケンポが提示した木未年（1055）という生年について、パツァブ翻訳師を月称、さらには、アティシャの化身と見なす伝承に依拠したものであり、アティシャの没年を以てパツァブ翻訳師の生年と見なしたと解釈する（Kuijp 1985, p. 4）。厳密には、アティシャの没年は前年の木午年（1054）とされるので、<sup>(5)</sup>没年の翌年をパツァブ翻訳師の生年と見なしたということになるが、筆者もその考証に賛同する。恐らくはパツァブ翻訳師の生年は元来未詳であったと推定されるので、スムパケンポの提示する生年は確実な史料の根拠があつてのことではない。そして、生年としては、ゴク翻訳師の師であるサツジャナの息子に師事したという『青冊』の情報に依拠して、稲葉正就同様にゴク翻訳師の年少の同時代人と見なし、ca. 1070年という年代を設定している。他方、没年に関しては、既にノドゥにより指摘されたように、ランルンパが十八歳（1140年）の頃にパツァブが戒師を務めたという情報に加え、ラジェ・ダウエーセル（lHa rje Zla ba'i 'od zer）が十四歳の年（1136, sic）にインドに行く際にパツァブの随従となろうとしたことを報ずる『青冊』の記述を根拠として、1145年頃を没年として設定している。ラジェ・ダウエーセルの随従の件については、後述するように、その生没年（1063-1122）を一ラプチュン後の1123-1182年に立てる誤りを踏襲しており、没年考証の資料的根拠にはならないが、パツァブ翻訳師の生没年として、ca. 1070-1145年というかなり堅実な年代を提唱した点は高く評価される。

Karen Lang（以下、ラング）は、1990年の論文において、主に『青冊』やシャーキャチョクデン（Shākya mchog ldan, 1428-1507）の『中観思想史』を資料としてパツァブ翻訳師の生涯と事績について論じている（Lang 1990, pp. 132-136）。これは、欧米人の研究の中では最も詳しい

ものであるが、資料の扱いと年代考証に大きな難がある。一例を挙げるならば、ラングは『青冊』を典拠として指示しつつ、パツァブ翻訳師の生誕について述べるが、そこで生年として1055年を挙げている(同 p. 133)。しかるに、『青冊』にはそのようなことは何処にも記されていない。パツァブ翻訳師の年代については、既に Kuijp 1985に注目に値する年代考証が提示されているが、それを参照しておらず、間違った生年に基づき年代考証を行なっているため、その後のパツァブの事績の年代設定は理不尽なものとなっている。例えば、パツァブ翻訳師のカシュミール修学期間を1077/8-1101年に設定しているが(同 p. 134)、ゴク翻訳師がカシュミールに出立したのは1076年であり、両者はほぼ同時期にカシュミールの同じ都市に修学したことになる。しかるに、その場合には、両者に面識があることを示す資料は皆無であること、同じ時期にゴク翻訳師はサツジャナに師事しパツァブ翻訳師はその息子に師事したことなど説明し難い事態が生ずるが、その点は全く看過されている。さらに、『四百論広釈』の翻訳後記の訳を挙げ、そこでスークシュマジャナがサツジャナの息子にしてラトナヴァジュラの孫であるとしているが(同 p. 133)、そのようなことは同後記には記されていない。ラトナヴァジュラの孫はサツジャナであり、マハージャナは曾孫に当たる。他にも、マチャ・チャンチュプツウンドゥをパツァブの四子と見做すシャーキャチョクデンの誤った解釈を無批判的に踏襲するなど(同 p. 136)種々の問題を含んでおり、十分に批判的な考察が為されているとは見なし難い。

他方、David S. Ruegg (以下、ルエッグ)は、2000年の著作において『青冊』を主資料としつつ、他の史書からも関連情報を採取して、パツァブ翻訳師の事績について概説しているが(Ruegg 2000, pp. 44-48)、同様に種々の看過し得ない問題点を含んでいる。例えば、パツァブ翻訳師の年代については、前述したように、Kuijp 1985に新説が提唱され、ルエッグ自身参考文献として挙げているが(Ruegg 2000, p. 44, n. 87)、生年として既に否定された1055年を踏襲する以外、何らのコメントも年代考証も行なっておらず、パツァブ翻訳師のカシュミール修学時代の年代は議論にすらなっていない。また後代のゲルク派のロンドルマ(Klong rdol Ngag dbang blo bzang, 1719-1795)の記述に基づきパツァブをギェルラカン寺出身者(rGyal lha khang pa)と見なしているが(同 p. 45, n. 89)、『青冊』所収のギェルラカン寺の寺統史にはパツァブ翻訳師の名前は見出されず、また、パツァブ翻訳師に関するロンドルマの記述は信憑性を欠くので、現状、パツァブ翻訳師をギェルラカン寺に結び付ける確たる資料的根拠はない。さらには、パツァブ翻訳師の師の一人としてパラヒタバドラ(Parahitabhadrā)を挙げるが(同 p. 44)、パツァブにはパラヒタバドラとの共訳はなく、何を根拠にパラヒタバドラをパツァブ翻訳師の師の一人に数えるのか定かではない。このように総じて資料の批判的検証と論拠の提示に問題を残す。

2006年に刊行された『カダム全集』第一集にはパツァブ翻訳師に帰される四点の作品が収録されているが、Georges Dreyfus と Drongbu Tsering は、2010年の論文において、そのうち『四

百論』の註釈を除いた三点の作品の真作性について論じている。彼らはこの三作品を全てパツァブ翻訳師本人ないし同時代の直弟子の一人が記したものと考証しているが（Dreyfus/Drongbu 2010, p. 396）、この件については後ほどパツァブ翻訳師の著作に関する一節を設けて纏めて検討することにした。

以上、パツァブ翻訳師の生涯と事績に関する一連の先行研究を概観した。<sup>(8)</sup> そのうち、『青冊』所収のパツァブ略伝の記述をパツァブ自身の翻訳後記により検証する作業を試みた稲葉正就の研究（稲葉1967）と、パツァブ翻訳師の年代に関するカイプの批判的研究（Kuijp 1985）が特に重要なものと考えられる、ただ総じて諸先学により十分な解明が為されてきたとは言えず、端的には、最重要の一次資料であるパツァブ翻訳師の一連の翻訳後記の分析すら十分に為されてこなかったため、依然として彼の生涯と事績については厚いベールに覆い隠された状態である。本稿では、特に稲葉・カイプ両氏の研究を踏まえつつ、方法論的には、パツァブ自身の一連の翻訳後記や著作後記を一次資料として、『青冊』を始めとする関連する諸史料や聴聞録等の二次資料の記述と照合し、総合的にパツァブ翻訳師の生涯と事績を浮き彫りにして再構成する作業を試みる。そのため、便宜上、まず最初にパツァブ翻訳師の翻訳作品及び著作を確認してから、その次に、その生涯と事績を検討することにした。

## I. パツァブ翻訳師ニマタクの翻訳作品

現行の大蔵経にはパツァブ翻訳師の翻訳が凡そ二十作品収録されている。<sup>(9)</sup> パツァブ翻訳師の翻訳作品は十三世紀のナルタン寺の大学匠チョムデン・リクペーレルティ（bCom ldan rigs pa'i ral gri, 1227-1305, 以下、リクレル）の『太陽光目録』（*bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*, abbr. Nyi 'od<sup>(10)</sup>）にも一覧に纏められているので、対応する目録番号（cf. Schaeffer/Kuijp 2009）を併記しておく。<sup>(11)</sup>

図1. パツァブ翻訳師ニマタク翻訳作品一覧<sup>(12)</sup>

	分野・目録番号	書名 [著者名]	共訳者 <sup>(13)</sup> ・訳出地	Nyi 'od
	タントラ			
1	P363, 475/ D676, 850	<i>Āryāparimitāyurjñānaḥṛdaya-nāma-dhāraṇī</i> (阿弥 陀鼓音声王陀羅尼經)	Tr. Puṇyasambhava [np.]	om.
	讃歌集			
2	P2028/ D1137	<i>Narakoddhāra</i> (出地獄) [Nāgārjuna]	Tr. Tilaka[kalaśa] [Ra sa/ Ra mo che]	S28.8
	タントラ釈			

3	P2564/ D1691	<i>Sragdharastotra</i> (華鬘持讚) [Thams cad mkhyen pa'i bshes gnyen (*Sarvajñamitra)]	Tr. Kanakavarman [np.]	S28.9
4	P2665/ D1800	<i>Bodhicittavivarana</i> (菩提心積) [Nāgārjuna]	Rev. Kanakavarman [np.]	S28.6
5	P2675/ D1810	<i>Śrīgūhyasamājamaṇḍalopāyikāvīmśatīvidhi</i> (吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十) [Klu'i byang chub (*Nāgabodhi)]	Tr. Tilakakalaśa [Bya sa'i gtsug lag khang]	S28.13
6	P2677/ D1812	<i>Kramāntarbhāvanopadeśa</i> (次第內修優波提舍) [Klu'i blo (*Nāgabuddhi)]	Tr. Alamkakalaśa [np.]	S28.13
7	P3470/ D2646	<i>Pratiṣṭhāvīdhisaṃkṣepa</i> (善住儀軌略撰) [Dad pa'i 'byung gnas go cha (*Śraddhākaravarman)]	Tr. Kanakavarman [np.]	om.
8	P4566/ D3748	<i>Āryajambhalastotra</i> (聖闍婆羅讚) [bTsun pa Zla ba (*Candragomin)]	Tr. *Muditaśrī <sup>(14)</sup> [np.]	S28.10
	中觀			
9	P5224/ D3824	<i>Prajñā-nāma-mūlamadhyamakakārikā</i> (般若根本中論頌) [Nāgārjuna]	Rev.1 Hasumati [*Anupamapura/ *Ratnagupta] <sup>(15)</sup> Rev.2 Kanaka[varman] [Ra sa/ <sup>(16)</sup> 'Phrul snang]	S28.2 <sup>(17)</sup>
10	P5225/ D3825	<i>Yuktiṣaṭīkākārikā</i> (六十頌如理論頌) [Nāgārjuna]	Rev. *Muditaśrī <sup>(18)</sup> [np.]	S28.12
11	P5246/ D3846	<i>Catuṣṭatakaśāstrakārikā</i> (四百論頌) [Āryadeva]	Tr. Sūkṣmajana <sup>(19)</sup> [*Anupamapura/ *Ratnagupta]	S28.4
12	P5260/ D3860	<i>Mūlamadhyamakakārikāvṛtti-prasannapadā-nāma</i> (根本中論註：明句論) [Candrakīrti]	Tr. Mahā[ha]sumati [*Anupamapura/ *Ratnagupta] Rev. Kanakavarman [Ra sa/ Ra mo che]	S28.2
13	P5262/ D3861	<i>Madhyamakāvātāra</i> (入中論) [Candrakīrti]	Tr. Tilaka[kalaśa] [*Anupamapura/ *Ratnagupta] Rev. Kanakavarman [Ra sa/ Ra mo che]	S28.3
14	P5263/ D3862	<i>Madhyamakāvātārabhāṣya</i> (入中論釋) [Candrakīrti]	Tr. Tilakakalaśa [*Anupamapura/ *Ratnagupta] Rev. Kanakavarman [Ra sa/ Ra mo che]	S28.3
15	P5266/ D3865	<i>Bodhisattvayogācāra-catuṣṭatakaṭīkā</i> (菩薩瓔伽行·四百論廣釋) [Candrakīrti]	Tr. Sūkṣmajana [*Anupamapura/ *Ratnagupta]	S28.4
16	P5358/ D3961	<i>Mahāsūtrasamuccaya</i> (大經集) [dPal Mar me mdzad ye shes, (*Śrī-Dīpaṃkarajñāna)]	Tr. rGyal ba kun dga' (*Jayānanda), Khu mDo sde 'bar [dPal ldan Ya gad gtsug lag khang]	S28.11
	阿毘達磨			



17	P5594/ D4093	<i>Abhidharmakoṣaṭīkā-lakṣaṇānusāriṇī-nāma</i> (阿毘達磨俱舍論註疏：相隨順) [広本] [Gang ba spel ba (*Pūrṇavardhana)]	Tr. Kanakavarman [Pu rangs]	S28.7
18	P5597/ D4096	同 [略本]	Tr. Kanakavarman [Pu rangs, sic, Ra sa?]	S28.7
	書簡			
19	P5658/ D4158	<i>Rājaparīkathā-ratnāvalī</i> (宝行王正論) [Nāgārjuna]	Rev. Kanakavarman [np.]	S28.12
	論理学			
20	P5749/ D4251	<i>Paralokasiddhi</i> (他世間成就) [Chos mchog (*Dharmottara)]	Tr. sKal ldan rgyal po ("Bhavyarāja) [*Anupamapura/Ratnaraśmī'i gtsug lag khang]	om.

この一覧は、現行の版本大蔵経収録作品のうち、その翻訳後記から翻訳者ないし改訂者としてパツァブ翻訳師の関与が確認されたものに限定されることを断っておく。後述するように、現行の版本の翻訳後記は版本編纂時にかなり手を入れられているため、実際にはパツァブ翻訳師が翻訳ないし改訂に関与していた作品であっても、現行の翻訳後記からそれを確認できないものも複数知られている。それ故、パツァブ翻訳師の翻訳作品はこれ以上あったことは疑いない。その委細については、後ほど一節を設けて検討することにした。

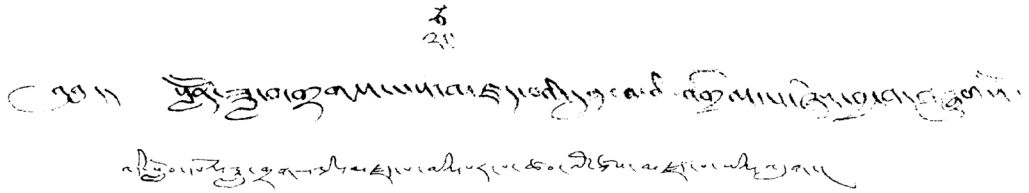
この二十作品のうち、タントラ及びタントラ積に属する七作品は密教関係の翻訳だが、残りの十三作品は顕教関係の翻訳に当たる。密教経論の翻訳は何れも小品であるが、顕教論書の翻訳は量的にも多く内容的にも重要な作品が多い。分野としては中観が主であり、龍樹の『根本中論』、『六十頌如理論』、『宝行王正論』の改訂やアーリヤデーヴァの『四百論』の翻訳のほか、月称の『明句論』、『入中論』、『四百論広釈』等の帰謬派の根本論書などを訳出している。他にも、プールナヴァルダナの『俱舍論註疏』やダルモッタラの『他世間成立』などの翻訳なども見られ、阿毘達磨や論理学の分野にも通じていたことが窺われる。プールナヴァルダナやダルモッタラはカシュミール系の学者であり共訳者達もカシュミール・パンディタが主なので、パツァブ翻訳師がカシュミールの伝統的な学統に連なる者であることを如実に示している。

## II. パツァブ翻訳師ニマタクの著作

『カダム全集』第十一巻にはパツァブ翻訳師に帰される以下の四点の作品が収録されている。<sup>(20)</sup>

1. *dBu ma rtsa ba shes rab kyi ti ka/ bsTan bcos sgron ma gsal bar byed pa zhes bya ba*. In: KS 11, pp. 29-132 (1a-52b22).
2. [無題] (\**Le 'brel Pa tshab kyi man ngag*). In: KS 11, pp. 133-136 (53a1-54b14).<sup>(21)</sup>
3. *Tshig gsal ba'i dka' ba bshad pa*. In: KS 11, pp. 137-203 (55a1-88a10).
4. *bZhi brgya pa'i rgya cher bshad pa'i bsdu pa'i don*. In: KS 11, pp. 205-214 (1a-5b6).

この四つの作品のうち、最初の三つは一帙の写本に纏められたものであり、表紙にはデブン寺十六羅漢堂所蔵を示す [phyi] tsa 24 という整理番号と以下の表題と傍註が付されている。

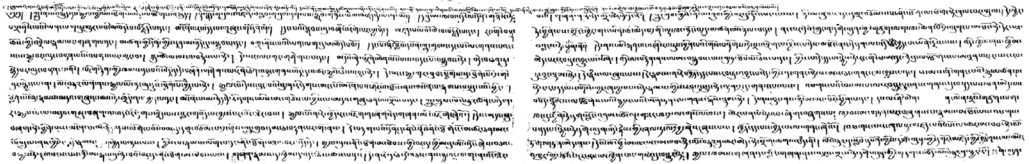


slob dpon Zla ba grags pas mdzad pa'i dBu ma'i 'grel pa zhes bya ba bzhugs so//  
 'di slob dpon Zla grags kyis mdzad pa min par Pa tshab lo tsas mdzad pa yin 'dug/ (22)

「尊師月称により著作された『中 [論]』の註釈と云われるものでございます。」

{これは尊師月称により著作されたものではなく、パツァブ翻訳師により著作されたものである。}

同写本は中央に空白部を置き二段組みの形でウメ書体で記されており、左側の行末の後は右側の一行目に移る形で一フォリオ十一行から成る。行数は左側を1-11行、右側を12-22行と数えておく。例えば、第一フォリオ裏面は以下の通りである。



三作品は通し番号で同じ筆跡で記されているが、先に提示した表題は明らかに後代の別人の手になるものである。この帙に収録されている作品は何れも表題を欠くので分かりにくいだが、上記の通り独立した三作品を含んでいる。<sup>(23)</sup> 前二者は『根本中論』の註釈類であり、第三の作品は『明句論』の難語釈である。以下、各々の奥書の内容を紹介し、その真作性について検討しよう。

(1) 『根本中論註疏：明灯論』 (*dBu ma rtsa ba shes rab kyi ti ka bsTan bcos sgron ma gsal bar byed pa*)

第一の作品は奥書から上記の題目を回収することが出来る。奥書は以下の通りである。

*dBu ma rtsa ba shes rab kyi ti ka/ bsTan bcos sgron ma gsal bar byed pa zhes bya ba/*  
*Pan di ta Ha su mati'i bshad lugs bris pa rdzogs s-ho// // 『根本中論』の註疏、『明灯*  
*論』* と云うものは、パンディタ・ハスマティ (Paṇḍita Hasumati) の解説方法を記したも  
 の [であるが、それ] が完成した。」 (KS 11, p. 132.22/ 52b22)

ここで注目すべきは奥書に言及されている「パンディタ・ハスマティ」という人物である。



このハスマティは、カシュミールにおいてパツァブが『根本中論』の蔵訳の改訂を行なった際に共訳者を務めた人物であり、パツァブの師の一人に他ならない。この奥書にはパツァブ翻訳師の名前が著者として明記されているわけではないが、この註釈がハスマティに師事しその解説方法を踏襲する人物によって記されたものである以上、その著者をパツァブ翻訳師に帰することにはほぼ疑問の余地はないと考えられる。実際、現行の大蔵経にはハスマティが翻訳ないし改訂に関与したのはパツァブと共訳した『根本中論』及びその註釈である『明句論』のみであり、他の翻訳者の共訳者を務めたことは知られていない。

テキストには、mi; med を、myi; myed と表記する古い書体を残し、sangs rgyas を bu ta と音写したり、e de pa や e pa など梵語の音写と推定される語が多数用いられており、梵語の知識がないと解説不可能な箇所が多々ある。それ故、これはチベット人読者を念頭に置いた作品ではなく、パツァブ翻訳師自身がカシュミール滞在中にハスマティから受けた『根本中論』の講義の個人的な備忘録の可能性が高い。奥書が極めて簡素であり、自分の名前すら記していないことはそのことを示唆している。なお、テキスト中には、pa ra や pa ra he ta という語が見えるが<sup>(25)</sup>、これはハスマティの師にしてゴク翻訳師の共訳者でもあるカシュミール人学者パラヒタバドラ (Parahitabhadrā) を指すことは疑いないので、作者が当時のカシュミール学界の動向に通じていた人物であることを示唆している。

なお、無宗派 (Grub mtha' ris med) の諸学者の小品を集成した著作集のうち、特に中観の稀観書を集成した巻にパツァブ翻訳師に帰される以下の小品が収録されている。

<sup>(26)</sup>  
*Thal bzlog 'grel ba bzhugs so.*

この作品を検討した結果、独立した著作ではなく、この『根本中論註疏：明灯論』の断片 (5a22-14b4に相当) であることが判明した。

(2) [無題] \* [[『根本中論』の] 諸章の関係 [に関する] パツァブの口訣 (\**Le 'brel Pa tshab kyi man ngag*)

他方、第二の作品は表題を欠くので、題目からその内容を推測することは出来ないが、その奥書には以下のように記されている。

<sup>(27)</sup>  
*Le 'brel Pa tshab kyi man ngag rdzogs s-ho// // [[『根本中論』の] 諸章の関係 [に関する] パツァブの口訣が完成した。]* (KS 11, p. 136.14/ 54b14)

ここで問題となるのは、le 'brel という語の語義である。一見すると直後のパツァブの肩書を示す語のように見えるが、この作品は、『根本中論』二十七章の内容と各章の関係について簡略に記した小品であるので、le 'brel とは、le'u rnamis kyi 'brel ba (諸章の関係) という語の省略形と考えられる。そして、この le 'brel と Pa tshab kyi man ngag の二語は同格的に並置されているので、直訳するならば、「諸章の関係、パツァブの口訣」の意味であり、内容的には、『根

本中論』の各章の関係に関するパツァプの口訣という意味かと推定される<sup>(28)</sup>。この作品が『根本中論』の各章に関するパツァプの解釈を纏めたものであるか否かは、実際に、パツァプの『根本中論註疏』の章立ての関係に関する記述と照合することで検証できるが、それについては別稿にて検討しよう。尤も、仮にパツァプの『根本中論註疏』とこの作品との間に対応関係が確認されたとしても、この作品はパツァプの口訣を受けた人物が纏めたものであって、パツァプ翻訳師本人の作品ではないので、パツァプ翻訳師の作品からは外す必要がある。

問題はこの口訣を記した人物が誰であるのかということであるが、現状、その手掛かりは残されていない。但し、文中に、sdom (要句)、bar sdom (中間要句)、yan lag gi sdom (支分要句) という用語が使用されていることが一つの手掛かりを与えてくれる (同53a1, 5, 7)。sdom とは一般に僧院教科書 (yig cha) の一形態であり、後代のゲルク派の僧院では暗記用にテキストの内容を短い偈頌の形で纏めた文献群を指す<sup>(29)</sup>。それ故、このテキストは、履修カリキュラムがある程度確立した時代の僧院内で記されたテキストと推定されるので、パツァプ翻訳師及びその直弟子達の時代よりもかなり時代が下った頃の作品である可能性が高い。実際、ゴク翻訳師 (1059-1109) の著作を見ると、(1)要義 (bsdus don/don bsdus, \*piṅḍārtha) と(2)解説 (rnam bshad, \*vyākhyā) という二種類の註釈形式が確認され<sup>(30)</sup>、これは彼の直弟子達やチャパ (1109-1169) 等の孫弟子達も踏襲しているが、要句 (sdom) はまだ見出されないので、11-12世紀頃にはまだこの要句の形式は出現していなかった可能性が高い。他方、サパンの直弟子であるウユクパ (U yug pa rigs pa'i seng ge, ?-1253) には、『量評釈要義：正理要句』 (*Tshad ma rnam 'grel gyi bsdus don Rigs pa'i sdom*)<sup>(31)</sup> という『量評釈』の要句が残されているので、十三世紀頃には既に《要句》というジャンルが成立していたことが窺われる。しかし、十四世紀に入るとタンサク寺において中観研究が衰微し「死体」と称される程になるので<sup>(32)</sup>、その前には成立していたと考えられる。以上を総合的に勘案して、十三世紀頃にパツァプ翻訳師の学統を受け継ぐ者 — 例えば、タンサク寺の学僧等 — により纏められた作品と暫定的に考えておく<sup>(34)</sup>。

### (3) 『明句論難語釈』 (*Tshig gsal ba'i dka' ba bshad pa*)

第三の作品は『明句論』の註釈であるが、その奥書は以下の通りである。

slob dpon Zla ba grags pa'i zhal snga nas kyis sbyar ba/ *Tshig gsal ba'i dka' ba bshad pa*/  
Bla ma Tshong dpon pan di tai' gdam ngag la brten {Pa tsab (read: tshab) kyis} sbyar  
ba'o/// 「尊師月称により著作された『明句論』の難語釈は、上師ツォンボン・パンディ  
タの教誡に依拠して {パツァプにより} 著作された。」 (KS 11, p. 203.10/ 88a10) 注. {...} は  
欄外書き込み。

ここでパツァプの名前は欄外に付記されている他、本文に記されていないわけではない。問題は、この著者に『明句論』の教誡を与えたとされる「上師ツォンボン・パンディタ」の身元で

ある。この人物はパンディタと称されるが、パツァブ翻訳師の一連の共訳者達の中にはその名前が見出されない。tshong dpon とは、語義的には、「商主」の意味であり、インドのパンディタの場合、想定される梵語原語は、śreṣṭhin である（Mvyut 3708）。現行の大蔵経には、この語を有するインドの論師は、前伝期に Jinamitra と Klu'i rgyal mtshan により翻訳された *Vinayastotra* (P5637/D4136) の著者である Dharmaśreṣṭhin (Chos kyi tshong dpon) の一例を見るだけで、それ以外には確認されない。bla ma (上師) という尊称が付されているところから、この人物はインド人ではなく、チベット人の可能性もある。

実際、この著作がパツァブ翻訳師の真作であれば、当然、先の『根本中論註疏』の場合と同様に、『明句論』の共訳者であるハスマティや改訂を共にしたカナカヴァルマンの名前が挙がって然るべきであるが、実際にはそうになっていない。それ故、奥書を見る限りは、これがパツァブ翻訳師の真作である可能性は低いと判断せざるを得ない。また本文には、『根本中論註疏』に見られたような梵語の音写表記は殆ど見られず、特に『根本中論註疏』に頻出した e de pa 等の特徴的な語は全く用いられていないこともパツァブの真作性を疑う根拠の一つとなっている。

しかし、他方において、二十三年間もの長いカシュミール修学時代において、翻訳を共にしなかったにせよ師事した無名の一パンディタにツォンボン・パンディタなる人物がいて、その教えの下にこの『明句論』の註釈を著した可能性もまた皆無ではない。それ故、その真作性の判断は、単に奥書のみではなく、本文とその内容を精査した上で下すべきかと考える。現時点では、パツァブ翻訳師の真作性はかなり疑わしく、その真作性を確定できないので、暫定的にパツァブ翻訳師の著作リストからは外しておくが、今後の検討課題として残しておきたい。

なお、この三作品の写本の筆写年代については、Dreyfus/Drongbu 両氏は、十三世紀以前のパツァブ存命時に非常に近い十二世紀頃の写本としているが（同2010, pp. 391, 396）、この三作品は本来別々の写本であったものを後代の或る人物が現に見られるような形で一帙の写本として筆写したものと考える必要がある。そのうち、少なくとも第二の無題の作品は、パツァブ翻訳師自身の著作ではなく、後代の人物の手によるものである。その原写本はパツァブ翻訳師の時代に筆写されたものではありえない。先の考証が妥当であれば、十三世紀頃にまで時代が下ると考えるべきである。他方、『根本中論』の註釈に関しては、その原写本はそこで用いられている書体 — 例えば種々の梵語の音写表記等 — から判断してかなり古い時代の表記を反映しており、パツァブ翻訳師の時代に筆写された可能性は十分に考えられる。むしろそのチベット人読者を想定しない講義備忘録的な体裁を鑑みるに、パツァブ翻訳師自身が記したものである可能性もある。ただ何れにせよ、第二の作品の原写本の作成が十三世紀まで下がる以上、それを筆写して一帙に纏めた現行の写本は最低でも十三世紀、さらには、それ以後に作成された可能

性も視野に入れる必要がある。この点は検討課題である。

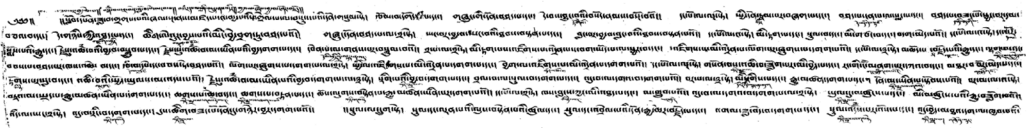
(4) 『四百論広釈要義』 (*bZhi brgya pa'i rgya cher bshad pa'i bsdus pa'i don*)

他方、第四の作品である『四百論広釈要義』の写本は、上記三作品とは別の写本である。第一フォリオ表には、デプン寺の十六羅漢堂所蔵作品の整理番号が付されている。

57

先に挙げた前三作品を取録する写本では、tsaの直下に24という数字が記されていたが、ここでは、caと思しき文字の直上と直下に分けて数字が付されている。直下には7という数字が視認できるが、直上の数字が判然としない。ちなみに、この作品を記載する『デプン古籍目録』には、tsa 57と記されているので、中央の文字は、caでなく、tsaであって、直上に真つすぐ伸びて右側に湾曲した線がtsaの右肩の飾り文字を誇張して表記したものであり、その左側に数詞の五が小さく添え書きされていると読めるので、そこから、tsa 57と解読したのであろう。

ウメ書体の写本であり、第一フォリオのみ七行で、後は各フォリオ八行で記されている。第一フォリオ裏の画像は以下の通りである。



写本で用いられている書体については、隠字体 (skung yig) の使用が全体的に見られることが特徴的である。筆者の限られた知識では書体のみから筆写年代を推定することは不可能であるので、識者のご教示を乞う。その奥書は以下の通りである。

*bZhi brgya pa'i rgya cher bshad pa'i bsdus pa'i don/ Lo tsa ba chen po shakya'i dge slong Zhang Pa tsab (read: tshab) nyi ma grags kyi[s] legs par sbyar pa'o// // 『四百論広釈要義』は、大翻訳師釈迦比丘シャン・パツアップ・ニマタクにより正しく著作された。」(KS 11, p. 214.7/ 5b7)*

奥書にはパツアップ翻訳師ニマタクの名前が明記されており、特に疑わしい点は見当たらないので、真作と見なして良いと考える。ここで『四百論広釈』とはパツアップが翻訳した月称の註釈 (P5266/D3865) を指すが、同書はその内容的註釈ではなく、「要義」という語により示唆されているように、単にその科文 (sa bca) を集成しただけの作品である。なお、肩書として「大翻訳師」という語が用いられているが、このことはこの著作がチベット帰国後になされたことを示唆している。その委細については後で言及しよう。

以上、『カダム全集』に収録されている四作品の真作性を検討したが、その結果、『根本中論

註疏：明灯論』と『四百論広釈要義』の二点はパツァブ翻訳師の真作と見なし得るが、第二の無題の作品は、パツァブ翻訳師本人の作ではなく、その学統を受け継ぐ後代の者がパツァブの口訣を纏めたものであり、第三の『明句論難語釈』はその真作性が疑わしいことが結論として導出された。現状、特に第三の『明句論』の註釈をパツァブ翻訳師の中観説が示されたものとして扱うことについては慎重な態度が必要である。

最後に、『アク稀観書目録』の見教導類 (lta khrid skor) の箇所にパツァブ翻訳師に帰される著作が掲載されているので、紹介しておく。<sup>(37)</sup>

MHTL no. 11298: Sha ra ba'i dBU ma'i dris lan Pa tshab kyis mdzad pa.

書名を見る限り、パツァブにより著作されたシャラワとの中観に関する質疑応答集 (dris lan) と考えられるが、残念ながら、現存は確認されていない。後述するように、シャラワはパツァブの有力な後援者であり、史書には中観に関するシャラワとパツァブの質疑応答が記録されているので、<sup>(38)</sup> 両者の間にこのような質疑応答集があってもおかしくない。なおパツァブ翻訳師には、*dBU ma'i lta ba gnad tho* (『中観見解枢要録』) と称される著作があったとされるが、<sup>(39)</sup> これと同一作品の可能性もある。

### Ⅲ. パツァブ翻訳師ニマタクの生涯と事績

パツァブ翻訳師の生涯と事績については、残念ながら独立した伝記が残されていないので、<sup>(40)</sup> 委細は不明である。そこで一連の史料や聴聞録、翻訳後記等の関連資料から諸情報を収集して再構成する必要がある。まず最初に、パツァブ翻訳師に言及した最も古い史料の一つに、ニヤン・ニメーウーセル (Nyang Nyi ma'i 'od zer, 1136-1204) <sup>(41)</sup> により十二世紀末頃に著作されたと推定される『仏教史：華の真髓・蜂蜜の精華』 (*Chos 'byung Me tog snying po sbrang rtsi'i bcud*, 以下、『ニヤン仏教史』) がある。そこではカダム派やゴク翻訳師の事績について解説した直後に、パツァブ翻訳師について以下のように言及している。

「翻訳師パツァブパ・ニマタクは、カシュミールで二十三年間修学し、カナカヴァルマンと云う非常に通達したパンディタを招聘して、中観理聚<sup>(42)</sup>及びその諸註釈と、国王に対する二つの教誡 (rGyal po la gdams pa gnyis) と、月称の非常に膨大な御著書である『明句論』 (*Tshig gsal, Prasannapadā*) と、讃歌類の教誡 ([b]stod skor gdams [pa?]) と、小品の論書を多数翻訳した。パツァブの弟子はタルマ・ユンテンタク (Dar ma Yon tan grags)、その弟子はパ [ボン] カパ (Pha [bong] kha pa)、<sup>(43)</sup> その弟子はマチャ・チャン [チュブ] ツウン [ドゥ] (rMa bya Byang [chub] brtson ['grus], ?-1185) <sup>(44)</sup> である。彼 (= マチャ) により [パツァブの学統は] [チベット] 全土に広められた。」 (『ニヤン仏教史』 pp. 435.20-436.5) <sup>(45)</sup>

委細は後で解説するが、パツァブ翻訳師の年代は1070-1140年頃と推定されるので、ニヤンは



パツァブ翻訳師より二世代程年少の同時代人であることになり、その記述にはかなりの信憑性が期待できる。特にここではパツァブ翻訳師のカシュミール滞在年数として「二十三年」という数字が明記されていることが注目に値する。『ニャン仏教史』は、この「二十三年」という情報を提供する現状最古の資料であるが、ニャンの1136-1204年という生没年が正しければ、この情報は文献ではなく口承に基づくものである可能性が高い。

さらにパツァブ翻訳師の訳業に対する言及も興味深い情報を提供している。例えば、ニャンによれば、パツァブ翻訳師には「国王に対する二つの教誡」の翻訳があったとされる。そのうちの一つは、龍樹造『宝行王正論』(Ratnāvalī, P5658/D4158)に同定されるが、他方は不明である。可能性としては、同じく龍樹造の『親友書簡』(Suhṛllekha, P5682/D4182)が考えられるが、現行の版本の翻訳後記には翻訳者としてサルヴァジュナデーヴァ (Sarvajñadeva) とベルツェク (dPal brTsegs) という前伝期の翻訳者の名前を記す以外、その改訂者に言及した記述はない。さらに、「讃歌類の教誡」など多数の翻訳があったとされるが、現行の讃歌部 (bstod tshogs) にはパツァブ翻訳師の訳出としては龍樹に帰される『出地獄』(P2028/D1137)の作品しか収録されていない<sup>(46)</sup>。しかし、この讃歌部には同じく龍樹に帰される十九点の作品 (P2010-2028/ D1118-1125, 1127-1137) が収録されており、しかも、その中には訳者未記載の作品が十点 (P2013, 2019-2027/ D1121, 1128-1136) も含まれているので、これらの翻訳にパツァブ翻訳師が関与した可能性は多いに考えられる。同様に、『親友書簡』に改訂を加えた可能性も否定できない。後述するように、現行の翻訳後記には確認されないパツァブ翻訳師の改訂作品が存在していたことはほぼ疑いないので、このニャンの記述はその意味で非常に示唆的である。

それに続く言及としては、『デウー仏教史』(lDe'u chos 'byung)<sup>(47)</sup>がある。同書ではパツァブ翻訳師の名前はカナカヴァルマンと共にガリ王家が招聘した一連のパンディタや翻訳師達の一覧の中に見出される (同 p. 361.18)。そこでは、パツァブ翻訳師はマルパ翻訳師 (Mar pa lo tsā ba)<sup>(48)</sup>とゴク翻訳師 (1059-1109) の間に位置付けられているので、これが時系列を反映したものであるならば、ゴク翻訳師以前の人物と見なされていたことになる。それ以外に、パツァブ翻訳師の事績に対する言及は見出されない。

他方、プトゥン (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) の『仏教史』(Bu ston chos 'byung, 1322年造)<sup>(49)</sup>には以下の記述が見出される。

「パツァブ・ニマタクもまたカシュミールに二十三年間修学し、パンディタ・カナカヴァルマンを招聘して、中観類を翻訳し講説したので、パツァブの四子等の弟子が現れた。」  
(『プトゥン仏教史』 p. 203.6-7;<sup>(50)</sup> cf. Obermiller 1932, p. 216)

これはゴク翻訳師の記述の直後に見出されるので、プトゥンの理解では、パツァブ翻訳師はゴク翻訳師より後の人物として位置付けられていたことになる<sup>(51)</sup>。『ニャン仏教史』の段階では、パツァブの直弟子としては、タルマ・ユンテンタクを挙げるだけで、四人の弟子を挙げる習わ



しはなかったが、『プトゥン仏教史』にはそれが明記されている。それ故、パツァプの弟子達を四人に纏めて「パツァプの四子」と総称する流儀は、後代、恐らくは、十三世紀から十四世紀初頭頃に掛けて徐々に成立したものと推察される。

その後、この『プトゥン仏教史』の記述を受けて、『青冊』(*Deb ther sngon po*, 1476-78年造)<sup>(52)</sup>にはより詳しい伝記が掲載されている。『青冊』所収の略伝は、現状、パツァプ翻訳師の最も詳しい伝記資料であり、パツァプ翻訳師の生涯と事績を論ずる上で基礎となる重要な資料であるので、ここにその全体を訳出紹介しておく。

「①パツァプ・ニマタク (sPa tshab Nyi ma grags) は、ペンユル ('Phan yul) にパツァプ上下二地 (sPa tshab stod smad gnyis) があるうちの土地の人である。②青年時代にカシュミールに赴き、サジヤナ (Sajjana) の二人の息子等の多くのパンディタから法を聴聞し、二十三年間修学なさってから、③チベットに戻られた時、プランの僧衆 (sPu hrangs pa'i dge 'dun) が、「パククル」という大きなトルコ石 (g-yu bo che phag skur zer ba zhid) を [パツァプに] 贈って、プールナヴァルダナ (Gang ba spel, \*Pūrṇavardhana) により著作された『俱舍論』の註釈 (P5594/D4093) を翻訳するよう請願したので、正しく翻訳した。④ペンユルに赴いた時、[彼の] 教化対象 (=弟子) は余り多くなかったので、善知識シャルパワ (Shar pa ba, i.e., Sha ra ba Yon tan grags, 1070-1141) は、自分のところの僧侶を多数彼の下へ中観を学びにやったので、それ以来、中観の講義 ('chad nyan) がよく定着し、僧侶を多数抱えるようになった。⑤『根本中論』、『入中論』、『四百論』の三つ (rTsa 'Jug bZhi gsum) や『六十頌如理論』などに対する尊師月称により著された註釈を正しく翻訳して、後にラモチェ寺 (Ra mo che) において、カナカヴァルマン (Ka na ka warma) と共にマガダ (Yul dbus, \*Magadha) のテキストと一致するようにも改訂した。⑥『空七十論』に対して尊師月称により著作された大註 (P5269/D3867) は、アバヤ [一カラ] (A bha ya, i.e., \*Abhayākara) とヌル・ダルマタク (sNur Dharma grags) により翻訳されたが、そのうち、パツァプは、パンディタ・ムディタ (Mudita)<sup>(53)</sup> と共にその註釈の前半部から二卷余り程 (stod nas bam po gnyis lhag tsam) の翻訳を改訂し、秘密集会の『広積明灯』 (gSang ba 'dus pa'i rGya cher 'grel pa sGron ma gsal ba, *Pradīpodyotanānāma-ṭīkā*, P2650/D1785) については、勝れた翻訳者として知られているリンチェンサンポは、[テキストを] 翻訳、校閲し決めた (bsgyur zhus gtan la phab pa) と自惚れているが、[その翻訳はテキストの本義の] 通りではないと見て、

「ニマタクにより正しく翻訳された (Nyi ma grags kyis legs par bsgyur ba'i)<sup>(54)</sup>」  
等と [翻訳後記に] お説きになり、[リンチェンサンポの翻訳に対して] 改訂を正しく行った。[秘密] 集会類の多くの小品 ([gSang ba] 'dus pa'i skor gyi phran mang po) もまた翻訳し、[秘密] 集会の講義もまたなされた。

弟子達のうち、ツァンパ・サルプウ (gTsang pa Sar spos<sup>(55)</sup>)、マチャ・チャンチュブイエシエ (rMa bya Byang chub ye shes)、タル・ユンテンタク (Dar Yon tan grags)、シャン・タンサクパ・イエシエジュンネー (Zhang Thang sag pa Ye shes 'byung gnas) らは、「パツァブの四子 (sPa tshab kyi bu bzhi)」として知られている。】(『青冊』 pp. 416.2-417.5; cf. BA, p. 342f.) [注. 番号付けは筆者]

便宜上、最後の弟子に言及した記述を除くパツァブ翻訳師自身の事績を述べた記述を六つの部分に分けて個別的にその具体的内容を検討する。

図2. 『青冊』に見られるパツァブ翻訳師の生涯と事績

	出来事と事績	概要
①	生誕	ペンユルのパツァブ上地で生誕。[それ以外に、両親や家系、生年、幼少時に関する情報はなし。]
②	青年期のカシュミール修学時代	サツジャナの二子等の多数のパンディタに師事して二十三年間修学を積んだ。
③	チベット帰国後のプランでの事績	プランの僧衆の請願に基づき、ブルナヴァルダナの『俱舎論註疏』を翻訳した。
④	故郷ペンユルでの事績	弟子が少なかったので、シャラワが自身の弟子を派遣して援助を行なった。それを機縁として徐々に弟子も増え、中観の講義も定着するようになった。
⑤	ラサでの事績	ラモチェ寺でカナカヴァルマンと共に『根本中論』や月称の一連の作品の改訂を行なった。
⑥	月称造『空七十論註』及び『広釈明灯』の改訂	注. 現行の大蔵経収録作品の翻訳後記に記載なし。

## 1. 出生地、生没年、家系

『青冊』の記述①の項目にはパツァブ翻訳師の生誕に関する記述が見られるが、出生地はペンユル (Phan yul) のパツァブ上地 (sPa/Pa tshab stod) とされる。ペンユルはラサの北方に位置する一帯を指す地名で、カダム派とも縁が深い土地であり、多くのカダム派の寺院が点在している。<sup>(56)</sup> シャラワの遺骨を奉納した「シャラ・ブムパ (Sha ra 'bum pa/ Shar 'bum pa)」と称せられる仏塔もこのペンユルの地に祀られている。それ以外に、パツァブ翻訳師の生年、両親、家系等に対する言及は一切見られず定かではない。この点で同時代に活躍し比較的情報が得られるゴク翻訳師<sup>(57)</sup>とは対照的である。但し、家系については、パツァブ翻訳師自身、『四百論広釈要義』の奥書で「大翻訳師釈迦比丘シャン・パツァブ・ニマタク」と自ら名乗っているのが、前伝期の大翻訳師シャン・イエシエデ (Zhang Ye shes sde) 等と同様に、「シャン (Zhang)」<sup>(58)</sup>と称せられる吐蕃王家の外戚氏族に属する者であり、パツァブ氏は吐蕃期の文書には政府高官として言及されている古い有力貴族の一つである。<sup>(59)</sup> 実はシャラワもまたシャンにしてパツァブ

氏の一系統である「パツァブ・ロムポ（sPa/Pa tshab rom po）」の家系に属すると云われているが<sup>(60)</sup>、史書によれば、パツァブ氏はランタルマ王の二子のうちのユムテン（Yum brtan）の外戚氏族とされる。即ち、ユムテンの一族は彼とパツァブ妃タシツォ（Pa tshab bza' bKra shis mtsho）の一子ティデ・ゴンニェン（Khri lde mgon gnyen）に由来するが<sup>(61)</sup>、母方のパツァブ氏は以後ユムテンの一族の外戚を務めた模様であり、例えば、『デウー仏教史』によれば、その子孫の一人であるティデ・アツアラ（Khri lde A tsa ra）の長男ルデ（Klu lde）は「パツァブ・ルムボジェの御子（sPa tshab rum po rje'i sras）」とされるので、パツァブ氏がユムテン一族の母系の外戚氏族であったことが確認される。それ故、「パツァブ」とは元々は氏族名であったものが、後にその一族が住し統治した地域を表わす地名としても用いられるようになったものと推定される。

パツァブ翻訳師の生年については、既にカイクにより指摘された通り、パツァブ翻訳師をアティシャの化身、さらには、月称の化身と見做す伝承があり、それに基づき、アティシャ（982-1054）の没年の翌年である1055年生年に設定する解釈が後代に起こった可能性が高い。カイクはタクツァン翻訳師（sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen, 1405-1477）の『定説全知』（*Grub mtha' kun shes*）とマントウ・ルードゥブギャンツォ（Mang thos Klu sgrub rgya mtsho, 1523-1596）の『仏教史年表』（*bs Tan rtsis*）を典拠として挙げているが（Kuijip 1985, p. 4, n. 4）、その重要性を鑑みて、ここに訳出紹介しておこう。まず『定説全知』にはこう説かれている。

「そのチョオ・チェンポ自身はペンユルのパツァブにおいて「シャン・ニマタク（Zhang Nyi ma grags）」と云うものとして生をお受けになり、……」（『定説全知』 p. 290.3-4）<sup>(63)</sup>

さらに、『マントウ仏教史年表』に引かれたダバ・シェーラプリンチェン（sGra pa Shes rab rin chen）の『定説弁別』（*Grub mtha' shan 'byed*）の記述にはパツァブを月称の化身とも見做す説が紹介されている。

「後伝期に、月称はアティシャとして生をお受けになり、帰謬派の教えを興隆しようとお考えになったけれども、その通りにはならず、アティシャ自身はパツァブ翻訳師として生をお受けになられた。」（『マントウ仏教史年表』 p. 276.10-13）

それ故、1055年という年代には神話以上の意味合いはないことは明らかである。そこでパツァブ翻訳師の年代については、史料や聴聞録、伝記類から関連する諸情報を収集して総合的に検討することが必要となっているが、その点については、所引の『青冊』の記述から重要な情報を回収することが出来る。即ち、(1)シャラワの同時代人であることと、(2)サツジャナの二人の息子に師事したことの二点である。このうち、パツァブ翻訳師がサツジャナ本人ではなくその息子に師事したことは、パツァブ翻訳師が訳出した月称造『四百論広釈』の翻訳後記に明記されている。この翻訳後記は後で訳出紹介するが、パツァブ翻訳師が自ら記した情報であるので、疑いの余地はない。また、ゴク翻訳師がサツジャナに師事したこともまた、彼が改訂あるいは

翻訳した『大乘莊嚴經論』（P5521/D4020）や『宝性論』（P5525/D4024）及びその註釈（P5526/D4025）の翻訳後記に明記されているので、これもまた確実な情報である。それ故、パツァブ翻訳師をゴク翻訳師（1059-1109）の年少の同時代人と規定した稲葉正就やカイクの解釈は全く正しいものと評価する必要があり、1055年という生年には信憑性は全くない。ここからパツァブ翻訳師の生年はゴク翻訳師の生年より一世代ほど下げる必要がある。

他方、シャラワの同時代人であることについては、パツァブ翻訳師が訳出した『大経集』の翻訳後記にシャラワが翻訳の施主を務めたことが明記されているので、史実として認めて良い。この翻訳後記は後で『大経集』の翻訳事情を検討する際に訳出紹介することにしよう。

さらに別資料に眼を転ずるならば、パツァブ翻訳師のカシュミール滞在時期がハルシャ王（Harṣa）の治世下であったことが重要な情報源となる。委細は後述するが、パツァブがカシュミールの学匠バヴィヤラージャと共に訳出したダルモッタラの『他世間成就』の翻訳後記には「カシュミール王シュリー・ハルシャデーヴァの御代」において翻訳した旨が明記されている。ハルシャ王の治世は、1089-1101年と考証されているので、パツァブ翻訳師のカシュミール滞在期間もまたそれと重なる時期である必要がある。ゴク翻訳師（1059-1109）より一世代二十歳程の年齢差があったと想定する場合、1080年頃が生年として想定されるが、その場合には仮に二十歳頃にカシュミールに出立するとすると、それは1100年頃となり、ハルシャ王の治世期間と齟齬を来す。また、パツァブ翻訳師はゴク翻訳師の共訳者であるバヴィヤラージャと翻訳を共にしたことを考えるならば、パツァブ翻訳師とゴク翻訳師の年齢差を一世代二十歳前後と考えるのは過分かもしれない。そこで、両者の年齢差を十歳程と考え、パツァブの生年を1070年頃に立てるならば、ハルシャ王の治世期間とも齟齬を来さず、むしろ的確に合致する。そこでここでは暫定的に1070年頃をパツァブ翻訳師の生年として設定しておく。

他方、パツァブの没年については定かではないが、カダム派のランルンパ・ツウンドウシヨヌ（Glang lung pa brTson 'grus gzhon nu, 1123-1193）の沙弥戒の戒師を務めたことが伝えられているので、もしそれが史実であれば、その頃までは生存していたことになる。

「十八歳の時（1140）に、チャユルワ（Bya yul ba [gZhon nu 'od], 1075-1138）の弟子ニャクモワ（Nyag mo ba）の下に赴いて居士の戒（go mi'i sdom pa, i.e., 優婆塞戒）を受けて[ニャクモワに対して]大きな敬意が生じた。それから故郷へ出家に必要なものを受け取りに戻った。御心に「パツァブ翻訳師が戒師（mkhan po, upādhyāya, 親教師）を、ネウースルパ（Ne'u zur pa [Ye shes 'bar], 1042-1118）の弟子チューキペーマ（Chos kyi padma）が導師（slob dpon, ācārya, 軌範師）をなさって沙弥となれたならば」というお考えがあったところ、河の向こう側から或る人が声を掛けてきて、「あなたが出家するならば、イェルパのパボンカ（Yer pa'i Pha bong kha）にパツァブ翻訳師が来訪されているので、そこに急いで行け」と言われたので、そこに行き、[さらにその地に] チューキペーマも招聘して

沙弥戒を受け、「ツンドゥションヌ (brTson 'grus gzhon nu)」という御名を授かった。…… 御年二十五歳の時 (1147) に、マルヌンのギャンワ (Mar snon gyi Gyang ba) においてチャドゥル (Bya 'dul, i.e., Bya 'dul 'dzin brTon 'grus 'bar, 1086-1160)<sup>(65)</sup> が戒師、チャバが尊師、トゥンパ・チューチョク (sTon pa Chos mchog) が密師 (gsang ston, raho'nuśāsaka, 屏教師) を務めて具足戒を授かった。」(『青冊』 pp. 361.11-362.8; BA, p. 297; 羽田野 1954, p. 140f.; cf. 『カダム明灯史』 p. 352)

ランルンパの沙弥戒及び具足戒の受戒の年については、史料により二つの説がある。一つは所引の『青冊』に記されるように、沙弥戒受戒の年を十八歳 (1140) 頃、具足戒受戒の年を二十五歳の年 (1147) とする説で、『カダム明灯史』はこの説に随順している。他方、『カダム珍宝史』では、出家 (= 沙弥戒受戒) の年を十九歳の年 (1141) と明記し、さらに、具足戒受戒は、二十七歳の年 (1149) に、チャドルウワ、チャバ、トゥンパ・チューチョク (bTsun pa Chos mchog) の三名の下で行なわれたとする<sup>(66)</sup>。また『ゲイエ仏教史』では、パツァブ翻訳師はランルンパの沙弥戒のみならず、具足戒の戒師をも務めたとされるので、ランルンパの沙弥戒及び具足戒の戒師とその受戒時期については伝承に混乱が見られることが分かる<sup>(67)</sup>。この点を如何に解釈すべきかが問題となるが、まずランルンパの戒名が「ツンドゥションヌ (brTson 'grus gzhon nu)」であることを鑑みるならば、それは戒師を務めたチャドゥルヅイン・ツウンドゥバル (Bya 'dul 'dzin brTson 'grus 'bar) の「ツウンドゥ」という御名の一部を取って付けたものと考えられる。『青冊』と『カダム珍宝史』では共にその戒名が授けられたのは具足戒でなく、沙弥戒の時であったとするが、具足戒受戒時の可能性も否定できない。もし沙弥戒受戒時に授けられたものであれば、沙弥戒の戒師はパツァブ翻訳師ではなく、実はチャドゥルワであった可能性も出てくるのであり、その場合には、ランルンパの沙弥戒受戒時にパツァブ翻訳師が生存していたことを示す証左にはならない。それ故、今はこのランルンパの沙弥戒授戒のエピソードの史実性は留保付きにしておきたい。

そこでそれ以外にパツァブ翻訳師の没年に関連する記述を探す必要があるが、その一つの資料として、『青冊』所収のカルマ・カギユ派の開祖トゥスムケンパ (Dus gsum mkhyen pa, 1110-1193) の略伝がある。そこでは、トゥスムケンパが二十歳の年 (1129) にトゥールンのセタン (sTod lungs Se thang)<sup>(68)</sup> でギャマルワとチャバに師事して弥勒の五法や中観東方三論を聴聞した後、シャラワとその弟子のネルジョルパ・シェーラプドルジェ (rNal 'byor pa Shes rab rdo rje) に六年間師事してカダムの法を多数聴聞し、パツァブ翻訳師からは理聚 (rigs tshogs) を聴聞したと記されている (同 p. 565; BA, p. 475)。『青冊』の記述ではこの一連の修学は二十歳から三十歳までの十年間 (1129-1139) の出来事とされるので、文脈から判断して、パツァブに師事したのはこの十年間の最後の頃であろう。ここから1130年代後半、1139年頃まではパツァブ翻訳師はまだ生存していたことが確認される。



同じく『青冊』所収のキュンツァンワ・イエシェラマ (Khyung tshang ba Ye shes bla ma, 1115-1176)<sup>(70)</sup> の略伝には、年代は明記されていないが、ギャマルワの下で具足戒を受戒した直後の記述に、パツァブ翻訳師から中観を聴聞した事情について以下のように記している。

「パツァブ翻訳師から中観を聴聞したが、[十分に] 師事する時間がなく (bsten long ma byung bar)、[代わりに] タル・ユンテンタクから [中観六] 理聚を聴聞した。」(『青冊』 p. 528.12f;<sup>(71)</sup> BA, p. 441)

ルエッグはこの一文をパツァブ翻訳師の死を示唆したものと解釈しているが (Ruegg 2000, p. 44, n. 87)、もしその解釈が妥当であれば、この記述はパツァブ翻訳師の死に触れた稀少な資料となる。ただここで long という語は、「暇、空いた時間」を意味し、bsten long ma byung ba は「師事する時間的余裕がなかった」という意味であって、多忙等の何らかの理由でパツァブに十分に師事する時間的な余裕が得られず、代わりに弟子のタルから講義を受けたとも読めるのであり、果たして本当にパツァブの死を暗示しているのかこれだけでは確定できない<sup>(72)</sup>。ちなみにこの出来事は肝心の年代が明記されていないので、何時の頃か定かではないが、仮に具足戒受戒を二十歳の時と想定するならば、1134年以降のこととなる。

それ以外にもパツァブ翻訳師の没年に関連する記述を『青冊』等の一連の史書に探したが、現状それを明確に示す記述は見出せないのも、彼の没年に関しては、大凡の概算を立てるしか手立てがない。そこで別の資料に眼を転ずるならば、例えば、『シュチェン聴聞録』に記載された『根本中論』と『四百論』の相承系譜<sup>(73)</sup>が没年考証の参考になる。

・『根本中論』の相承系譜

... Pa tshab lo tsā ba Nyi ma grags → rMa bya Byang chub ye shes → **rMa bya Byang chub brtson 'grus** (?-1185) → mTshur ston gZhon nu seng ge (ca. 1150-1210) ...

・『四百論』の相承系譜

... Pa tshab Nyi ma grags → Khu mDo sde 'bar → **rMa bya Byang chub brtson 'grus** → mTshur gZhon nu seng ge ...

ここからパツァブ翻訳師とマチャ・チャンチュプツウンドウの間にはマチャ・チャンチュプイエシェヤク・ドデバルらの一世代が介在しており、マチャ・チャンチュプツウンドウはパツァブ翻訳師の孫弟子の世代に当たることが確認される。マチャ・チャンチュプツウンドウは生年は不明であるが、1185年という没年が知られているので、それが一つの目安となる。仮に世代間の年齢差を二十年程とするならば、凡そ二世代四十年程の年齢差があったことになるので、パツァブ翻訳師の没年は1145年頃と想定される。

他方、パツァブ翻訳師の一連の翻訳後記及びその関連資料からも彼の没年に関連する重要な情報を得ることが出来る。これについては、後ほど訳出紹介するので、パツァブの没年についてはその際に再度検討することにしよう。



以上、パツァブ翻訳師の生没年を再検討したが、生年については1070年頃に設定するのが現状最も穏当な解釈かと思われる。この年代は、ハルシャ王の治世期間やゴク翻訳師の年代などが前後に動くならば、それに応じて前後するが、そうでなければ、かなり信憑性の高い年代である。<sup>(75)</sup>

## 2. 青年期のカシュミール修学時代

次に、パツァブ翻訳師のカシュミール修学時代に考察を移そう。先に引用した『青冊』の記述には、単に青年時代にカシュミールに赴き、二十三年間研鑽を積んでから帰国したと記す以外、具体的な年代は明記されていなかった。実は『青冊』にはそれとは別の箇所にパツァブ翻訳師のインド出立に言及した記述が見られるので、まずはそれを紹介しておこう。それは、ラジェ・ダワウーセル (lHa rje Zla ba 'od zer, 1063-1122) の略伝に以下のように言及されている。

「そのジェの息子であるラジェ・ダワウーセルは、御父が五十五歳の水卯年（1063）に生誕し、……十六歳（1078）になった時、ウユク（'U yug）のシャン・ギヤマワ（Zhang rGya ma ba）、カンパ・シェウ（Gangs pa She'u）、ロンソム・チューキサンポ（Rong zom Chos kyi bzang po）等から父の如く（＝父から聴聞した如く）大いに聴聞なされた。それに先立ち十四歳（1076）になった時、パツァブがインドに赴く〔際の〕随従（Pa tshab rGya gar la 'byon pa'i phyag phyi）になろうと思っていたが、……」<sup>(76)</sup>（『青冊』 p. 283; BA, p. 230）

このラジェ・ダワウーセルの生年はここに明記されているように水卯年であり、没年は後続の文章に御年六十歳の水寅年に逝去と記されている（『青冊』 p. 286.8; BA, p. 232）。この水寅年は『青冊』の直後の記述にサキャパンディタ（Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251）の生年に比定されているので、ラジェ・ダワウーセルの年代は従来1123-1182年とされ、レーリヒヤカイブもその年代を採用している。<sup>(77)</sup>しかるに、ここに師として言及されているカンパ・シェウは<sup>(78)</sup>ゴク翻訳師（1059-1109）の直弟子の一人であり、ロンソム・チューキサンポは、正確な生没年は未詳だが、マルパトワ・チューキワンチュク（Mar pa do ba Chos kyi dbang phyug, 1042-1136）<sup>(79)</sup>と同時代人と知られている。<sup>(80)</sup>また、後続の文章からチャパ（1109-1169）の師として知られているギャマルワ（ca. 1080-1150）はラジェ・ダワウーセルに師事したとされるので（『青冊』 p. 283.17f; BA, p. 230）、彼らとの師弟関係を鑑みるならば、上記干支は、グー翻訳師の考証とは裏腹に、明らかに1123-1182年ではなく、その一ラプチュン前の1063-1122年に比定しなければならない。その場合、パツァブ翻訳師のインド行きは、ラジェが十四歳の年、即ち、1076年ということになる。しかし、この年はグゲ（Gu ge）王朝のツェデ王（rTse lde）の火辰年の法輪祭（me pho 'brug gi chos 'khor）が開催された年にしてゴク翻訳師がインドに出立した年に他ならないので（『青冊』 p. 393; BA, p. 325）、恐らくは、ゴク翻訳師とパツァブ

翻訳師の両者を混同したものと考えられる。それ故、この記述はパツァブ翻訳師のインド行きを考証するための資料にはならない。

それ以外に、パツァブのインド出立に関する情報は得られないので、今は暫定的に、パツァブがカシュミールに出立したのは、ゴク翻訳師の場合と同様に二十歳前後の頃であったと想定し、1090年頃をインド出立年と設定しておきたい。その留学期間は、現行のカシュミール王統譜によれば、ハルシャ王（Harṣa, 在位1086-1101）とウッチャラ王（Uccala, 在位1101-1111）の治世下<sup>(81)</sup>に当たり、二十三年間の留学期間を経てチベットに帰国したのは、1112年頃ということになる。これより多少前後することはあろうが、大凡の年代としては間違いはなかろう。ゴク翻訳師が逝去したのが1109年なので、それより三年程後のことであった。パツァブ翻訳師が四十二歳頃のことである。

パツァブ翻訳師がカシュミールに向かった際にはガリ地方を經由したと推定されるが、彼がゴク翻訳師のようにガリ王家から後援を受けていたか否かは定かではない。先に紹介した『デウー仏教史』の他にも、『漢蔵文書集成』（1434年造）にはツェデ王時代に招聘されたパンディタと翻訳師の一覧が記載されているが、パツァブ翻訳師はその中に見出されるので<sup>(82)</sup>、ガリ王家の後援でカシュミールに留学した可能性はある。但し、パツァブがカシュミールに向かった1090年前後にはツェデは既に暗殺されており、グゲとプランが分裂していた可能性が高い<sup>(83)</sup>。グゲはワンデ（dBang lde）、プランはツェンソン（bTsan srong）の統治下にあり、前者はゴク翻訳師が『量評釈莊嚴』を翻訳する際に施主を務め黄金をカシュミールに送った人物である<sup>(84)</sup>。パツァブが二十三年間の留学を経てチベットに帰国した際には、グゲではなくプランの領主の勅命で『俱舍論』の註釈を翻訳しているの、グゲよりもプランに縁があった模様であり、プラン王家の援助を受けていた可能性が考えられる。なぜならば、プラン領主の勅命により翻訳を行なったということは、プラン領主が翻訳の施主を務めたことを含意しているからである。その委細については後述する。

カシュミール留学時代のパツァブ翻訳師の事績は伝記資料からは得られないが、我々の手元にはパツァブ翻訳師が記した一次資料が残されている。それは彼がこの時期に翻訳した一連のテキストとその翻訳事情を記した翻訳後記である。それを基礎資料として、この時代のパツァブ翻訳師の事績を追ってみよう。

パツァブ翻訳師が師事した師匠については、彼の一連の翻訳の共訳者を以て師匠と見なして良いかと考える。一覧で示すならば、以下の通りである。

図3. パツァブ翻訳師の共訳者（師匠）一覧

	共訳者	研究した作品（翻訳した作品）	備考
1	sKal ldan rgyal po (*Bhavvarāja)	<i>Paralokasiddhi</i> （他世間成就）	論理学の師。カシュミール人。 Ratnaraśmi 寺で、Harṣadeva 王の 時代に翻訳。
2	Tilakakalaśa	<i>Madhyamakāvātāra</i> （入中論 [頌]） <i>Madhyamakāvātārabhāṣya</i> （入中論釈） <i>Narakodhāra</i> （出地獄） <i>Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikāvīṃśatīvidhi</i> （吉 祥秘密集会曼荼羅儀軌二十）	中観と密教の師。カシュミール人。 入中論頌釈は Ratnagupta 寺で Āryadeva 王の時代に翻訳。残り の二作品は順に Ra mo che 寺と Bya sa 寺で翻訳。
3	Hasumati	<i>Mūlamadhyamakakārikā</i> （根本中論頌）[改訂] <i>Prasannapadā</i> （明句論）	中観の師。カシュミール人。両書 共に Ratnagupta 寺で Āryadeva 王の時代に翻訳。
4	Sūkṣmajana	<i>Catuṣṣatakaśāstrakārikā</i> （四百論頌） <i>Catuṣṣatakaṭīkā</i> （四百論広釈）	中観の師。カシュミール人。 共に Ratnagupta 寺で翻訳。
5	Muditaśrī	<i>Yuktiṣaṣṭhikakārikā</i> （六十頌如理論頌）[改訂]	中観の師。著作地等の言及無し。
6	Muditaśrījñāna <sup>(85)</sup>	<i>Āryajambhalastotra</i> （聖閻婆羅讚）	密教の師。著作地等の言及無し。
7	Alaṃkakalaśa	<i>Kramāntarbhāvanopadeśa</i> （次第内修優波提舍）	密教の師。カシュミール人。 Śri-brahmakara 寺で翻訳。
8	Puṇyasambhava	<i>Āryāparimitāyurjñānahṛdaya-nāma-dhāraṇī</i> （阿弥陀鼓音声王陀羅尼經）	密教の師。著作地等の言及無し。
9	Kanakavarman	<i>Abhidharmakośaṭīkā-lakṣaṇūsāriṇī</i> （阿毘達磨 俱舍論註疏：相隨順）広略二本 <i>Prasannapadā</i> （明句論）[改訂] <i>Madhyamakāvātāra</i> （入中論）[改訂] <i>Madhyamakāvātārabhāṣya</i> （入中論釈）[改訂] <i>Rājaparīkathā-ratnāvalī</i> （宝行王正論）[改訂] <i>Mūlamadhyamakakārikā</i> （根本中論頌）[再改訂] <i>Sragdharastotra</i> （華鬘持讚） <i>Bodhicittavivaraṇa</i> （菩提心釈）[改訂] <i>Pratiṣṭhāvidhisamkṣepa</i> （善住儀軌略撰）	阿毘達磨・中観・密教の師。カシュ ミール人。Pu rangs で『俱舍論註 疏』を翻訳、Ra mo che 寺で『明 句論』と『入中論』を改訂。'Phrul snang 寺で『根本中論』の再改訂。 それ以外の一連の典籍の翻訳は著 作地等の言及無し。
10	rGyal ba kun dga' (*Jayānanda)	<i>Mahāsūtrasamuccaya</i> （大經集）	カシュミール人。Ya gad 寺で同師 及びク・ドデバルと翻訳。

パツァブ翻訳師の師匠（＝共訳者）は彼の翻訳後記には上記十人 — Muditaśrī と Muditaśrī-jñāna を同一人物とするならば九人 — が記載されている。そのうち、ムディタシュリーとプンニヤサンバヴァの二名の出身地は不明であるが、残りの七人は何れもカシュミール人学者であることが知られている。<sup>(86)</sup> 前二者にしても出身地が同定できないだけで、同じくカシュミール人学者である可能性が高い。

一連の翻訳後記の記述から、パツァブ翻訳師がカシュミール滞在中に拠点としたのは、アヌパマ市 (Grong khyer dPe med, \*Anupama-pura/-nagara, lit. 無比なる都市)<sup>(87)</sup>であったことは疑いない。この都市の中心部に位置していたラトナグプタ寺 (Rin chen sbas pa'i gtsug lag khang, \*Ratnagupta-vihāra)<sup>(88)</sup>において、『根本中論』の改訂とそれに対する月称の註釈『明句論』の翻訳、同じく月称の著『入中論』、アーリヤデーヴァの『四百論』及びそれに対する月称の註釈などが翻訳されている。バヴィヤラージャと共にダルモータラの『他世間成立』を翻訳したのも、同じくアヌパマ市のラトナラシュミ寺 (Ratnaraśmi-vihāra)<sup>(89)</sup>においてである。翻訳時期については、『他世間成立』の翻訳後記には、「カシュミール王シュリー・ハルシャデーヴァ (\*Śri-Harṣadeva) の御代 (Kha che'i rgyal po Shri Ha ri sha de ba'i sku ring)」とある他、『根本中論』や『入中論』の翻訳後記には、「カシュミール王シュリー・アーリヤデーヴァ (\*Śri-Āryadeva) の御代 (Kha che'i rgyal po dPal 'Phags pa lha'i sku ring)」と明記されている。

これら一連の作品の翻訳順序やパツァブ翻訳師が師事した師の順序などは定かなことは分かっていないが、ゴク翻訳師の共訳者との関係を鑑みるならば、大凡の順序を付けることは不可能ではない。バヴィヤラージャとティラカカラシャの両名は、パツァブ翻訳師の共訳者にしてゴク翻訳師の共訳者でもあるが、パツァブ翻訳師の共訳者であるハスマティはゴク翻訳師の共訳者であるパラヒタバドラの弟子、スークシュマジャナはゴク翻訳師の共訳者であるサツジャナの息子である。ここからパツァブが最初に師事したのはバヴィヤラージャとティラカカラシャであり、その後、ハスマティとスークシュマジャナに師事したことが推測される。

他方、前二者のうち、バヴィヤラージャと共訳した『他世間成立』はシュリー・ハルシャデーヴァ王の時代の翻訳であるが、ティラカカラシャと共に翻訳した『入中論』はアーリヤデーヴァ王の時代の翻訳である。この同じアーリヤデーヴァ王の時代にパラヒタバドラの弟子であるハスマティと共に『根本中論』の改訂と月称註『明句論』を翻訳しているので、恐らくは、最初にパツァブが師事したのはバヴィヤラージャであり、その後でティラカカラシャ、ハスマティの順に師事したものと推定される。中観の前に論理学を最初に研究したのは、恐らくは当時の哲学文献 (ダルシャナ) 修学の一般のカリキュラムに従ったものと推察される。

翻訳後記に言及されるハルシャデーヴァ王とアーリヤデーヴァ王の関係が定かでないが、自然に考えるならば、両者は別人であり、前者の後に後者が登位したと考えられる。しかるに、従来のカシュミール王統史の研究によれば、アーリヤデーヴァ王の名前はカシュミール王の系譜に見出されず、ハルシャデーヴァ王の後に登位したのは、ウッチャラ王とされるので、ノードゥは、アーリヤデーヴァ王はハルシャデーヴァ王と同一人物であり、Harṣa と Ārya の間に発音上の混同が起こったものと解釈している。<sup>(90)</sup>しかし、Harṣa と Ārya とでは明らかに発音が異なるので、些か強引すぎる解釈である。パツァブ翻訳師のカシュミール滞在期間は、前述したように、1090-1112年頃と推定されるが、彼の翻訳後記には、奇妙なことに1101-1111年に在位

したとされるウッチャラ王に対する言及が皆無である。その件を念頭に置くならば、アーリヤデーヴァ王はウッチャラ王の異名か、あるいは、ハルシャ王とウッチャラ王の間に登位した別の王であり、その在位期間は従来ウッチャラ王の在位期間とされてきたものに相当する可能性も出てくる。この想定が妥当であれば、パツァブ翻訳師は、ハルシャ王の在位期間（1089-1101）に『他世間成立』を翻訳し、アーリヤデーヴァ王の在位期間（1101-1111?）に一連の中観論書を翻訳したという流れになる。ただ仮にハルシャ王とウッチャラ王との間にこれまで知られていなかったアーリヤデーヴァ王の存在を認めるとこの周辺のカシュミール王の系譜を見直す必要性が生ずるので、この件は慎重な検討が必要である。今は確言を控え可能性を示唆するに留めておきたい。

この時代に、後代パツァブの学統で最も重要視された rTsa 'Jug bZhi gsum と総称されることになる中観三論書、即ち、『根本中論』（*dBu ma rtsa ba shes rab*）、『入中論』（*dBu ma la 'jug pa*）、『四百論』（*bZhi brgya pa*）は月称の註釈と共に全てこのアヌパマ市において訳出されており、パツァブ翻訳師の修学時代において最も重要な時期に当たる。

以上、一連の翻訳後記を資料としてカシュミール時代の翻訳場所や翻訳時代が知られている諸作品の翻訳順序を検討した。次に、各々の翻訳後記の内容を検討することで、もう少し詳しく個々のテキストの翻訳事情について検討しておこう。

#### (1) カシュミール時代における論理学研究：バヴィヤラージャの下での修学事情

まず最初に、カシュミール修学時代の最初期に師事したと推定されるバヴィヤラージャの下での修学事情について検討しておこう。彼と共訳した『他世間成立』の翻訳後記には以下のよう記されている。

「[カシュミールの]大都市アヌパマ (Grong khyer chen po dPe med, \*Anupama-mahāpura/-mahānagara) の中央、ラトナラシュミ寺 (\*Ratnaraśmi-vihāra) において、カシュミール王シュリー・ハルシャデーヴァ (Śrī-Harṣadeva) の御代に、カシュミールの大パンディタ・バヴィヤラージャ (sKal ldan rgyal po, \*Bhavyarāja) と、チベットの翻訳師比丘パツァブ・ニマタクにより翻訳された。」(P5749, 267b6-7; D4251, 249a7-b1; N, ze, 270a3-4; G, ze, 356b2-3)<sup>(92)</sup>

この『他世間成立』の翻訳はパツァブ翻訳師の一連の翻訳の中でも最も初期に属するものである。所引の後記に明記されているように、ハルシャデーヴァ王の時代（1089-1101）に翻訳された。パツァブ翻訳師がカシュミールを来訪したのは1090年頃であるが、最初の数年は現地の口語や梵語の習得に費やされたであろうから、1090年代後半頃の翻訳と推定される。このことは、パツァブ翻訳師が論理学の研究を以て仏教教学研究を開始したことを示唆しているが、ダルマキールティ以後の仏教教義文献は多かれ少なかれダルマキールティが確立した仏教論理学



を前提としており、その知識なしには十分な理解は不可能であるので、そのことを念頭に置いたものと考えられる。同様の事情はゴク翻訳師の場合にも言えるのであり、ゴク翻訳師もまた、このバヴィヤラージャの下でダルマキールティの『量評釈』の改訂とプラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta) の『量評釈莊嚴』 (*Pramāṇavārttikālaṃkāra*, P5719/4221) の翻訳、ダルモータラの『アポーハ論』 (*Apoha-nāma-prakarāṇa*, P5748/D4250) と『刹那滅成立』 (*Kṣaṇabhaṅgasiddhi*, P5751/D4253)、シャンカラナンダナ (Śaṅkaranandana) の『関係成立』 (*Pratibandhasiddhi*, P5755/D4257) の翻訳に従事している。<sup>(93)</sup> パツァプ翻訳師がバヴィヤラージャに師事したのは、ゴク翻訳師が同師の下で上記一連の訳業を完成して師の下を去ってからのことであろう。なお、このバヴィヤラージャは、「戒師 (mkhan po)」ではなく、「大パンディタ (paṇḍita chen po)」という肩書が与えられているので、恐らくは仏教徒ではなく、バラモン教徒であったと推定される。<sup>(94)</sup>

なお、所引の後記には「比丘」という肩書がパツァプ翻訳師に付記されていることから、この頃には既に具足戒を受戒した出家者であったことが分かる。パツァプ翻訳師の受戒事情については殆ど情報が無いので委細は不明であるが、ゴク翻訳師の場合と同様にカシュミールに出立する前にチベットにおいて既に具足戒を受戒していたか、あるいは、カシュミールに到着してから間もなく受戒したものと思われる。遅くとも本書が翻訳された1090年代後半頃までには具足戒を受戒して比丘となっていたことは疑いない。

## (2) カシュミール時代における中観研究

バヴィヤラージャの下で論理学を研究してから、ようやく中観研究に着手したものと思われるが、カシュミール時代のパツァプ翻訳師の中観学の師として確定することが出来るのは、ティラカカラシャ、ハスマティ、スークシュマジャナの三名である。ティラカカラシャの下では『入中論』、ハスマティの下では『根本中論』及びその月称註、スークシュマジャナの下では『四百論』及びその月称註を研究したが、それらの翻訳後記によれば、何れもアヌパマ市の中央部に位置するラトナグプタ寺で翻訳されたものである。さらに、ティラカカラシャとハスマティとの翻訳作品の後記には、それらがアーリヤデーヴァ王の御代に翻訳されたことが明記されているので、ハルシャ王の治世が終った1101年以後の訳出であることが確認される。

問題はその翻訳順序である。前述したように、この三者のうち、ゴク翻訳師の共訳者を務めたのは、ティラカカラシャのみであり、ハスマティとスークシュマジャナは、ゴク翻訳師の共訳者の弟子と息子に当たる。その点を鑑みるならば、最初に師事したのはティラカカラシャの可能性が高い。しかるに、訳出典籍の観点からは、ティラカカラシャの下で修学した典籍は月称の主著である『入中論』であるのに対して、ハスマティの下では『根本中論』とその月称註を修学しており、修学の順序としては、最初に中観典籍の根本論書である『根本中論』を月称註



と共に学び、その次に月称の主著である『入中論』の研究に入ったと考えるのが自然である。この点判断に迷うが、今は暫定的に世代の差を重視して、最初に師事したのは、ティラカカラシャと考えておきたい。ハスマティとスークシュマジャナに師事した順序は現状情報不足のため確定できないが、テキストの重要度を考えるならば、『四百論』よりも『根本中論』の研究が優先されると思われる。それ故、ティラカカラシャ、ハスマティ、スークシュマジャナの順で師事したと想定しておく。

それ以外にカシュミール時代のパツァブ翻訳師の中観の師として考えられる人物としてムディタシュリーを挙げることが出来る。パツァブ翻訳師は彼の下で中観六理聚の一つである『六十頌如理論』の改訂に従事した。その翻訳後記には翻訳の場所と時代については言及が見られないが、恐らく、カシュミール修学時代において、上記の一連の中観典籍と共に修学されたものと推定される。

### ①ティラカカラシャの下での中観の修学事情：『入中論』の研究

パツァブ翻訳師がティラカカラシャの下で翻訳した『入中論』は実は初訳ではなく、パツァブの訳出以前に既にナクツォ翻訳師ツルティムギェルワ (Nag tsho lo tsā ba Tshul khriṃs rgyal ba, 1011-1064)<sup>(95)</sup>により十一世紀中頃に翻訳されていたことが知られている<sup>(96)</sup>。従来はこのナクツォ訳をパツァブが改訂したと見なされてきており、実際、東北目録や大谷目録にはその改訂者 (Rev.) としてパツァブ翻訳師の名前が記載されている。しかるに、その翻訳後記を仔細に検討するならば、パツァブ翻訳師はその改訂には関与していないことが判明するのである。その点をまず最初に確認しておこう。まずナクツォ旧訳の翻訳後記は以下の通りである。

「インドの戒師クリシュナ・パンディタ (Kṛṣṇa-paṇḍita)<sup>(97)</sup>とチベットの翻訳師ナクツォ・ツルティムギェルワ (Nag tsho Tshul khriṃs rgyal ba) により翻訳されたものに対して、後にインドの戒師ティラカカラシャとチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより翻訳されたものの通りに些か改訂したもの。内容は十全にして語句は分かりやすいように記した。施主と福田 (yon mchod) が吉祥でありますように。」(P5261, 244b8-245a2; D om.; N, 'a, 246a6-246b1; G, 'a, 300a3-4)<sup>(98)</sup>

ここでクリシュナとナクツォ翻訳師の旧訳に対して、ティラカカラシャとパツァブ翻訳師の新訳に基づき若干の改訂を加えたことが記されているが、パツァブ翻訳師自身が改訂を加えたとは何処にも記されていない。この改訂作業を行ないこの翻訳後記を記した人物が何者かはここには明記されておらず不明であるが、彼はパツァブ翻訳師の新訳が出た後で、ナクツォ旧訳とパツァブ新訳を校合して、ナクツォ訳の改訂を行ない、それが現行の版本大蔵経に収録されたという経緯である。その意味で、現行のナクツォ旧訳とされているものは、厳密に言えば、ナクツォ翻訳師の訳そのものではなく、パツァブ翻訳師の新訳に基づき修正を加えた《ナクツォ

訳の改訂版）に過ぎない。<sup>(99)</sup>その点に留意する必要がある。

このナクツォ翻訳師はアティシヤをチベットに招聘した人物であり、アティシヤの弟子にして長年彼の通訳を務めたことから、ナクツォが翻訳した『入中論』は恐らくはカダム派を中心として伝承されたと考えられる。しかるに、結局はパツァブ翻訳師の新訳に押されて速やかに廃れたのであろう。彼の翻訳が北京版及びその系統のナルタン版、金写版大蔵経には収録されているが、デルゲ版とその系統のチョーネ版大蔵経には収録されていないことはそのことを示唆している。

他方、パツァブ翻訳師が訳出した『入中論（頌）』の翻訳後記は以下の通りである。

「カシュミール国のアヌパマ市の中心、ラトナグプタ寺において、カシュミール王シュリー・アーリヤデーヴァの御代に、インドの戒師ティラカ [カラシャ] (Tilaka[kalaśa]) とチベットの翻訳師大徳パツァブ・ニマタクによりカシュミールのテキストと一致するように翻訳された。…… [中略] ……ここで註釈 (= 『入中論釈』) の著作後記と翻訳後記において共通のものを記載したのは、根本偈を別個に訳したのものと註釈の中の根本偈の二つを結び付けて [一緒に] 校閲したことを含意しているのである。」(P5262, 264b5-8; D3861, 219a5-7; N, 'a, 266a2-5; G, 'a, 324a5-7)<sup>(100)</sup>

これによれば、パツァブ翻訳師はカシュミールの写本に基づきこの『入中論』を翻訳したことが分かる。これは後にチベットのラモチェ寺において別の写本に基づき改訂されることになるが、それについては後で検討しよう。ここにはナクツォ訳に対する言及は全く見られないので、恐らくパツァブ翻訳師はその存在自体を知らなかったものと推察される。また最後の一文は、『入中論釈』の著作後記と翻訳後記もこの『入中論（頌）』のそれと共通しており、偈頌と偈頌を含む自註が同時に翻訳されたことを示している。実際、『入中論釈』の翻訳後記は、多少の語句の異同は見出されるが、ほぼ同一の内容を示しているので、その訳出紹介は割愛する。<sup>(101)</sup>

この『入中論』の翻訳で共訳者を務めたティラカカラシャは、前述したように、ゴク翻訳師の共訳者にして師の一人であるが、ゴク翻訳師はこの師の下で、主に般若学と菩薩行論の研究を行ない、ディグナーガ (Dignāga) の『般若要義集成』(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha, P5207, 5870/D3809)<sup>(102)</sup> や、それに対するトリラトナダーサ (Tirratnadāsa) の註釈『般若要義集成註解』(Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahavivaraṇa, P5208/D3810) の翻訳、シャーンティデーヴァの『集学論』(Śikṣāsamuccaya, P5335, 5336/D3939, 3940) の改訂などを行ったことが知られている。<sup>(103)</sup>

ティラカカラシャは後にチベットを来訪して龍樹に帰される『出地獄』や秘密集会タントラの儀軌である『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』など翻訳したことが知られており、パツァブ自身、後者の翻訳後記の中で「インドの戒師大パンディタ・ティラカカラシャと云う般若 [乗]・真言乗等の全てに通達した御方」と高く評価しているが、彼がゴク翻訳師とパツァブ翻訳師と

共に行なった一連の翻訳を見ただけでも、その高い学識の一端を窺うことが出来る。

一点留意すべきは、ティラカカラシャが月称の中観思想について十分に通暁していたことは疑いないが、パツァブ同様にティラカカラシャの下で修学したゴク翻訳師は月称の中観思想についてはほぼ完全な沈黙を保っていることである。この点は興味深い問題であり、ゴク翻訳師の中観の学統については未知の部分が多く謎となっているが、本稿の主題を外れるので、稿を改めて検討することにしたい。

## ②ハスマティの下での中観の修学事情：『根本中論』及びその月称註『明句論』の研究

ティラカカラシャの下で『入中論』を研究した後で、パツァブ翻訳師は恐らくはハスマティに師事して、『根本中論』を月称註『明句論』と共に修学したものと推定される。その経緯について、『根本中論』の翻訳後記には以下のように記されている。

「勝れた主宰神の主にして大王である吉祥なる神贊普（dPal lHa btsan po, alias, Khri lde srong btsan, 在位798-815）の勅命により、インドの戒師にして大乘中観派であるジュニャーナガルバと大校閲翻訳師比丘チョクロ・ルイギェルツェンにより翻訳、校閲され決択された。本書には二十七章、449偈あり、一卷半となる。

後に、カシュミールのアヌパマ市の中心<sup>(105)</sup>、ラトナグプタ寺の中央において、カシュミール人の戒師ハスマティ（Hasumati）とチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより、人民の主（=王）アリーリヤデーヴァの御代に、『[根本中論] 註：明句 [論]』と照合して改訂された。」（P5224, 22a7-b2; D3824, 19a3-6; N, tsa, 20a5-7; G, tsa, 25a3-7<sup>(106)</sup>）

『根本中論』は、後記前半部に明記されている通り、既に前伝期においてティデ・ソンツェン王の勅命によりジュニャーナガルバと大校閲翻訳師チョクロ・ルイギェルツェンにより訳出されていたが、その後、パツァブ翻訳師が『明句論』と照合しつつその改訂作業を行なったことが記されている。ここで留意されるべきは、贊普の勅命により翻訳され大校閲が既に完了し決択された欽定翻訳作品に対してパツァブが再度改訂を加えたことである。吐蕃期の習わしでは欽定翻訳は贊普の御名の下に決択された最終訳に他ならないので、それに対する改変は許されていない。一体誰の許しを得て大校閲済みの作品に対して改訂を加えたのか興味深い問題である。パツァブ翻訳師は後にラサにおいてさらに改訂を加え「大校閲（zhu chen）」を行なうが、この件については後ほど再度検討することにしよう。

同様の経緯は、『明句論』の翻訳後記からも確認されるが、多少の語句の出入りがある以外、同内容であるので、全体の訳出は割愛して、注目に値する異読のみを指摘するに留めておく。<sup>(107)</sup> まず最初に指摘すべきは、共訳者の表記に相異が見られることである。『根本中論』の翻訳後記には、Ha su ma ti と表記されていたが、『明句論』の翻訳後記には、Ma hā su ma ti と記されており一致しない。この表記の違いについて、一連の先学達は殆ど注意を払わず、両表記を無

批判的に併用してきたが、パツァブ翻訳師の著作『根本中論註疏：明灯論』の奥書には、Pan di ta Ha su matiと明記されているので、Hasumatiが正しい表記である。Mahāsumatiは、恐らく、Mahā[ha]sumati (lit. 偉大なる [ハ] スマティ) の誤記であり、語頭に mahā の語が付加されたのは、直前に付された rtog ge pa chen po (\*mahātārkika, lit. 偉大なる論理学者) という称号の影響かと思われる。それ故、語頭の mahā という語は人名の一部ではなく、あくまで尊称として捉える必要がある。

このハスマティという人物については、現行の大蔵経にはこの『入中論』の翻訳しか知られておらず、委細は不明である。ただ一点興味深い情報を『青冊』が伝えており、『青冊』所収のタンサク寺に伝承されたパツァブ翻訳師の師資相承の系譜<sup>(108)</sup>にはパラヒタバドラの弟子としてその名前を見出すことが出来る。

Thub pa'i dbang po (\*Munindra, alias, Śākyamuni) → mKhan po sGra gcan zin (\*Rāhula) → Klu sgrub (Nāgārjuna) → Zla ba grags pa (Candrakīrti) → Mañjukīrti → Devacandra → Bram ze Rin chen rdo rje (\*Ratnavajra) → Parahita → Hasumati → sPa tshab lo tsā ba

これによれば、ハスマティは、パラヒタバドラの弟子であり、ラトナヴァジュラの孫弟子に当たることになる。ラトナヴァジュラは、後述するように、サツジャナの祖父にして、パツァブ翻訳師と『四百論』及びその月称註を共訳したスークシュマジャナの曾祖父に当たる人物である。ここからハスマティとスークシュマジャナの両者に師事したパツァブ翻訳師の学統は、ラトナヴァジュラの学統に連なるものであることが確認されたことになる。

このハスマティの師であるパラヒタバドラは、ゴク翻訳師の共訳者にして師の一人として知られており、ゴク翻訳師は、彼の下でダルマキールティの『正理一滴』(P5709/D4212)と『量決択』(P5710/D4211)、ダルモッタラの『量決択註』(P5727/D4229)などの一連の論理学書を翻訳した。『大乘莊嚴經論』(P5521/D4020)の翻訳後記には、サツジャナと共に改訂者としてその名を連ねている。パツァブ翻訳師はそのパラヒタバドラの弟子筋に当たるハスマティに師事した訳で、ゴク翻訳師とはかなり多くの共通の学統を受けていることが分かる。同様の事例は、『四百論』及びその月称註の共訳者であるスークシュマジャナについても見出せるので、その件を次に検討しよう。

### ③スークシュマジャナの下での中観の修学事情：『四百論』及びその月称註の研究

『四百論』及びその月称註の翻訳は、スークシュマジャナと共に行なわれた。まず『四百論』の翻訳後記にはこう記されている。

「カシュミールのアヌパマ市の中央、ラトナグプタ寺の経堂において、インドの戒師スークシュマジャナ<sup>(109)</sup>(\*Sūkṣmajana)とチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより翻訳、校閲され決択された。」(P5246, 20a-b1; D3846, 18a6-7; N, tsha, 18a6-7; G, tsha, 21a4-5)<sup>(110)</sup>

これに対して『四百論広釈』の翻訳後記には共訳者についてももう少し詳しい情報が記されている。

「吉祥なるアヌパマ市の中央、ラトナグプタ寺の経堂において、インドの戒師スークシュマジャナと云う、無数の血統においてパンディタを引き継いだ種姓として生誕し、大バラモン・ラトナヴァジュラ（Rin chen rdo rje, \*Ratnavajra）の孫（<sup>(111)</sup>dbon po）である大バラモン・サッジャナ（\*Sajjana）の一子として善逝の教法に対して愛着なさり、自他の学説という大海の彼岸に渡られた御方と、チベットの翻訳師比丘パツァブ・ニマタクにより翻訳、校閲され決択されたものが完成した。」（P5266, 273b3-6; D3865, 239a5-7; N, ya, 264a4-6; G, ya, 325a2-5）<sup>(112)</sup>

ここにサッジャナの祖父として言及されているラトナヴァジュラは、『ターラナータ仏教史』によれば、当時のパーラ王朝仏教界を代表する「六賢門（mkhas pa sgo drug）<sup>(113)</sup>」と称せられた六人の大学匠のうち、「マガダの第一大柱（dBus kyi ka chen dang po）」と称せられた人物であり、同書の略伝の中にはサッジャナは確かにラトナヴァジュラの孫として言及されている。<sup>(114)</sup>そしてその信憑性はこのパツァブ翻訳師の記述から再確認されたことになる。

この二つの翻訳後記には、『四百論』と『四百論広釈』の両書が同時に翻訳されたとは特に明記はされていない。しかし、同一の共訳者、同一の翻訳場所で訳出されたものであるのもので、同時期に一緒に翻訳・改訂されたと考えて良からう。<sup>(115)</sup>

ここで共訳者を務めたスークシュマジャナは、現行の大蔵経では、この『四百論』及びその広註の翻訳しか知られていないが、その父であるサッジャナは、インドにおいて久しくテキスト伝承が途絶えていた『宝性論』と『法法性分別論』の復興に関与した人物として知られており、ゴク翻訳師は、このサッジャナに師事して『宝性論』及び世親釈の翻訳と『大乘莊嚴經論』の改訂に携わった。<sup>(116)</sup>パツァブ翻訳師は、そのサッジャナの息子に師事した訳で、ゴク翻訳師との間には明らかに世代の差が感じられる。<sup>(117)</sup>

#### ④ムディタシュリーの下での中観の修学事情：『六十頌如理論』[及びその月称註(?)]の研究

以上、カシュミール修学時代におけるパツァブ翻訳師の中観の師として、ティラカカラシャ、ハスマティ、スークシュマジャナの三人を紹介したが、彼らの他にもう一人カシュミール時代の中観の師と思しき人物としてムディタシュリーを挙げる事が出来る。パツァブ翻訳師は彼の下で『六十頌如理論』の改訂作業に従事したが、その翻訳後記は以下の通りである。

「インドの戒師ムディタシュリー（<sup>(118)</sup>Muditaśrī）とチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより改訂され決択された。」（P5225, 25a6-7; D3825, 22b5-6; N, tsa, 22b3-4; G, tsa, 29b3）<sup>(119)</sup>

残念ながら、この後記には翻訳場所が明記されていないので、この翻訳がカシュミールでなされたことは確証できず憶測の域に留まっている。チベットで翻訳された可能性も皆無ではな



いが、今は暫定的にカシュミール修学時代における中観研究の一環としてカシュミールにおいてなされたものと想定しておく。この点は検討課題である。

この翻訳後記に関して留意すべき点は、「翻訳 (bsgyur)」に当たる語が欠如していることである。東北目録及び大谷目録には、パツァブ翻訳師は『六十頌如理論』の翻訳者 (Tr.) と記されているが、実際には、ここに明記されているように、パツァブ翻訳師はその改訂は行なったが、翻訳は行なっていない<sup>(120)</sup>。そして、ここには翻訳者の名前は明記されていない。

そこで問題となるのはそれが誰の翻訳であるのかという点だが、実はこの『六十頌如理論』はその月称註と共に前伝期において訳出されていたことが『デンカルマ目録』と『パンタンマ目録』から判明する<sup>(121)</sup>。そこで月称の『六十頌如理論註』(P5265/D3864)の翻訳後記を見るならば、それは確かにジナミトラ、ダーナシーラ、シーレンドラボーディ、イエシェデの四名の翻訳であることが確認される。

「インドの戒師ジナミトラ (Jinamitra) とダーナシーラ (Dānaśīla) とシーレンドラボーディ (Śilendrabodhi) と大校閲翻訳師大徳イエシェデにより翻訳、校閲され決沢された。」  
(P5265, 33b3; D3864, 30b6; N, ya, 34b1; G, ya, 39b3-4; C, ya, 29a6)<sup>(122)</sup>

この事実は、『六十頌如理論』もまた同じくこの四名により既に前伝期において翻訳されていたことを示唆している。『六十頌如理論』の月称註を翻訳するのに、その註釈対象である『六十頌如理論』を翻訳しなかったとは到底考え難いからである。そして、理由は定かでないが、それを記した翻訳後記の部分が何時しか脱落して現行の版本に見られる形になったのである。

他方、パツァブ翻訳師は『根本中論』や『四百論』の改訂ないし翻訳を行なう際に、何れもその月称註を照合し併せて翻訳も行なったが、その事実を鑑みるに、この『六十頌如理論』の改訂を行なう際にも、その月称註と照合し併せてその改訂を行なった可能性が考えられる<sup>(123)</sup>。現行の『六十頌如理論註』の翻訳後記にはその記述を欠いているが、それは版本編纂時に脱落ないし削除された可能性も否定できない。さらに、先に紹介した『青冊』の記述によれば、パツァブ翻訳師はこのムディタシュリーと共に、『空七十論』をその月称註と共に前半部から二巻余り改訂したとされる。同様の例は他にも数例確認できるので、後で纏めて検討しよう。

パツァブ翻訳師は、他にもムディタシュリージュニャーナ (Muditaśrijñāna) という人物と共にチャンドラゴーミンの『聖閻婆羅讚』(Āryajambhalastotra, P4566/D3748) というタントラ積部所収の小品を翻訳している<sup>(124)</sup>。この人物が『六十頌如理論』の共訳者と同一人物であれば、この密教の小品もカシュミール時代に翻訳された可能性がある。但し、別人の可能性もあるので、確言は控えておく。

このムディタシュリーについては詳しいことは分かっていない。現行の大蔵経には『六十頌如理論』の共訳者として登場するだけだからである。ノードゥが纏めた共訳者一覧の中にはカシュミール人には数え入れられていない<sup>(125)</sup>。他方、ムディタシュリージュニャーナという人物は、



上述の『聖閻婆羅讚』の他にも、ラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）に帰される『五守護儀軌』（*Pañcarakṣāvidhi*, P3947/D3126）の翻訳にも関与しており、密教の方面での活動が知られている。マルパトワ・チューキワンチュク（Mar pa do ba Chos kyi dbang phyug, 1042-1136）の共訳者としてムディタシュリージュナ（Muditaśrijña）という人物がおり、『薄伽梵吉祥上樂金剛飛行成就法』（*Bhagavacchriśambaravajragaruḍasādhana*, P4615/D om.）という密教関係の小品を翻訳しているが、その翻訳後記には「ネパール人の戒師（Bal po'i mkhan po）」とあるので別人であろう。<sup>(126)</sup>

### (3) カシュミール時代における密教研究

パツァブ翻訳師のカシュミール修学時代では、最初に論理学研究から入り、その次に中観研究に集中したと推定されるが、翻訳後記の記述から、カシュミール滞在中に既に密教の研究にも着手していたことが窺われる。例えば、パツァブ翻訳師は、アランカカラシャ（Alaṃkakalśa）<sup>(127)</sup>と共に『次第内修優波提舍』という密教の小品を翻訳しているが、その翻訳後記によれば、この作品はブラフマーカラ寺において翻訳された。

「法の基、三宝の所依、吉祥なるブラフマーカラ寺（dPal Tshangs pa 'byung ba'i gtsug lag khang, \*Śrī-Brahmākara-vihāra?）<sup>(128)</sup>において、インドの戒師アランカカラシャとチベットの翻訳師大徳ニマタクにより翻訳された。」（P2677, 168b1-2; D1812, 148b3-4; N, rgyud gi, 166a6; G, rgyud gi, 216b4）<sup>(129)</sup>

この寺院の所在地は不明であるが、寺名から判断して、恐らくはチベットの寺院ではなくインドの寺院である。現在知られている資料に依る限り、パツァブ翻訳師がカシュミール以外のインドないしネパールで修学したことは知られていないので、カシュミール寺院の一つと推定される。この推定が妥当であれば、パツァブ翻訳師は、カシュミール滞在中にアランカカラシャに師事して密教研究に従事したことを示す一証左となる。

共訳者のアランカカラシャは、『次第内修優波提舍』の翻訳以外にも、『大瑜伽怛特羅吉祥金剛鬘広注深義註釈』（*Śrīvajramālāmahāyogatantraṭīkā gambhīrārthadīpikā*, P2660/D1795）という密教の著作が現行の大蔵経に収録されている他、梵文のみに残されている *Yoginīsañcāra-tantra-ṭīkā* という著作も知られている。<sup>(130)</sup> 『大瑜伽怛特羅吉祥金剛鬘広注深義註釈』は、アランカカラシャ自らがテンパ翻訳師ツルティムジュンネー（sTeng/sTengs pa lo tsā ba Tshul khriṃs 'byung gnas, 1107-1190）を共訳者として訳出したが、『青冊』にはテンパ翻訳師の略伝が収録されている。<sup>(131)</sup> アランカカラシャの年代を考証する上で参考になるので、関連する彼の事績を追跡してみよう。それによれば、テンパ翻訳師は、カシュミールの文法学者トリローチャナ（\*Trilocana）<sup>(132)</sup>の家系に属するパンディタ・アランカデーヴァ（Kha che sPyan gsum pa'i brgyud pa paṇḍi ta A langga de ba）という人物と共に多数の顕密の典籍を翻訳したと云われている。現

行の大蔵経には四点の作品がアランカデーヴァの翻訳として記載されているが、その共訳者は何れもこのテンパ翻訳師に他ならない。その中には、グナプラバ（Guṇaprabha）の『律経註現説自解説』（*Vinayasūtravṛṭṭy-abhidhāna-vyākhyāna*, P5621/D4119）のような律典やハリバツタ（Haribhaṭṭa）の『獅子師本生鬘』（*Haribhaṭṭajātakamālā*, P5652/D4152）のような本生譚も含まれており、アランカデーヴァが顕密に通暁した学者であったことを示唆している。テンパ翻訳師は合計十五年インドで修学を積んだ人物であり、『青冊』にはその間師事したパンディタ達の名前が列挙されているが、その中にはアランカデーヴァは記載されているが、アランカカラシャの名前は見出され<sup>(133)</sup>ない。アランカデーヴァはカシュミールの学者であり、名前もアランカカラシャと類似している<sup>(134)</sup>ので、これを念頭に置いて、ノードゥはアランカカラシャとアランカデーヴァを同一人物と考証している<sup>(134)</sup>。

アランカデーヴァの没年は定かではないが、テンパ翻訳師はこのアランカデーヴァの下で『大毘婆娑論』（*Bye brag bshad pa chen mo*, \**Mahāvibhāṣā*）を三年間修学し、チベットにもその梵本を請来してアランカデーヴァと共に三分の二程翻訳したところで、師が逝去したため完訳に至らなかった旨が『青冊』に記されて<sup>(135)</sup>いる。ここからアランカデーヴァがテンパ翻訳師と共にチベットを来訪したことが判明するが、テンパ翻訳師は十九歳（1125）頃にインドに出立して以後計十五年程インドで修学し、その後さらにこのアランカデーヴァの下で三年間『大毘婆娑論』を学んだ後のことであるので、その没年は凡そ1145年頃のことかと推定される。それ故、アランカデーヴァとパツァブ翻訳師はほぼ同世代であり、年代的には、アランカデーヴァがアランカカラシャと同一人物であっても不合理は来さない。但し、deva と kalaśa の綴りの違いは無視することは出来ず、依然としてこの両者を同一人物と確定する決め手に欠けるので、今は確言を控え、今後の検討課題として残しておきたい。

他方、カシュミール留学中に密教を修学した可能性のある師としては、もう一人、プンニャサンバヴァ（Puṇyasambhava）を挙げることが出来る。パツァブ翻訳師はこの人物と共に『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』（*Āryāparimitāyurjñānahṛdaya-nāma-dhāraṇī*, P363, 475/ D676, 850）を翻訳したが、その翻訳後記には翻訳場所やこの人物の委細は記されておらず、チベットで翻訳された可能性<sup>(136)</sup>もある。現行の大蔵経には、プンニャサンバヴァの翻訳はこの作品しか収録されておらず、彼の人物像については『青冊』等の史書からも情報を得られないので委細不明である。

## サツジャナの二人の息子について

以上、カシュミール時代におけるパツァブ翻訳師の修学事情を概観した。この時代に翻訳された一連の作品の翻訳後記から、カシュミール滞在中に中観のみならず論理学や密教の研究にも着手していたことが明らかになった。そこで最後に、『青冊』に見られるパツァブ翻訳師が師

事した「サツジャナの二人の息子」という記述について検討しておこう。パツァプ翻訳師がサツジャナの息子であるスークシュマジャナに師事したことは『四百論広釈』の翻訳後記から確認された。しかし、それ以外にパツァプ翻訳師が師事した一連のカシュミール・パンディタの中にはサツジャナの息子に相当する人物は見出せないので、パツァプ翻訳師が師事したサツジャのもう一人の息子が誰であるのかという問題が残されている。

これに関連して、シャーキャチョクデンの『中観思想史』には、パツァプ翻訳師はカナカヴァルマン等の三人のパンディタをチベットに招請した記<sup>(137)</sup>されており。そのうちの二人がカナカヴァルマンとティラカカラシャであることは彼らがチベットでパツァプと共訳を残していることから想像が付くが、ここでもう一人の人物が見出せない。つまり端的には、サツジャナの息子であり、かつ、チベットを来訪したカシュミール人学者がいるはずなのである。

この問題を解決する鍵は、サツジャナが息子に送った『息子への手紙』(Putralekha, P5687/D4187) という作品にある。この作品は、蔵訳のみに残されているが、サツジャナがチベットに滞在している息子に対して送った書簡であり、マハージャナ (Mahājāna) というカシュミール・パンディタとマルパトワ・チューキワンチュク (1042-1136) により翻訳されたものである<sup>(138)</sup>。そして、このマハージャナという人物は実はこのサツジャナのもう一人の息子の可能性が高いのである<sup>(139)</sup>。

『ターラナータ仏教史』には、先に言及したように、ラトナヴァジュラ→マハージャナ→サツジャナという親子関係が記されていた。つまり、マハージャナはサツジャナの息子ではなく父の名として見出される。この点が従来混乱を招く原因となってきたが、父と同名の息子がサツジャナにいたと想定するならば、この問題は速やかに解決することになる。仮に『息子への手紙』の著者であるマハージャナがサツジャナの父であるならば、サツジャナの父はチベットを来訪して、息子のサツジャナが孫のスークシュマジャナへ送った書簡を蔵訳したことになるが、その可能性は皆無でないにせよ、あまりありそうには思えない。なぜならば、スークシュマジャナがチベットを来訪した証左は全くなく、またカシュミールにいるならば、わざわざサツジャナが手紙を書く必要性がないからである。それよりも、サツジャナに二人の息子がいたという『青冊』の記述を鑑みるならば、そのサツジャナの息子にしてスークシュマジャナの兄弟である人物はチベットを訪れ、そして父が自分に送った手紙を受け取り、さらには、それを自ら蔵訳したと考えるのが自然であろう。その人物こそがマハージャナに他ならない。実際、この「マハージャナ」という名前はスークシュマジャナと対比させるならば非常に示唆的である。即ち、mahā は「大きい、偉大な」という意味、sūkṣma は「小さい、繊細な」という意味であり、マハージャナは兄（大人、年長者）、スークシュマジャナは弟（小人、年少者）であることを示唆しているからである<sup>(140)</sup>。実際、マハージャナはゴク翻訳師の共訳者でもあるので、スークシュマジャナより年長であることは疑いない<sup>(141)</sup>。

この想定が妥当であれば、パツァブ翻訳師はカシュミール滞在中にスークシュマジャナのみならず、このマハージャナにも師事し、かつ、マハージャナはチベットを来訪しているので、「サツジャナの二人の息子」と「パツァブがチベットに招聘した三人のパンディタ」を充足する最後のピースが揃ったことになる。

但し、この場合には問題が一つあり、パツァブ翻訳師がマハージャナに師事したことを示す痕跡が現行の大蔵経所収の一連の作品に見出されないことである。<sup>(142)</sup>つまり、パツァブ翻訳師の一連の翻訳作品にはマハージャナとの共訳が全く見出されない。この点を如何に解釈すべきかが最後の難問となるが、実はこの問題を説く鍵は、同じく所引の『青冊』の記述⑥の中に潜んでいる。それについては後ほど纏めて考察することにしよう。

ちなみに、マハージャナがサツジャナの息子にしてパツァブ翻訳師の師であることは、リクルが『太陽光目録』に明記している。

「その（＝ラトナヴァジュラ）の孫のサツジャナにゴク翻訳師は師事し、その息子のマハージャナにペンユルのパツァブ・ニマタクは師事した。」（『太陽光目録』 p. 245.3-4）<sup>(143)</sup>

それ故、パツァブ翻訳師はサツジャナ家のうち二人の息子を共訳者としたことになるが、ゴク翻訳師は父と長男を共訳者としたので、両者の年代差が再確認される。

このように、パツァブ翻訳師はカシュミールのアヌパマ市を主要な活動拠点としてバヴィヤラージャ、ハスマティ、ティラカカラシャ、スークシュマジャナ、アランカカラシャ等の一連のカシュミールの学匠に師事して主に月称の中観論書の研究と翻訳に従事したが、その期間は、実に「二十三年」の長きに渡るものであった。これはゴク翻訳師の十七年間という留学期間をも凌ぐ長さである。この二十三年という年数を伝える現状最古の史料は『ニャン仏教史』であるが、その記述は『プトゥン仏教史』や『青冊』等にも踏襲されており、特に疑う根拠もないので、それを前提として年代考証を行なうならば、パツァブ翻訳師は、1070年頃に生誕、二十歳の1190年頃にハルシャ王（在位1089-1101）治世下のカシュミールに出立、二十三年間滞在した後、1112年頃にチベットに帰国したという流れになる。それ故、彼のカシュミール留学期間は、凡そ1090-1112年頃に立てられる。

この年代考証の妥当性を検証する為に、ゴク翻訳師の事績と照合するならば、ゴク翻訳師のインド留学期間は1076-1092年の十七年間であるが、パツァブ翻訳師のカシュミール出立はゴク翻訳師のチベット帰国の二年程前となるので、両者がカシュミールで邂逅した可能性は皆無ではないにせよかなり低い。そして、パツァブ翻訳師が二十三年間の留学を終えてチベットに帰国したのは1112年頃であるが、その三年程前の1109年にはゴク翻訳師は既に逝去していた。それ故、両者が修学した場所や師事したパンディタはかなり重なり合うが、時期が丁度ずれているので、両者に面識があった可能性はほぼ皆無に近いことになる。実際、両者に面識があった

ことを示す資料は全く見出されないが、このことはまさに上記の年代考証の妥当性を示す一傍証となっている。

### 3. チベット帰国後の弘法活動

#### (1) ガリ地方のプランにおける弘法活動

このように、パツァプ翻訳師は、1112年頃、恐らくは四十歳過ぎの時にチベットに帰国したと推定されるが、その際、ガリ (mNga' ris) 地方のプラン (Pu rangs/hrangs) を經由してチベットに戻ったことが彼のプールナヴァルダナ造『阿毘達磨俱舍論註疏：相隨順』(P5594/D4093, 以下、『俱舍論註疏』) の翻訳後記の記述から確認される。

「尊師プールナヴァルダナ (Gang ba spel ba, \*Pūrṇavardhana) と云う阿毘達磨の大学説という大海の彼岸に到達した御方により著作された『阿毘達磨俱舍論註疏：相隨順』と云われるこの [作品] は、カイラス大雪山 (Gangs ri chen po Ti se)<sup>(145)</sup> とマナサロワル湖 (Yid bzhin gyi mtsho, alias, Ma pham g-yu mtsho, \*Mānasarovar) の南側、ガンダマータナ大山 (ri bo chen po sPos kyi ngad ldang pa, \*Gandhamādana, 香山)<sup>(146)</sup> の付近であるプラン (Pu rangs) の地において、僧侶を主とする百人の者と僧侶一般がトルコ石 [二語語義不明] (g-yu phag sgur)<sup>(147)</sup> 等を献上し、勅命により招請されて (bkas gnyer nas)<sup>(148)</sup>、インドの戒師カナカヴァルマンとチベットの翻訳師パツァプ・ニマタクにより翻訳されたものである。」  
(P5594, 391a1-4; D4093, 322a3-5; N, nyu, 375b3-6; G, nyu, 501a5-b2)<sup>(149)</sup>

前掲の『青冊』の記述③は内容から判断してまさにこの翻訳後記を受けたものであることは疑いない。この後記によれば、この『俱舍論』の註釈は、プランの僧衆の請願に加え、「勅命 (bka')」により訳出されたものであることが注目に値する。これが誰の勅命であるかが問題であるが、所引の翻訳後記の直後に付加された三偈からなる追記によれば、「領主ユンテンニマ (sa bdag Yon tan nyi ma)」なる人物の勅命であったことが判明する。プランの王統譜にはその名を見出すことは出来ないが<sup>(150)</sup>、偈中の「領主ユンテンニマという菩薩の氏族、法律 (bka' khrims) を正しく制定し、法を有する者のお言葉の光により、統治下の教化対象の迷乱の闇を払拭し、……プラン三衆の僧衆を仏法の戒律 (chos khrims) という薬により癒した」という一文から判断して、プランの王族であることは疑いない。<sup>(152)</sup> ヴィタリによれば、十一世紀から十二世紀始め頃のプランの王族の系譜に何代か欠落があるとのことなので (Vitali 1996, p. 365)、丁度、その欠落分に当たる人物なのかもしれない。「ユンテンニマ」という名前は俗名ではなく明らかに僧籍者の法名なので、恐らくは出家した王族の一人と推定される。<sup>(153)</sup> それ故、この翻訳はプランの王族の勅命によって遂行された欽定翻訳であることになる。<sup>(154)</sup>

現行の大蔵経には、このプールナヴァルダナの『俱舍論註疏』は、同名のテキストが二つの別作品 (P5594/D4093と P5597/D4096) として収録されており、便宜上、前者を広本、後者を



略本と称しておく<sup>(155)</sup>。先に紹介したのはそのうちの広本の翻訳後記であるが、略本の翻訳後記には興味深い異読が確認される<sup>(156)</sup>。大部分の文章は一致するが、一箇所、パツァブ翻訳師の肩書に顕著な相異が見られるのである。即ち、広本では単に「チベットの翻訳師 (Bod kyi lo tsā ba)」と記されているのに対して、略本では、「大校閲翻訳師 (zhu chen gyi lo tsā ba)」と記されているのである。この肩書の相異は実はこの両者の訳出時期にも密接に関わっているが、その件については後で検討することにした。

共訳者のカナカヴァルマンは、パツァブ翻訳師の共訳者として最も多くの作品の翻訳や改訂に協力したことで知られているが、彼もまたカシュミール出身の学者である<sup>(157)</sup>。現行の大蔵経には、カナカヴァルマンが関与した翻訳は十四点あるが、パツァブ翻訳師との共訳はそのうちの実に十点を数える。その内実は先に一覧に示した通りであるが、それ以外の翻訳としては、リンチェンサンポ (958-1055) の共訳者として、『吉祥一切悪趣清浄死屍護摩儀軌』(*Śrīsarvadurgatipariśodhanapretahomavidhi*, P3459/D2632) という密教の儀軌の小品、スーリヤキールティ (Sūryakīrti) の共訳者として『無生宝蔵』(*Ratnāsūkośa*, P5239/D3839) という中観の小品、マルトゥン (Mar thung) 出身のテーパシェーラブ (Dad pa/paī shes rab) と共に『集量論』の偈頌及び自註 (*Pramāṇasamuccaya/-vṛtti*, P5700, 5702/ D4203, om.) の翻訳にも従事したことが知られている。このテーパシェーラブは、『青冊』に言及されている通り (同 p. 399.15)、ゴク翻訳師も参加したツェデ王の火辰年の法輪祭 (1076年) の参加者の一人であり、ゴク翻訳師の同世代人と考えられるが、テーパシェーラブやリンチェンサンポとの共訳者であることを鑑みるに、カナカヴァルマンはパツァブ翻訳師よりも確実に一世代は年長の同時代人と考えられる。パツァブ翻訳師とは、この『俱舍論』の註釈の他にも、直後に紹介するように、『根本中論』及びその月称釈、『入中論』、『宝行王正論』などの重要な中観典籍の改訂や一連の密教の小品の翻訳に関与しており、顕密の種々の分野に通達した勝れた学者であったことが窺われる。

問題はパツァブ翻訳師がカナカヴァルマンに出会い師事した時と場所である。パツァブがカナカヴァルマンと共訳した十作品うち、少なくとも六つは翻訳後記からチベットで翻訳されたことが知られている<sup>(158)</sup>。残りの四つは著作地が明記されておらず、カシュミールで翻訳されたのかチベットで翻訳されたのか定かではない<sup>(159)</sup>。後代のシャーキャチョクデンの『中観思想史』では、カナカヴァルマンはパツァブ翻訳師がチベットに招聘した三人のパンディタの一人とされるので、その記述が妥当であれば、パツァブ翻訳師がカナカヴァルマンに出会ったのはカシュミールということになる。しかるに、史書にはカナカヴァルマンはツェデ王の時代にガリに招聘された多数のパンディタの一人として言及されており<sup>(160)</sup>、実際、リンチェンサンポの共訳者の一人であることからそれは史実であったと考えられる。さらに、仮にカシュミール修学時代においてパツァブ翻訳師がカナカヴァルマンに師事したのであれば、翻訳後記にその旨が記されても然るべきであるが、実際にはその痕跡は全く見出されない。以上の一連の理由によりパ

ツァブ翻訳師がカナカヴァルマンに初めて出会ったのはガリ地方であったと考証される。

## (2) 中央チベットにおける弘法活動

その後、パツァブ翻訳師はカナカヴァルマンと連れ立って中央チベットに向かったと思われるが、その後の事績については、『青冊』では、④故郷ペンユルでの事績と⑤ラサでの事績の二項目に分けて解説されている。『青冊』の記述が時系列を反映しているのであれば、パツァブ翻訳師は最初に故郷のペンユルに帰郷したが弟子も少なかったので、見かねたシャラワが自分の弟子を派遣して徐々に中観の講義が定着するようになり、その後、ラサでカナカヴァルマンと共に『根本中論』や『明句論』、『入中論』等の改訂に取りかかったという流れになる。但し、それが事実を反映している保証はなく、むしろ逆に、最初にラサに向かってトゥルナン寺やラモチュ寺で一連の中観論書の改訂作業を行ない、その後、故郷のペンユルでシャラワの後援を得たとも十分に考えられる。この点は検討課題であるが、今は、パツァブ翻訳師は直接にカナカヴァルマンと共にラサに向かったと想定しておきたい。なぜならば、パツァブ翻訳師がペンユルでカナカヴァルマンと翻訳活動を行なった形跡は皆無であるのに対して、ラサでは、『根本中論』や『明句論』、『入中論』といった一連の重要な中観典籍の改訂がカナカヴァルマンの協力の下に遂行されたからである。これら一連の翻訳活動はパツァブ翻訳師がカナカヴァルマンと連れ立ってプランから直接にラサに入ったことを如実に示す証左となっている。

### ①ラサにおける弘法活動

パツァブ翻訳師がラサに入った年代は定かではない。ただ、翻訳後記によればプランで翻訳されたのは『俱舎論註疏』のみであるので、『俱舎論註疏』を翻訳した後、速やかにラサ入りしたと考えられる。今は暫定的にプランに滞在したのは三年程と考え、1115年頃にはラサに入ったと想定しておきたい。現行の大蔵経収に収録されている一連のパツァブ翻訳師の翻訳作品のうち、ラサで翻訳されたことが翻訳後記から確定される作品は、『根本中論』、『明句論』、『入中論』、『入中論釈』、『出地獄』の五点である。そのうち最後の一作を除く全てはカナカヴァルマンを共訳者として改訂作業が行なわれた。以下、順にその翻訳事情を検討しよう。

まず最初に、『根本中論』の翻訳後記には、カシュミールでの改訂の記述の後にラサのトゥルナン寺における再改訂の記述が追加されている。

「後に、ラサのトゥルナン寺 (Ra sa 'Phrul snang gi gtsug lag khang) においてカシュミール人の戒師カナカ [ヴァルマン] (Kanaka[varman]) とその同じ翻訳師 (=パツァブ翻訳師) により大校閲 (zhu chen) がなされた。」(D3824, 19a6; PNG om., C, tsa, 19a6)<sup>(161)</sup>

ここで注目すべきは、「大校閲」という表現が見られることである。この『根本中論』は既に前伝期において大校閲済の作品であるが、パツァブ翻訳師は第一回改訂作業の際にはこの大校

関という表現は使用していなかった。しかるに、ここではその用語を明記している。その背景には如何なる事情があったのであろうか。この点が重要な検討課題となる。

他方、その註釈である『明句論』の改訂作業は同じラサでも別の寺院で行なわれた。

「後に、ラサのラモチェ寺においてカシュミールの戒師カナカヴァルマンと、チベットのその同じ翻訳師（＝パツァブ翻訳師）<sup>(162)</sup>により、インド東部のテキスト（nyi 'og shar phyogs kyi dpe）と照合して正しく改訂され決択された。

典拠など周知の通りに記した。註釈（＝『明句論』）<sup>(163)</sup>は語義の通りに翻訳したが、以後、二カ国語〔を話す者（＝翻訳師）〕が現れたならば、〔偏見なく〕公正に〔改訂を〕行なえ。〔この訳を再度〕検討するのは正しいことだ。<sup>(164)</sup>

筆受者は、「ラマ」の名前を有する者達（bla ma'i ming can dag）により〔この翻訳後記は〕<sup>(165)</sup>記された。吉祥〔あれ。〕（P5260, 225b5-7; D3860, 200a6-7; N, 'a, 227a1-3; G, 'a, 279a2-3）<sup>(166)</sup>

『根本中論』の改訂はラサのトゥルナン寺で行なわれたが、『明句論』の改訂はラモチェ寺において行なわれた。つまり根本偈と月称註の改訂は異なる場所、異なる時に行なわれたのである。さらに注目すべきは、『根本中論』の改訂では大校閲が為されたが、この『明句論』では通常の改訂に留まっており、その代わりに、『根本中論』の翻訳後記には見られない但し書きが偈頌の形で付加されていることである。そして、この但し書きはまさにこの『明句論』の改訂が大校閲でないことを示唆するものとなっている。大校閲とは最終的な改訂作業であるので、それ以上の改訂を行なうことは原則的にない。しかるに、パツァブ翻訳師はこの但し書きにおいて、自らの翻訳に対して後続の翻訳師達が改訂を更に加えるよう呼びかけており、この改訂が最終的な改訂、即ち、大校閲ではないことを自ら表明している。

他方、『入中論』の改訂については、根本偈と自註の改訂は同じラモチェ寺において同時に行なわれた点で、『根本中論』と『明句論』の場合とは事情を異にしている。その点を確認する為

「後に、ラサのラモチェ寺においてインドの戒師カナカヴァルマンと、チベットのその同じ翻訳師によりインド東部のテキストと照合して正しく改訂され決択された。ここで註釈の著作後記と翻訳後記に共通のものを記したのは、根本偈を別個に訳したのものと註釈中の根本偈の二つを合せて校閲したことを含意しているのである。」（P5262, 264b6-8; D3861, 219a6-7; N, 'a, 266a4-5; G, 'a, 324a6-7）<sup>(167)</sup>

ここにはこの根本偈と自註の改訂を同時並行的に行なったが故に、両翻訳後記には共通の文章を記した旨が明記されている。それ故、自註の翻訳後記には同様の文章が引かれている訳だが、その翻訳後記の冒頭部に根本偈の翻訳後記に見出されない但し書きが偈頌の形で付されている点が注目に値する。

「典拠など大部分経典〔の翻訳〕の通りに記した。以後、二カ国語〔を話す者（＝翻訳

師)] が現れたならば、根本偈と註釈 (= 『入中論』 根本偈と自註) は語義の通りに翻訳したが、[偏見なく] 公正に [改訂を] 行なえ。[この訳を再度] 検討せよ。』 (P5263, 411a6; D3862, 348a5; N, 'a, 414b5-6; G, 'a, 514a1-2)<sup>(168)</sup>

この但し書きは、多少の語句の出入りや脚の入れ替えはあるが、『明句論』の翻訳後記の最後に付されていたものと一致しており、『明句論』の場合と同様に、この『入中論』の改訂も大校閲が行なわれていないことを示唆している。実際、この『入中論』の根本偈及び自註の何れの翻訳後記にも、大校閲を示す記述は見出されないので、『デンカルマ目録』等の吐蕃期の目録に用いられている用語を使用するならば、「大校閲未了 (zhu chen ma bgyis pa)」と位置付けられる。ここから大校閲済みの『根本中論』と大校閲未了の『明句論』及び『入中論』偈註は実は全く異なる状況下で翻訳されたことが帰結する。

他方、同じくこのラモチェ寺では、ティラカカラシャと共に龍樹に帰される『出地獄』 (*Narakoddhāra*, P2028/D1137) という小品の翻訳及び改訂がなされた。その翻訳後記は以下の通りである。

「吉祥なるラモチェ寺においてアヌパマ市のパンディタ・ティラカ [カラシャ] とチベットの翻訳師釈迦比丘パツァブ・ニマタクにより翻訳、校閲され決択された。」 (P2028, 97b6-7; D om.; N, ka, 93a7-b1; G, ka, 120b6; C, ka, 96b2)<sup>(169)</sup>

この翻訳後記は種々の意味で興味深い情報を提供してくれる。まず第一に、この後記から、カシュミールでパツァブ翻訳師と『入中論』を共訳したティラカカラシャがラサを来訪していたことが判明する。シャーキャチョクデンの『中観思想史』には、前述したように、パツァブ翻訳師が三人のパンディタをチベットに招聘したとあるが、その中の一人がティラカカラシャであることが確認されたことになる。第二に、当時、ティラカカラシャはラサにいたにも関わらず、何故か同じくラサで遂行された『入中論』の改訂作業に関与していない。その背景に如何なる事情があったのかということは検討に値する問題である。第三に注目すべきは、「大翻訳師 (lo tsā ba chen po)」という肩書である。実はこれまで紹介してきた一連の翻訳後記に見られるパツァブ翻訳師の肩書は只の「翻訳師 (lo tsā ba)」であった。しかし、このラサにおいて初めて「大翻訳師」の肩書が登場するのである。この肩書の変化に如何なる背景があったのかということは重要な検討課題であるので、後で一節を設けて検討することにしよう。

## ②チャサにおける弘法活動

このティラカカラシャは、ラモチェ寺のみならず、チャサ寺 (Bya sa) でもナーガボーディ (*Nāgabodhi*) の『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』 (*Śrīguhyasamājamaṇḍalopāyikāvimsatīvidhi*, P2675/D1810) という秘密集会タントラの儀軌の小品を共訳しているので、パツァブ翻訳師はティラカカラシャと共にラサからチャサへ移動したことがその翻訳後記から窺われる。

「チャサ寺においてシュンキェ法師タルマドルジェ（Shung kye ston pa Dar ma rdo rje）に請願されて、インドの戒師大パンディタ・ティラカカラシャと云う般若〔乗〕・真言乗等の全てに通達した御方と、チベットの翻訳師大徳パツァブ・ニマタクにより翻訳された。」（P2675, 165b4-5; D1810, 145b2-3; N, gi, 162b6-7; G, gi, 211b4-6）<sup>(170)</sup>

ここでもまたパツァブ翻訳師の肩書が「大翻訳師」となっていることが留意される。ここで翻訳場所として言及されているチャサ寺は、ラサの南東、ヤルルン大河（Yar klungs gtsang po）の南側の流域、ツェタン（rTsed thang）の西方にある吐蕃王家と縁のある古刹である。<sup>(171)</sup>『ヤルルン仏教史』によれば、この寺院はラントルマ王の二子のうちウースン（'Od srungs）の子孫の一人であるチョガ（Jo dga'）の長男チャサ・ラチェン（Bya sa lHa chen）により新たに建立されたとされる。<sup>(172)</sup>

この周辺の経緯については、『青冊』では、秘密集会聖者流（'Dus pa 'Phags lugs）の学統を解説する章に関連する記述を見出すことが出来る。

「サムエ（bSam yes）のラツウン・ゴンモ（lHa btsun sNgon mo）が法輪祭（chos 'khor）を開催していた時分に、秘密集会聖者流（gSang 'dus 'Phags skor）に通達していたシュンケ・タルマドルジェ（Shung ke Dar ma rdo rje）<sup>(173)</sup>と、中観聖者流（dBus pa [read: dBu ma?]'Phags skor）<sup>(174)</sup>に通達していたパツァブ翻訳師（sPa tshab lo tsā ba）の二人を招聘したところ、パツァブ翻訳師は秘密集会を信解してシュンケから聴聞したが、<sup>(175)</sup>翻訳すること<sup>(176)</sup>を喜ばなかったので、パンディタ・ティラカカラシャが〔翻訳〕なされた。それから、パツァブ翻訳師は翻訳（'gyur）もまた〔秘密集会〕タントラの註釈（rgyud 'grel）を小品（phran）と共に正しく翻訳なさり、〔秘密集会タントラの〕解説（bshad pa）もまたなされた。〔しかるに〕最近に至るまで〔その〕相承（brgyud pa）があるようには見えないのである。」（『青冊』 p. 445.1-7; BA, p. 366）

所引の記述に言及されている秘密集会タントラの小品の一つが、『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』に相当することは疑いない。所引の記述の最後の一文によれば、パツァブ翻訳師の秘密集会聖者流の学統は中観帰謬派の学統とは異なり、後代に対して影響力を持たなかったことが窺われる。

ただ一点留意されるのは、翻訳後記の記述とこの『青冊』の記述には微妙なニュアンスの相異が存在していることである。即ち、翻訳後記では、シュンケ（キェ）法師の請願に基づき、パツァブ翻訳師がティラカカラシャと共に秘密集会の儀軌を翻訳したのに対して、『青冊』の記述では、逆に、パツァブ翻訳師がシュンケ法師から秘密集会を聴聞したとなっており、シュンケ法師の請願云々の話はない。さらには、ティラカカラシャがパツァブ翻訳師の代わりに『秘密集会タントラ』（P81/D442-3）を翻訳したとされるが、『秘密集会タントラ』は既にシュラツダーカラヴァルマン（Śraddhākaravarman）とリンチェンサンポにより翻訳されており、現行



の版本の翻訳後記には特に改訂者としてティラカカラシヤの名前は記されていない。この辺の事情については定かではない。

チャサ寺における『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』の翻訳は、サムエの領主ラツウン・ゴンモが法輪祭を開催していた時分とされるので、その年代について考証を加えておく。ラツウン・ゴンモは、ランタルマの二子のうちのユムテン (Yum brtan) の氏族に属するものであり、『デュー仏教史』等の一連の史書にその名を確認することが出来る。<sup>(177)</sup>サムエはこの氏族の統治下にあった土地である。ラツウン・ゴンモの正確な年代は未詳であるが、『青冊』によれば、ラ翻訳師ドルジェタク (Rwa lo tsā ba rDo rje grags, 1016?-1128/1198) の九人の大弟子 (che dgu) の一人であり、<sup>(178)</sup>パツァブ・ゴムパ (Pa tshab sGom pa, 1077-1158) の直弟子であるギェルワ・テンネ (rGyal ba Ten ne, 1127-1217)<sup>(180)</sup>は十八歳 (1144) に至るまでの三年間、チャサのチヨオ・ラチェンポ (Byas sa'i Jo bo lHa chen po) とこのラツウン・ゴンモの大臣 (blon po) を務めたと云う。<sup>(181)</sup>この両者のうちの前者は先にチャサ寺の建立者として言及したチャサ・ラチェン (Bya sa lHa chen) に他ならない。ここから、チャサ寺の建立者とラツウン・ゴンモは同時代人であり、かつ、1144年に生存していたことが確認される。<sup>(182)</sup>残念ながら、ラツウン・ゴンモの法輪祭の年代については『青冊』等の史料から情報を得ることが出来ないが、「大翻訳師」の肩書が付いた時代の翻訳であるので、比較的後期に訳されたものであることは疑いない。

### ③ペンユルのパツァブ地方における弘法活動

以上、ラサとチャサにおける翻訳活動を彼の一連の翻訳後記から検討した。それ以外に翻訳後記から中央チベットにおいて翻訳された作品として確認されるのは、ペンユルで翻訳されたアティシャ造『大経集』 (*Mahāsūtrasamuccaya*, P5358/D3961) のみである。翻訳後記によれば、この作品は、翻訳の施主をシャラワが務めその請願の下に、ジャヤーナンダ (Jayānanda)<sup>(183)</sup>、パツァブ翻訳師、ク・ドデバル (Khu mDo sde 'bar) の三名により翻訳された。<sup>(184)</sup>

「そのようなインドのテキストからチベットの文字へ翻訳された施与されるべきこの法 (= 『大経集』の蔵訳) は、至上なる大乘の随順者である釈迦上座大賢者 [シャラワ・] ユンテンタクパ (shākya'i gnas brtan mkhas pa chen po [Sha ra ba] Yon tan grags pa) のご芳志 (= ご寄付) [によるもの] である。何であれここ (= 現世) において福德となるもの、それは戒師と尊師、父と母を前提とするものである。有情の一切の集まりが無上の智慧の果報を獲得せんが為になりますように。以上は筆記者比丘クマーラブラジュニャー (Kumāraprajñā, \*gZhon nu shes rab) の手で記した。

牟尼の教説という大海の甘露の精華である、墮罪と煩惱という病を癒すこの偉大なる薬 [の如き著作] は、五百年の時 (= 末世)<sup>(186)</sup>に教法の命運を担う者である釈迦弟子ユンテンタクパ (shākya'i sras po Yon tan grags pa) が、[カシュミールの] アヌパマ

市 (dPe med grong) に生誕した鬪諍の時代 (rtsod dus, \*kaliyuga, 末世) の学者ジャヤーナンダ (rGyal ba kun dga', \*Jayānanda) に請願して、高貴なる行が衰えることなく [教法に対する] 信仰が保持されているパツァブ・ドン地方のショクの上地 (Pa tshab ldong gi sa skor (khul?) Zhogs kyi stod)<sup>(187)</sup>、聖賢の源にして上人により加持された吉祥なるヤケー大寺 (dPal ldan Ya gad gtsug lag khang chen) において、二カ国語を語り獅子吼する釈迦比丘ニマタクパ (shākya'i dge slong Nyi ma grags pa) とクの大徳ドデバル (Khu kyi ban de mDo sde 'bar) により翻訳された。それにより生じた月 [光] の如く清涼な福德により、牟尼の四衆及び一切衆生の墮罪と煩惱の苦しみが寂靜しますように。」(P5358, 230a4-b3; D3961, 198a4-7; N, khi, 224b5-225a3; G, khi, 300a6-301a1)<sup>(188)</sup>

所引の文章は散文の前半部と偈文の後半部に分けられる。前半部を記した者は文中に明記されるように、「比丘クマーラプラジュニャー (Kumārāprajñā)」と梵語で表記されているが、恐らくは、「シヨヌシェーラプ (gZhon nu shes rab)」という名のチベット人であろう<sup>(189)</sup>。他方、後半部の偈文の著者は明記されていないが、文脈から判断して、翻訳の施主を務めたシャラワ・ユンテンタクの意向を受けて直弟子の誰かが筆受者を務めたものと推察される。それは直前に言及されたクマーラプラジュニャーその人かもしれないが、委細は不明である。

翻訳がなされたヤケー寺は、ポトワ (Po to ba Rin chen gsal, 1027-1105) の高弟トルパ・シェーラプギャンツォ (Dol pa Shes rab rgya mtsho, 1059-1131)<sup>(190)</sup> により建立されたカダム派の古刹である<sup>(191)</sup>。当時、僧侶は千人程いたとされる<sup>(192)</sup>。所引の記述によれば、「パツァブ・ドン地方のショクの上地」に位置するとあるので、ペンユルに多数あるカダム派寺院の中の一つであろう<sup>(193)</sup>。

ここに引いた文章は、北京版系統の版本（北京版・ナルタン版・金写版）のものだが、デルゲ版系統の版本（デルゲ版・チョーネ版）にはかなり大きな文章の省略が見られる。例えば、所引の文章のうち、前半部の散文では、シャラワが翻訳の施主を務めたことを示す一文と筆記者を示す一文は削除されている。その後の所引の偈文は両版本に共通して見られるが、北京版系統の版本には、その直後に別の長い偈文<sup>(194)</sup>（以下、後記②と呼称）が引かれている。その偈文の内容は、文章の出入りはあるが、内容的には所引の偈文（以下、後記①と呼称）の内容と同様のことを述べているものなので、デルゲ版では重複を避ける為に削除したものと推定されるが、内容的には所引の偈文に見られない情報を提供するものも見られるので、そこから幾つか情報を採取しておきたい。

まず、所引の偈文には、「釈迦弟子ユンテンタクパ」という表現しか見られないが、後記②にはシャラワの氏族を示すものとして「パツァブ・ドンの御子 (Pa tshab ldong gi sras)」という表現が用いられている点が留意される。後記①では、「パツァブ・ドン」という語を文脈から地名と解釈したが、後記②では明らかに氏族名として使用されている。これに関連して、一連の

史書には、シャラワの家系を示す表現として「パツァプ・ロムポの氏族 (Pa tshab rom po'i brgyud)」という表現が見出されるが<sup>(195)</sup>、実は、この「パツァプ・ロムポ」という語は、後記②では後続の文章において、ヤケー寺を形容する一連の修飾辞の中に「パツァプ・ロムポの地区 (Pa tshab rom po'i khul)」というように地名として見出されるのである。この点を如何に解釈すべきかが問題となる。以上の使用例を見る限り、「パツァプ・ドン」と「パツァプ・ロムポ」はほぼ同様の意味であり、前述したように、元来氏族名であったものがその一族が住する地名としても用いられるようになったのであろう。何れにせよ、ここからシャラワがパツァプ氏の一氏族出身であることが判明するが、その場合にはパツァプ翻訳師と同一氏族や同郷の可能性も出てくるのであり、両者の関係を考える上で看過できない情報である。パツァプ翻訳師が果たしてパツァプ・ロムポに属するのかわからないが、少なくとも同じパツァプ氏に属するものであることは疑いないので、シャラワの援助は単にパツァプの翻訳師としての力量のみに基づくわけではなく、同一氏族内の地縁血縁関係に基づく可能性があり、パツァプ翻訳師の長期間に渡るカシュミール留学のための経済的支援もまた、プラン王家というよりも、むしろ、パツァプ氏族に依るものであった可能性も考えられる。

ただ他方において、シャラワがパツァプの無名時代からの後援者であったことに疑問を惹起する事実もある。それは、シャラワが翻訳の施主として登場するのは他ならぬこの『大経集』のみであることである。後述するように、『大経集』の翻訳はパツァプの最晩年にして最後の訳業と推定されるが、もし『青冊』に説かれているように、シャラワがパツァプの無名時代からの後援者であったのであれば、もっと早い段階で、そして、もっとより多くの翻訳の助力を行なってもおかしくないはずであるが、実際にはそうっていない。その場合には、パツァプの無名時代に自らの弟子を送った等のシャラワの後援に関する記述はシャラワの事績を顕彰するための後代の虚構である可能性も出てくる。この点は検討課題である。

パツァプ翻訳師の肩書については、後記①には「釈迦比丘」としか記されていないが、後記②には「至上の翻訳師」(sgra bsgyur phul du phyin pa) という尊称が付されている点が留意される。これはパツァプがこの時分には一介の翻訳師ではなく大翻訳師として認められていたことを示唆しているからである。「大翻訳師」という用語は直接的には用いられていないが、それは偈頌の字数や修辞上の理由であって、実際には大翻訳師であったと考えられる。

共訳者のジャヤーナンダは、『入中論』に対する大部の註釈 (P5271/D3870) を著した人物として知られているが、後記②に、「カシュミールのバラモン (Kha che'i bram ze)」と明記されているところから、仏教徒ではなくバラモン教徒であったことが確認される。ゴク翻訳師の師であるサツジャナやパツァプ翻訳師が師事したサツジャナの息子もバラモンであったが、当時のカシュミールには仏教徒の僧侶以外にもバラモン教のバンディタ達の中に仏教典籍を修学する一定層が存在していたことが窺われる。他方、ク・ドデバルは、聴聞録では、通常、パツァプ

翻訳師の直後に位置付けられる人物であり、パツァブより一世代若い同時代人である。パツァブ翻訳師がジャヤーナンダヤク・ドデバルと共訳したのは『大経集』の一例だけだが、ジャヤーナンダとク・ドデバルはさらに『廻諍論』（P5228/D3828）の改訂や『菩提心釈』（P2666/D1801）—パツァブ翻訳師により翻訳された偈文とは別の散文の作品—、『広破論』（P5230/D3830）、ジャヤーナンダ自身の『タルカの槌』（*Tarkamudgara*, P5270/D3869）の翻訳にも携わっている。このことを鑑みるならば、ジャヤーナンダは恐らくはク・ドデバルと同世代であり、パツァブ翻訳師より一世代後の人物と考えられる。

以上、『大経集』の翻訳後記を分析したが、同書の翻訳の経緯については、『青冊』ではシャラワ略伝の箇所以下のように記されている。

「[シャラワは] ラデン寺 (Rwa sgren) においてチョオ (Jo bo, i.e., Atiśa) の御所蔵本の中にあつた『大経集』を受け取り、翻訳の施主 ('gyur gyi sbyin bdag) を為さつて、カシュミール人ジャヤーナンダ<sup>(196)</sup>と翻訳師パツァブ・ニマタクとク・ドデバルにより翻訳された。」(『青冊』 p. 332.16-19; BA, p. 271; 羽田野1954, p. 109f.; cf. 『カダム明灯史』 pp. 467.22-468.2)<sup>(197)</sup>

この『青冊』の記述によれば、パツァブ翻訳師等が訳出した『大経集』の梵語写本はラデン寺に保管されていたアティシャ本人の御所蔵本である。この情報は『大経集』の翻訳後記には記されていないので、『青冊』の著者が別資料から得たものであるが、その情報源は不明である。

『大経集』の翻訳後記により、シャラワが翻訳の施主を務めることを通じてペンユルにおいてパツァブ翻訳師の弘法活動を支援していたことが確認されたが、『青冊』に説かれているように、シャラワがパツァブ翻訳師の下に自分の弟子を派遣した件については、同じく『青冊』所収のシャラワ略伝に同様の記述が見出される。

「パツァブ翻訳師がインドから戻られて、中観の講説を為さつたとき、[それを聴聞する] 僧侶はさほど多くはなかつたので、シャルパワ (Shar pa ba) は自分の弟子の多くの小僧を [パツァブの] 弟子に遣つた。パツァブが翻訳した中観のテキストをご覧になった時、「この [箇所] にはこのような [訳文] がくるはずだ」といって問い合せたので、パツァブが再度テキスト (= 梵本) をご覧になったところ、彼 (= シャラワ) のお言葉の通りであつた。一般に、パツァブ翻訳師の中観の講説を興隆させる称賛も多数なかり、真の助力を多数なさつた。」(『青冊』 p. 332.10-16; BA, p. 271; 羽田野1954, p. 109f.; cf. 『カダム明灯史』 p. 467)<sup>(198)</sup>

この記述の典拠としては、恐らくは先行する何らかのシャラワの伝記資料に基づくものであろうが、現状未詳である。その同定は今後の検討課題として残しておく。

以上、パツァブ翻訳師の翻訳後記及び『青冊』等の史料を資料として、中央チベットにおけ

るパツァブ翻訳師の事績を追跡した。そこからパツァブ翻訳師の中央チベットにおける翻訳活動は主に以下の三つの地域において行なわれたことが確認された。

1. ラサ（トゥルナン寺・ラモチェ寺）
2. ラサ南東のヤルルン大河流域、ツェタン西方のチャサ（チャサ寺）
3. ラサ北方のペンユルのパツァブ・ドン（ヤケー寺）

パツァブ翻訳師の翻訳後記を見る限り、パツァブ翻訳師の翻訳活動の順序は、大まかには、ラサ→チャサ→ペンユルということになる。しかし、このことは一連の翻訳作品が翻訳された順序を追跡したに過ぎず、パツァブ翻訳師の実際の活動がその通りの順序であったとは限らない。実際にはこの三つの地域の往來を繰り返していたり、さらには翻訳後記に現れない地域を来訪していたこともまた十分にありえるので、その場合には一定の活動順位を設定することは困難である。特に故郷のペンユルのパツァブに晩年に至るまで一度も足を運ぶことはなかったとは考え難い。ただそのことは現在我々に利用可能な資料からは追跡することができない事柄であるので、ここではパツァブ翻訳師の一連の翻訳作品の大凡の順序を確認できたことで良しとしておきたい。

しかしながら、実は、以上の大雑把な翻訳順序にもう少し細かい区別を立てることは不可能ではない。パツァブ翻訳師の翻訳活動を示す資料として、単に翻訳後記に見られる翻訳場所や共訳者に関する情報以外にも、もう一つ有力な情報が残されている。それはパツァブ翻訳師の「肩書」である。この肩書を示徴として、もう少し細かい翻訳活動の推移を見出すことが出来るのである。その点を次に検討しよう。

#### 4. パツァブ翻訳師の肩書の変遷 — 「翻訳師」と「大翻訳師」 —

パツァブ翻訳師の肩書は大きく二つに大別される。即ち、単なる「翻訳師 (lo tsā ba)」と「大翻訳師 (lo chen, i.e., lo tsā ba chen po)」ないし「大校閲翻訳師 (zhu chen gyi lo tsā ba)」の二つである。さらにこの肩書の直後に出家者であることを示す「大徳 (bande)」 「比丘 (dge slong)」 「釈迦比丘 (shākya'i dge slong)」などの肩書が付加されることもある。ここで「大翻訳師」とは、後伝期においては、「小翻訳師 (lo chung, i.e., lo tsā ba chung ngu)」の対比で使われる場合もあるが、諸々の用例から判断して、実質的に大校閲翻訳師の同義語と考えられる<sup>(199)</sup>。

現行の大蔵経には凡そ二十点程のパツァブ翻訳師の翻訳が収録されているが、そのうち、「大翻訳師」の肩書を有する作品は、ラモチェ寺で訳出された『出地獄』とチャサ寺で訳出された『吉祥秘密集會曼荼羅儀軌二十』の二点、「大校閲翻訳師」の肩書を有する作品は、ブランで訳出されたとされる『俱舍論註疏』略本の一点とで合計三点である。それ以外の十七点の翻訳作品のうち、「二カ国語を語り獅子吼する釈迦比丘」や「至上の翻訳師 (sgra bsgyur phul du phyin pa)」という肩書を有する『大経集』以外は、全て「翻訳師 (lo tsā ba)」の肩書が記されている。



る。ここから大雑把に、パツァブ翻訳師の訳業は(1)「翻訳師」の時代と(2)「大翻訳師」の時代に二分することが出来る。後者は、当然のことながら、前者の後の時代に位置付けられるので、ここからパツァブの一連の翻訳作品の時系列に関して大まかとはいえ一つの手掛かりを得たことになる。

そこで問題となるのは、何を契機として一介の翻訳師でしかなかったパツァブ翻訳師が「大翻訳師」や「大校閲翻訳師」の称号を得ることが出来たのかということである。これは単なる自称とは考えられないので、何らかの切っ掛けがあったことには疑いはない。

その点で注目されるのは、プランで翻訳されたとされる『俱舎論註疏』略本の翻訳後記である。そこには「大校閲翻訳師」の肩書が記されているが、その翻訳は、翻訳後記に明記されているように、プラン領主の「勅命 (bka')」によるものであった。このプラン領主を含むガリ三区域 (mNga' ris skor gsum)<sup>(200)</sup>の諸領主は、ランタルマ王の二子のうちウースンの血族の末裔であるので、前伝期の吐蕃王家に連なるものである。<sup>(201)</sup>吐蕃王朝においては大校閲翻訳師の任命は贊普の勅命によるものであったことを鑑みるに、それと同様のことが後伝期における仏教復興の主要な担い手であったガリ地方の王家により踏襲されていたと考えることは決して不可能なことではない。実際、ガリ地方の王家の庇護を受けていたリンチェンサンポやナクツォ翻訳師ツルティムギェルワ等もまた大校閲翻訳師の肩書を冠する者であったが、このことは大校閲翻訳師の任命がガリ地方の諸領主により為されていたことを示す一証左である。この点については更に関連情報を収集することで検証する必要があるが、今は暫定的にパツァブ翻訳師を大翻訳師に任命したのはガリ王家、特に、プラン領主であったと想定しておきたい。<sup>(202)</sup>

このように、パツァブ翻訳師を大校閲翻訳師に任命したのはプラン領主であったとした場合、問題はそれが何時頃の出来事であったのかということである。自然に考えるならば、カシュミールからチベットに帰国してプランに滞在していた時と考えられるが、問題はこの『俱舎論註疏』の広本の翻訳後記には単に「翻訳師」の肩書しか記されていないことである。この広本の翻訳も「勅命」によるものであったが、略本とは異なり、「大翻訳師」の肩書はまだ得ていない。つまり、広略二本の翻訳後記にはパツァブ翻訳師の肩書に相異が見られるので、この点を如何に解釈するべきかということが検討課題として浮上してくる。

この件については、二つの可能性が考えられる。第一の可能性は、パツァブ翻訳師がカシュミールからチベットへ帰国しプランに滞在していた時にプラン領主から『俱舎論註疏』の翻訳を命じられ、その完成を契機として大校閲翻訳師に任命されたという可能性である。肩書の相異については、広本を翻訳した際には翻訳師であったが、その訳業が認められて大校閲翻訳師に任命され、その後引き続き大校閲翻訳師として同地で略本の翻訳を行なったという流れになる。他方、第二の可能性は、広本の訳出後、直ちに大校閲翻訳師に任命されたのではなく、その後、中央チベットに向かい、ラサのラモチェ寺において『明句論』や『入中論』の改訂を完

遂して有力な翻訳師として認められるようになり、これを契機として、プラン領主から大校閲翻訳師に任命され、それ以後に、『俱舎論註疏』の略本の翻訳や『根本中論』の大校閲を完遂したという流れである。

そのうち、第一の可能性の場合には、プラン以降に中央チベットで行なった全ての翻訳は大校閲翻訳師としての訳業であることになるが、実際には、ラサで改訂を行なった『明句論』や『入中論』の翻訳後記には、大翻訳師や大校閲翻訳師の肩書は見出されず、前述したように、パツァブ自身、それらの改訂が大校閲でないことを示唆しているので、単なる翻訳師としての訳業と見做す必要がある。その点に齟齬を来す問題点がある。

他方、第二の可能性の場合には、現行の翻訳後記による限り、ラサで『明句論』と『入中論』の改訂を完成した後で、再び、プランに戻ってプラン領主から大校閲翻訳師に任命され、そこで『俱舎論註疏』略本の翻訳を完成し、その後再びラサに戻って、トゥルナン寺で『根本中論』の大校閲を行なったことになるが、当時のチベットの交通事情を鑑みるに、そのように何度もプランとラサとの遠距離の往來を本当に行なったのかという疑問がある。

このようにこの二つの解釈には何れも問題点があるが、今は暫定的に後者の解釈を採用しておくことにする。前者の解釈では、やはり、『明句論』や『入中論』の改訂が大校閲でないという決定的な問題点があるのに対して、後者の解釈で浮上したプランとラサとの往來の問題も決して不可能ではなく、また、同略本の翻訳は、翻訳後記の記述とは裏腹に、実際にはプランではなくラサで行なわれた可能性も否定できないからである。その場合、パツァブ翻訳師はプランに戻ることなく、ラサ滞在中に大校閲翻訳師の任命を受けたことになる。その点は憶測の域を出ないが、何れにせよ『俱舎論註疏』略本の翻訳と『根本中論』の大校閲が大校閲翻訳師任命の後の仕事であることには疑いはない。さもなくば、前者の翻訳後記に「大校閲翻訳師」と名乗ることも、後者の翻訳後記に「大校閲」を行なったと記すことも、一介の翻訳師の身分では許されることではなかった。それ故、ここでは暫定的に、ラサで『明句論』と『入中論』の改訂を完成した後で大校閲翻訳師に任命されたと想定しておく。

問題はその年代である。それを示唆する情報が全く得られない現状、想定の上に想定を積み重ねることになるが、パツァブ翻訳師がプランからラサ入りしたのが1115年頃とすると、その後、『明句論』と『入中論』という二つの大著の改訂と、それ以外にも幾つかの小品の翻訳を完成させ、かつ、それがガリ王家により評価され大校閲翻訳師に任命されるという一連の出来事に何れ程の年数が掛かったのかということが問題となる。さらにその後の大翻訳師としての訳業の数も考慮するならば、凡そそれを十年間と考えて、1125年頃のことと想定しておきたい。

この想定の下に、カシュミールからプラン、中央チベットに至るパツァブ翻訳師の翻訳活動の流れを翻訳後記に翻訳地が明らかになっている作品を資料として再構成するならば、以下の通りになろう。

図4. パツァブ翻訳師の翻訳活動の推移 (カシュミールからチベットへ)

	翻訳の時期と場所	訳出典籍 (共訳者) [肩書] 注. Tr. は翻訳者、Rev. は改訂者
I.	カシュミール時代 (ca. 1090-1112)	
	Ratnaraśmi 寺 *Ratnagupta 寺     *Brahmakara 寺	他世間成就 (Tr. Bhavyarāja) [翻訳師比丘] 入中論 (Tr. Tilakakalaśa) [翻訳師大徳] 入中論釈 (Tr. Tilakakalaśa) [翻訳師] 根本中論 (Rev. Hasumati) [翻訳師] 明句論 (Tr. Hasumati) [翻訳師] 四百論頌 (Tr. Sūkṣmajana) [翻訳師] 四百論広釈 (Tr. Sūkṣmajana) [翻訳師比丘] 次第内修優波提舍 (Tr. Alaṃkakalaśa) [翻訳師大徳]
II.	チベット時代 (ca. 1112-1140)	
1	ガリ地方 (ca. 1112-1115?) Pu rangs	阿毘達磨俱舍論註疏: 相隨順広本 (Tr. Kanakavarman) [翻訳師] 注. プランの僧衆の請願及びプラン領主の勅命による。この頃、プランで Kanakavarman と邂逅 (?)。
2 ①	中央チベット (ca. 1115?-1140) ラサ Ra mo che 寺	明句論 (Rev. Kanakavarman) [翻訳師] 入中論 (Rev. Kanakavarman) [翻訳師] 入中論釈 (Rev. Kanakavarman) [翻訳師]
	1125年頃 (?), ガリ王家から大校閲翻訳師に任命される。これ以前は翻訳師時代 (ca. 1095-1125)、これ以後は大翻訳師時代 (ca. 1125-1140)。	
	Pu rangs (Ra sa?)	阿毘達磨俱舍論註疏: 相隨順略本 (Tr. Kanakavarman) [大校閲翻訳師]
	'Phrul snang 寺	根本中論 (Rev. Kanakavarman) [[大校閲 <sup>(203)</sup> 翻訳師] 注. この後、Kanakavarman 逝去、代わりに、Tilakakalaśa ラサを来訪す。
	Ra mo che 寺	出地獄 (Tr. Tilakakalaśa) [大翻訳師]
②	ツェタン西方のチャサ Bya sa 寺	吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十 (Tr. Tilakakalaśa) [大翻訳師] 注. この後、Tilakakalaśa 逝去。
③	ペンユルの Pa tshab ldong Ya gad 寺	大経集 (Tr. Jayānanda; Khu mDo sde 'bar) [釈迦比丘 (後記①); 至上の翻訳師 (後記②)] 注. 翻訳の施主シヤラワの請願による。この後、パツァブ翻訳師逝去 (1140年頃)。

注. 二重線の前半部は「翻訳師」の時代、後半部は「大翻訳師」の時代である。

パツァブ翻訳師の弘法活動は、活動地域の観点からは、I. カシュミール時代と、II. チベット時代の二つに大別される。後者は更に、1. ガリ地方での活動と、2. 中央チベットでの活動に分けられ、後者は更に、①ラサ、②チャサ、③ペンユルの三つの地域に細分される。以上

が、パツァプ翻訳師の地域的観点からの活動区分である。

他方、「翻訳師」と「大翻訳師」という身分の観点から、パツァプ翻訳師の活動時期を区分するならば、まず最初に留意すべきは、ラサで行なった一連の中観論書の改訂作業である。前述したように、『明句論』及び『入中論』の翻訳後記には、その改訂が大校閲ではなく、続く他の翻訳師達に再改訂を呼びかける内容であった。即ち、この段階ではパツァプ翻訳師はまだ大校閲翻訳師ではなかったことが読み取れる。しかるに、『根本中論』の翻訳後記には「大校閲」の用語が明確に使用されているので、その段階ではパツァプ翻訳師は大校閲翻訳師に任命されていたことが分かる。それ故、そこにまず第一の線引きが為されるのであり、『明句論』と『入中論』の改訂は明らかに『根本中論』の改訂よりも先行することが帰結する。第二の線引きは、プールナヴァルダナの『俱舎論註疏』の広本と略本の間である。前者は翻訳師時代の翻訳であるのに対して、後者は大校閲翻訳師任命後の翻訳であり、同じく前者は後者に先行する。このように肩書の変遷を見ることで、大凡の翻訳順位を想定することが可能となる。このことを念頭において、チベット時代におけるパツァプの翻訳活動の推移を再構成してみよう。

1115年頃、プランからラサに入ったパツァプ翻訳師は、カナカヴァルマンの協力の下にまず最初にインド東部の写本に基づき『明句論』と『入中論』の改訂を完了した。恐らくはその訳業が高く評価されたのであろう。ガリ地方の王族 — 恐らくはプラン領主 — の認可を得て「大翻訳師」や「大校閲翻訳師」を名乗るようになった。凡そ1125年（55歳）頃のことである。その後で、大校閲翻訳師として『俱舎論註疏』の略本を訳出した。その際、ガリ地方まで認可を得る為に戻ったのか否かは定かではない。ただ何らかの形で大校閲翻訳師の認可を得たことは疑いない。さらにラサのトゥルナン寺では『根本中論』の大校閲を行なった。同翻訳後記には明記されていないが、同じく『明句論』のインド東部の写本を依用したものと推察される。ちなみに、カナカヴァルマンとの共訳で翻訳後記に「翻訳師」の肩書を有する四作品は恐らくは大校閲翻訳師の認可を得る前にプランカラサの何れかで訳されたものである<sup>(204)</sup>。

『根本中論』の大校閲の後に、共訳者のカナカヴァルマンは逝去した模様であり、それ以後、パツァプ翻訳師の翻訳後記には彼の名前は登場しなくなる。それに入れ替わる形で、この頃ラサを来訪した人物がティラカカラシャである。恐らくはカナカヴァルマンの死を受けて、パツァプが翻訳の協力者としてカシュミールから招聘したのであろう。ゴク翻訳師の共訳者であったことを鑑みるに、この時点でティラカカラシャはかなりの高齢であったと思われるが、求めに応じてラサを来訪して、ラモチェ寺で『出地獄』という小品を翻訳し、さらには、チャサへ移って『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』という秘密集会の儀軌を翻訳した。チベットでティラカカラシャと共訳した二つの作品の翻訳後記には何れも「大翻訳師」という肩書が見出されるのはそれが理由であり、ティラカカラシャがラサを来訪したにもかかわらず、『入中論』の改訂に参加していなかった理由もそれで説明が付く。つまり彼がラサを来訪した時には既に『入中論』

の改訂は完了していたのである。

その後、恐らくはティラカカラシャも逝去したため、ペンユルのヤケー寺でシャラワの請願に基づき『大経集』を翻訳した際には、一世代若いジャヤーナンダとク・ドデバルと共に訳することになった。これが恐らくパツァプの最後の翻訳であり、その後の消息は彼の翻訳後記からは辿ることが出来ない。その後程なくして逝去したものと推定される。

以上、パツァプ翻訳師の「翻訳師」と「大翻訳師」という肩書に注目して、彼の活動年代を考察した。総括するならば、彼の翻訳師としての活動は、カシュミール修学時代の初頭、1090年代後半頃に恐らくは最初の翻訳である『他世間成就』を訳出したことから始まった。そこで暫定的に1095年頃から翻訳師としての活動を開始したと想定するならば、1095年から1125年頃までの凡そ三十年間が「翻訳師」の時代、1125年から没年である1140年頃 — この没年については直後で論ずる — までの凡そ十五年間が「大翻訳師」の時代と設定される。総計すると、パツァプ翻訳師の翻訳師としての活動期間は、1095年から1140年頃までの凡そ四十五年間ということになる。

ここで考察の眼をパツァプ翻訳師の翻訳から彼の著作へ転ずるならば、彼の『四百論広釈要義』の奥書には、「大翻訳師釈迦比丘 (lo tsa ba chen po shakya'i dge slong)」という肩書が見出されるので、チベットにおける大翻訳師時代 (ca. 1125-1140) の作品であることが確定される。他方、『根本中論』の註釈の奥書には、肩書以前に自らの名前に対する言及すらなく、また著作地も不明であるので、著作年代を確定できない。ただもし大翻訳師時代の作品であれば、『四百論広釈要義』の奥書に見られるように、肩書付きの名前が明記されたであろうから、この『根本中論』の註釈はカシュミール修学時代を含めたかなり初期の段階に著作されたものと見る必要がある。特に奥書に師のハスマティの流儀に従う旨を明記しているところを見ると、ラサにおいてカナカヴァルマンに師事してその改訂を行なう以前、恐らくはカシュミールにおいて最初にハスマティの下で『根本中論』を『明句論』と共に講読していた頃に備忘録として著作された作品である可能性が高い。カナカヴァルマンとの邂逅以後の著作であれば、その奥書にカナカヴァルマンに対する何らかの言及があつてしかるべきだからである。その場合には、アーリヤデーヴァ王の治世下、1100年代中頃に著作された作品と考えられる。

## 5. パツァプ翻訳師の没年

『大経集』を翻訳した時分にはパツァプ翻訳師はかなりの高齢であり、その後久しからぬうちに逝去したと推定されるが、その年代は定かではない。しかるに、パツァプの没年考証の上で興味深い一資料があるので、ここに紹介してしておこう。実はシャラワは、この『大経集』のみならず、龍樹の『広破論』 (*Vaidalya-prakarana*, P5230/D3830) の翻訳の施主をも務めたことがその翻訳後記から判明する。



「全て〔の者〕の大善知識ユンテンタクパの命により、カシュミールのパンディタ・ジャヤナダと、チベットの大翻訳師釈迦比丘ク・ドデバル<sup>(205)</sup>により翻訳、校閲され決訳された。」(P5230, 126a4-5; D3830, 110a3-4; N, tsa, 116b4-5; G, tsa, 166b5-6)<sup>(206)</sup>

中観六理聚のうち、『広破論』は前伝期において訳出が試みられたものの、結局、「翻訳未完 (sgyur 'phro)」として残されていたものである<sup>(207)</sup>。シャラワが翻訳の施主を務めたのは『大経集』とこの『広破論』の二点のみだが、ここには『大経集』の場合とは異なり、ジャヤナダとク・ドデバル以外にパツァブ翻訳師の名前が見出されない。ジャヤナダとク・ドデバルは、他にも『廻諍論』の改訂やジャヤナダの『タルカの槌』の翻訳を共にしており、さらにジャヤナダは『入中論』の註釈 (P5271/D3870) を著し自らその翻訳にも携わっているが、パツァブ翻訳師はその何れの訳業にも関与していない。『大経集』の訳業を最後に彼の足跡は途絶えてしまうのである。その場合、考えられるほぼ唯一の理由は、パツァブ翻訳師は『大経集』の翻訳の後、この『広破論』の翻訳の前に既に逝去していたことである。それ以外に、他ならぬ龍樹の中観六理聚の未訳作品の翻訳という大きな訳業にパツァブ翻訳師が参加しなかった理由は考え難い。この推定が妥当であれば、我々はパツァブ翻訳師の没年に関して有力な手掛かりを得たことになる。なぜならば、この翻訳の命はシャラワが逝去する前に下されたものであるので、彼の没年である1141年をパツァブ翻訳師の没年の下限として設定することが出来るからである。

他方、その上限としては、先に紹介した三つの情報が参考になる。即ち、①1140/41年にランルンバの沙弥戒授戒の戒師を務めたこと、②1130年代末頃にトゥスムケンパが師事したこと、③1134年頃以降にキュンツァンワが師事したこと三つである。このうち、1140/41年にランルンバの沙弥戒授戒の戒師を務めたことが史実であれば、パツァブ翻訳師の没年はまさにその1140/41年に確定される。その場合には、パツァブはランルンバの沙弥戒授戒後に直ぐに亡くなり、シャラワは即座に『広破論』の翻訳をジャヤナダとク・ドデバルに命じ、翌年ないし同年の1141年にはシャラワ自身も亡くなったという経緯になる。この場合、パツァブの死とシャラワの死が同年ないし一年しかタイムラグないことになるが、翻訳の完成は必ずしもシャラワの生前である必要はないので、全く不可能というわけではない。ちなみに、『カダム明灯史』によれば、1141年の十二月二十六日がシャラワの命日であるので<sup>(208)</sup>、パツァブの死が同年の初頭であれば、その年末までに翻訳を完成させることも不可能ではない。

尤も、先に指摘したように、パツァブ翻訳師がランルンバの沙弥戒授戒の戒師を務めたというエピソードは誤伝ないし虚構であり、実際にはその戒師はチャドウルワであった可能性がある。その場合には、パツァブの死は1040/41年に限定されないことになるが、ただ仮にそうであったとしても、パツァブ翻訳師とトゥスムケンパ及びキュンツァンワとの関係を鑑みるならば、その没年は1130年代末頃以外には立て難いこともまた事実である。特に『青冊』所収の

キュンツァンワの略伝には、先に紹介したように、キュンツァンワは最初パツァブに師事したが「[十分に] 師事する時間がなく (bsten long ma byung bar)」、代わりに弟子のタルユルワに師事したとあるが、この件と併せて鑑みるならば、パツァブの翻訳師の死を暗示している可能性は十分に考えられる。それ故、何れの場合にせよ、パツァブ翻訳師の没年は1140年頃ということになる。

以上、パツァブ翻訳師の没年を考証したが、前述した通り、彼の生年は1070年頃に立てられたので、結論としては、パツァブ翻訳師の生没年は、1070-1140年頃に設定するのが現状最も穏当な解釈かと思われる。これとほぼ同様の年代は既にカイクにより提唱されていたが、彼の年代考証が、①パツァブ翻訳師がゴク翻訳師の年少の同時代人であることと、②1140年頃にランルンパの沙弥戒授戒の戒師を務めたことの二点のみから導出された年代であるのに対して、本稿では、上述の通り、種々の関連資料を批判的に検証し関連する出来事を多角的に考証した結果として導出されたものであるため、より堅実な論拠に立脚するものである。

## 6. 現行の大蔵経収録作品の翻訳後記に言及されないパツァブ翻訳師の訳業

『青冊』の最後の記述⑥には、月称の『空七十論註』と秘密集会の『広積明灯』に対してパツァブ翻訳師は改訂を行なったと記されており、後者に至っては、翻訳後記からの引用と思しき一文まで引かれている。しかるに、現行の大蔵経所収の当該作品の翻訳後記にはパツァブ翻訳師に対する言及が見出されず、この点を如何に解釈すべきかが問題となっている。

その点を確認する為に、まず最初に現行の翻訳後記の内容を確認しておこう。『空七十論註』の翻訳後記は以下の通りである。

「①『空七十論註』は、比丘ダルマタク (Dharma grags) により翻訳された。テキストの分量は2,100頌余りである。②吉祥なるナーレンドラ寺においてパンディタ・アバヤーカラ (Abhayākara) とヌル翻訳師ダルマタク (sNur tsā ba Dharma grags) により翻訳された。」(P5268, 381b4-5; D3867, 336b7; N, ya, 375b5-6; G, ya, 464b5-6; C, ya, 331b7)<sup>(209)</sup> [注. 番号付けは筆者。]

この後記は前後二つの部分に分けられるが、前半部は偈文、後半部は散文である。『青冊』によれば、このヌル翻訳師らの翻訳に対してパツァブ翻訳師が「パンディタ・ムディタと共にその註釈の前半部から二巻余り程の翻訳を改訂した」とかなり具体的な情報を提示しているが、その記述は現行の版本（北京版、デルゲ版、ナルタン版、金写版、チョーネ版）の何れにも見出されない。

他方、『広積明灯』の翻訳後記には以下のように記されている。

「①インドの戒師シュラッターカラヴァルマン (Śraddhākaravarman) と大校閲翻訳師比丘リンチェンサンポ (Rin chen bzang po) により翻訳、校閲され決訳された。②インドの

戒師シュリー・ジュニャーナカラ（Śrī-Jñānakara）が解説して、チベットの大校閲翻訳師ゲー・レーツェ（Gos lHas btsas）は「一文不明」（zhu gtugs g-yar khral 'tshal ba'o）<sup>(210)</sup>。

③また後に、インドの大パンディタ・クリシュナ（Nag po, \*Kṛṣṇa）が解説して、チベットの翻訳師ゲー・レーツェが、マガダ（Yul dbus, \*Magadha）のテキストと照合して改訂した。」（P2650, 233a5-7; D1785, 201a7-b2; N, sa, 227a2-3; G, sa, 301b7; C, ha, 201b1-2）<sup>(211)</sup> [注。番号付けは筆者。]

『青冊』には、パツァブ翻訳師はリンチェンサンポの翻訳に対して批判的であり、「ニマタクにより正しく翻訳された（Nyi ma grags kyis legs par bsgyur pa'i）」等と改訂を行なったとされる（同 pp. 416.17-417.2）。ここに引用符で表記した部分は明らかに翻訳後記の一部を引用したものであるので、『青冊』の著者が見たテキストの翻訳後記にはこの一文が含まれていたことは疑いない。この場合、リンチェンサンポの後に改訂を行なったクリシュナは、前述したように、パツァブ翻訳師に先立ち、ナクツォ翻訳師（1011-1064）と共に『入中論』の翻訳を行なった人物であり、パツァブ翻訳師より年代的に先行するので、パツァブ翻訳師はその後で最終的な第三回目の改訂作業を行なったことになる。しかるに、その記述は現行の版本の何れにも見出されない。

以上、『青冊』に言及された二つの事例を検討したが、結論としては、『青冊』の著者であるゲー翻訳師が見ていた翻訳後記と現行の一連の大蔵経収録作品の翻訳後記は同一ではなかったことが導出される。即ち、ゲー翻訳師が見ていたのは、版本として出版される前の写本の状態のテキストであり、その段階では、『空七十論註』や『広積明灯』の翻訳後記には疑いなくパツァブ翻訳師の改訂に対する言及があった。しかるに、後代、版本として出版される時に時の編集者が、理由は定かではないが、翻訳後記にかなり手を入れて上述のパツァブ翻訳師の改訂を示す記述が丸ごと削除されたのである。実際、版本として出版される際に翻訳後記に時として大幅な削除が加えられたことは、現行の諸版本の翻訳後記を比較対照することでも確認することが出来る。例えば、本稿で扱ったテキストを例に挙げるならば、アティシャの『大経集』の翻訳後記は、北京版とデルゲ版を比較した場合、デルゲ版には北京版に見られるかなり長い記述が丸ごと削除されていることが確認された。

このように考えた場合、先に言及したように、サツジャナの二子のうち、マハージャナとパツァブ翻訳師の共訳を示す記述が現行の大蔵経収録作品の翻訳後記に確認されないことも説明が付くのである。つまり、写本の段階ではおそらく両者の共訳を示す記述が何らかの作品の翻訳後記にあったが、版本として出版される段階でその記述が完全に削除されたという経緯である。前述したように、リクレルは『太陽光目録』においてマハージャナがサツジャナの子にしてパツァブ翻訳師の師であることを明記しているが、その情報源は疑いなく彼が編纂したナルタン写本大蔵経の翻訳後記である。このことは単にマハージャナとの共訳作品のみならず、そ

れ以外の作品に関してもあったことは当然考えられるのであり、グー翻訳師の指摘はその一端に過ぎない。可能性としては、テンギェル讚歌部 (bstod tshogs) 所収の龍樹に帰される一連の讚歌のうち、翻訳後記が欠如しているものが十点 (P2013, 2019-2027/ D1121, 1128-1136) 見られるが、パツァブ翻訳師は讚歌類を多数翻訳したと記す『ニャン仏教史』の記述を念頭に置かなければ、パツァブ翻訳師がそれらの翻訳に関与していた可能性は少なからずある。他にも、先に言及したように、龍樹の『親友書簡』や月称の『六十頌如理論註』の改訂にも関与していた可能性も否定できない。それ故、現行の版本大蔵経にはパツァブ翻訳師の翻訳作品は二十点ほどを数えたが、実際に彼が翻訳・改訂に関与した作品はそれよりも多かったことは疑いない。この問題は、資料不足のため現状憶測の域を出ないが、何時の日にか写本大蔵経の存在が日の目を見ることがあるならば、その妥当性が検証されることであろう。<sup>(212)</sup>

## 7. サンプ寺におけるパツァブ翻訳師の影響力の推移

パツァブ翻訳師は、一介の翻訳師であった無名時代から、ガリ地方の領主により大校閲翻訳師に任命されたことや、カダム派の有力者であるシャラワの後援等を契機として、当時のチベット仏教界において徐々にその存在を認知されるようになった。1140年頃にカダム派のランルンパの戒師を務めたのはその一例であり、カルマ・カギェ派の開祖トウスムキェンパがパツァブ翻訳師に師事して中観六理聚を修学したことも既に紹介した通りである。それ以外にも、『青冊』所収の一連の学者達の略伝にはしばしばパツァブ翻訳師の名前が登場しているが、例えば、ロボン・トゥンパ (Slob dpon sTon pa) という人物の略伝には、年代は不明であるが、彼の修学時代に師事した一連の師、例えば、ランタンパ (Glang thang pa rDo rje seng ge, 1054-1123)、シャラワ、ギャマルワ等と並び、パツァブ翻訳師及び彼の四大弟子と呼ばれることになるツァンパ・サルプウ (gTsang pa Sar spos)、マチャ・チャンチュブイエシェ (rMa bya Byang chub ye shes)、タル・ユンテンタク (Dar Yon tan grags)、シャン・タンサクパ (Zhang thang sag pa) 達から、中観六理聚や『明句論』、『入中論』等を聴聞した旨が明記されている。<sup>(213)</sup> さらに、パツァブ・ゴムパ (Pa tshab sGom pa, 1077-1158) の略伝には、彼が師事したシャラワの師であるポトワ (Po to ba Rin chen gsal, 1027-1105) やギャマルワの名と共にパツァブ翻訳師の名前が挙げられている。<sup>(214)</sup>

このように時代の変遷と共にパツァブ翻訳師は徐々に当時のチベット仏教界に受容されていったが、その推移は決して速やかなものではなかった。そのことを示す一証左として、最後に当時のチベット仏教教学研究の一大拠点であったサンプ寺<sup>(215)</sup>におけるパツァブ翻訳師の影響力の推移について現時点で判明していることを提示しておきたい。影響力の程度を測る示徴としては、パツァブ翻訳師の翻訳の引用状況やその著作に見られる中観派を自立派と帰謬派の二つに分類する仕方に対する言及などを念頭に置いた。

パツァブ翻訳師が二十三年間のカシュミール留学を終えて1112年頃チベットに帰国した時にはサンプ寺ではゴク翻訳師が既に逝去していた。しかしながら、サンプ教学の創始者としてのゴク翻訳師の影響力は非常に強く、特に彼の直弟子達が活躍していた時代には、パツァブ翻訳師の存在感はまだ殆ど皆無に近いものであった。そのことを示す一例を挙げるならば、ゴク翻訳師の四大弟子の一人であるトルンパ（Gro lung pa Blo gros 'byung gnas, ca. 1070-1150）は、彼の『教次第大論』（*bsTan rim chen mo*）において『入中論』の偈頌（MAv VI. 23）を引用しているが、それは引用の形態からプラジュニヤカラマティの『入菩薩行論難語釈』（P5273/D3872）からの孫引きであって、パツァブ翻訳師の翻訳を直接に引いたものではなかった<sup>(216)</sup>。このことはゴク翻訳師の直弟子達の時代にはパツァブ翻訳師の訳業がまだ認知されていなかったことを如実に示唆している。実際、トルンパはパツァブ翻訳師とほぼ同世代人であるので、トルンパが『教次第大論』を著した時は丁度パツァブ翻訳師の無名時代に重なっていたのであろう。

しかるに、トルンパより一世代下がったチャパは、彼の『中観東方三論提要』（*dBu ma shar gsum gyi stong thun*, 以下、『中観提要』）において、MAv VI. 23を含む『入中論』の一連の偈頌をパツァブ翻訳師の翻訳から直接に引用しており<sup>(217)</sup>、チャパの時代にはようやくパツァブ翻訳師の翻訳がサンプ寺においても認知されつつあったことが確認される。但し、チャパは『入中論』を批判対象として引いており、『入中論』の訳者であるパツァブ翻訳師に対する認知の仕方も決して肯定的なものではなかったと推定される。

その後、チャパの弟子達の時代には、ようやくパツァブ翻訳師により導入された月称の中観説に随順する者達も現れそれに応じてパツァブ翻訳師に対する肯定的な評価も徐々に見られるようになった。またそれに伴い、パツァブ翻訳師が彼の『根本中論註疏』において提示した中観派を自立派と帰謬派の二つに区分する分類方法についても言及が見られるようになった。チャパの師であるギャマルワの著作には、当時サンプ寺で知られていた中観派の分類が示されているが、そこには、自立派と帰謬派の用語すら見出されない<sup>(218)</sup>。続くチャパの著作にも、自立派と帰謬派の用語自体が見られないので、パツァブ翻訳師による月称の中観論書の翻訳は知られていても、彼の著作までは認知されていなかったことを示唆している。

これに対して、チャパの弟子達の時代には、月称の帰謬派説に随順する者達が現れたことと軌を一にして、パツァブ翻訳師の翻訳のみならず、その著作に対しても関心が持たれ目が向けられるようになった。その一例を挙げるならば、チャパの「八大獅子（*seng chen brgyad*）」と呼ばれる八人の筆頭弟子の一人であるマチャ・チャンチュブツウンドゥは彼の中観論書において自立派と帰謬派という用語を使用している。さらに、チャパの「四公子（*jo sras bzhi*）」の一人であるサキヤ派のソナムツェモ（*rJe btsun bSod nams rtse mo*, 1142-1182）<sup>(220)</sup>は、彼の『入菩薩行論』の註釈において同じく中観派を自立派と帰謬派に分ける仕方を取っており、チャパ



の直弟子達の時代には、パツァブ翻訳師に由来する中観派の分類方法がサンプ系の学者達の間にも徐々に浸透していったことを読み取ることが出来る。<sup>(221)</sup>但し、ソナムツェモが1167年に記した『仏教入門』（*Chos la 'jug pa'i sgo*）には、当時の翻訳師として、ツェデ王の御代に活躍したガーラプドルジェ（dGa' rab rdo rje）、チューツウン（Chos brtson, i.e., Chos kyi brtson 'grus）、ゴク翻訳師ロデンシェーラプの三名しか名前を挙げておらず、『ニャン仏教史』に見られるようなパツァブ翻訳師に対する言及は見出され<sup>(222)</sup>ない。このことが当時のパツァブ翻訳師の知名度を反映したものであれば、1167年の時点では、パツァブ翻訳師の令名はまだサンプ寺を始めとする当時の仏教界に広まっていなかったことが読み取れるのである。恐らくは、月称を批判したサンプ寺の巨匠チャパが1169年に逝去してチベット仏教界から去った後に、月称及びそれを翻訳紹介したパツァブ翻訳師の知名度と影響力が徐々に増大していったものと推察される。ニャン・ニメーウーセル（1136-1204）は、マチャ・チャンチュプツウンドゥ（?-1185）によりパツァブ翻訳師の学統がチベット全土に流布した旨を彼の仏教史において明記<sup>(223)</sup>しているので、サンプ寺におけるパツァブ翻訳師に対する肯定的認知の時代は、チャパの没後、恐らくは、1170年代から速やかに始まったものと考えられる。

以上の諸情報から推察されるサンプ寺を中心とする当時のチベット仏教界におけるパツァブ翻訳師の認知度の推移は以下の通りである。

1. ゴク翻訳師（1059-1109）の直弟子達の時代：まだパツァブ翻訳師の翻訳及び著作は共に認知されていなかった。[不認知の時代]
2. チャパ（1109-1169）の時代：パツァブ翻訳師の翻訳は認知されるようになったが、月称の帰謬派説はまだ受け入れられず否定的な評価が下された。またそのため月称の中観説を解説したパツァブの著作に対しては目が向けられることはなかった。[否定的認知の時代]
3. チャパの直弟子達の時代（1170年代以降）：月称の帰謬派説に随順する者達（ツァンナクパヤマチャ（?-1185）等）が現れ、また、それに伴いパツァブ翻訳師の著作にも目が向けられるようになり、自立派と帰謬派の分類などに言及する者も見られるようになった。[肯定的認知の時代]

但し、サンプ寺の外部においては、パツァブ翻訳師の訳業に対する肯定的評価は恐らくはカダム派を中心として彼の生前から広まっていた。そのことは、先に指摘したように、シャラワがパツァブの翻訳の施主を務めて『大経集』が翻訳されたことや、その翻訳後記にパツァブ翻訳師が「至上の翻訳師」と評されていることから読み取れる。

## 結 語

以上、パツァブ翻訳師ニマタクの生涯と事績を彼の翻訳後記を主資料として『青冊』等の記

述と併せて概観した。厳しい資料的制約がある中、これまで厚いヴェールに覆われてきた彼の弘法活動の具体像をある程度浮き彫りにすることが出来たのではないかと思う。そこで最後に本稿において明らかになった主要事項を一瞥できるよう箇条書きの形で纏めておく。

1. パツァブ翻訳師の翻訳作品については、現行の版本大蔵経には凡そ二十点の作品が収録されているが、『青冊』の記述から、それ以外にも『空七十論註』や秘密集会の『広釈明灯』などの改訂に携わっていたことが明らかになった。さらに龍樹の一連の讃歌の翻訳や『親友書簡』及び月称の『六十頌如理論註』の改訂等にも関与していた可能性もあるので、パツァブ翻訳師が関与した翻訳作品は実際には現行の二十点よりも多いことが確認された。
2. パツァブ翻訳師の著作については、『カダム全集』には四点の作品がパツァブ翻訳師に帰されているが、そのうち真作と見なし得るのは、『根本中論』と『四百論』の註釈の二点のみであり、一点は彼の口訣を後代の人物が纏めたもの、残りの一点は真作性が疑わしいことが明らかになった。
3. パツァブ翻訳師の生没年については、カイクの年代考証を前提としつつ、新たに諸資料を多角的に検証した結果、ca. 1070-1140年という年代が得られた。
4. パツァブ翻訳師は、当初は一介の翻訳師に過ぎなかったが、恐らくは『明句論』や『入中論』等の一連の月称の中観論書の翻訳の功績を認められたことを契機として、1125年頃(?)にガリ王家により大校閲翻訳師に任命されたと推定される。それ以後、彼の肩書は「翻訳師」から「大翻訳師」(=大校閲翻訳師)へと変化した。
5. パツァブ翻訳師の翻訳活動については、地域的には、(I)カシュミール時代(ca. 1090-1112)と(II)チベット時代(ca. 1112-1140)に二分され、後者はさらに、(1)ガリ地方と、(2)中央チベットにおける活動の二つに、後者はさらに、①ラサ、②チャサ、③ベンユルの三地方における活動に細分されること、時間的には、「翻訳師」の時代(ca. 1095-1125)と「大翻訳師」の時代(ca. 1125-1140)に二分されることが明らかになった。
6. サンプ寺におけるパツァブ翻訳師の影響力の推移は、(1)不認知の時代(ゴク翻訳師の直弟子達の時代)、②否定的認知の時代(チャパの時代)、③肯定的認知の時代(チャパの直弟子達の時代)の三段階に分けられ、パツァブ翻訳師の知名度と影響力は、恐らくはチャパの没後、1170年代頃から徐々に増大していった。他方、サンプ寺の外部では、既に生前からカダム派を中心としてパツァブ翻訳師に対する高い評価が見られるようになっており、「至上の翻訳師(sgra bsgyur phul du phyin pa)」と称されるにまで至っていたことが明らかになった。

パツァブ翻訳師に関しては、他にも「パツァブの四子(Pa tshab kyi bu bzhi)」と称される

直弟子達や後代への影響等論ずることは多々あるが、紙幅も尽きたので、その件については稿を改めて検討することにしたい。

### 付録. パツァブ翻訳師関連略年表

最後にパツァブ翻訳師の事績と関連情報を年表の形で纏めておく。範囲はアティシャの逝去からチャパの逝去辺りまでを採録しておく。

年代 (年齢)	パツァブ翻訳師の事績及びその他の関連事項
1054年	アティシャ(982-1054) 逝去。
1059年	ゴク翻訳師 (1059-1109) 生誕。
1070年	この頃, 'Phan yul の Pa tshab stod にてパツァブ翻訳師生誕。(同じ頃, シアラワ (1070-1141) も生誕。)
1076年	ガリ地方の Gu ge 王 rTse lde と Zhi ba 'od (1016-1111) <sup>(224)</sup> , 火辰年の法輪祭を開催。ゴク翻訳師, カシュミールへ出立。
1083年	rTse lde, rGya との戦役 (1083) <sup>(225)</sup> 。その後, rTse lde が暗殺され, Gu ge と Pu rangs が分裂。dBang lde が Gu ge を, bTsan srong が Pu rangs を統治 <sup>(226)</sup> 。dBang lde, ゴク翻訳師の『量評釈莊嚴』翻訳の施主を務め黄金を送る。
1090年 (20歳)	この頃, パツァブ翻訳師, カシュミールへ出立。
1092年	ゴク翻訳師, 35歳の年にチベットへ帰国。その後, dBang lde 逝去。 <sup>(227)</sup>
1109年	ゴク翻訳師逝去。チャパ (1109-1169) 生誕。
1111年	Zhi ba 'od 逝去。 <sup>(228)</sup>
1112年 (42歳)	この頃, 23年間のカシュミール留学を終えてパツァブ翻訳師チベットへ帰国。Pu rangs で領主 Yon tan nyi ma の勅命により『俱舍論註疏』広本を訳出。
1115年 (45歳)	この頃, ラサに入り, ラモチェ寺でカナカヴァルマンと共に『明句論』や『入中論』の改訂を行なう。久しく無名時代続く。
1125年 (55歳)	この頃, ガリ王家により大校閲翻訳師に任命され, カナカヴァルマンと共に『俱舍論註疏』略本の翻訳や『根本中論』の大校閲を行なう。その後カナカヴァルマン逝去, 代わりにティラカカラシャ, ラサ来訪。ラモチェ寺で『出地獄』, チャサ寺では『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌二十』を共訳する。その後ティラカカラシャ逝去。
1135年 (65歳)	Dus gsum mkhyen pa (1110-1193), sTod lung でギャマルワとチャパに師事 (1129-?), その後シアラワ等に六年間 (1135年前後) 師事, [その後 (?)] パツァブ翻訳師に師事 (1130年代末頃)。同じ頃, Khyung tshang ba もパツァブに師事 (1134年頃以後)。シアラワの請願の下, 'Phal yul の Ya gad 寺で Jayānanda と Khu mDo sde 'bar と共に『大経集』を翻訳したのはこの頃か。
1140年 (70歳)	この頃, Glang lung pa (1123-1193) の沙弥戒授戒の戒師を務める (但し, 誤伝ないし虚構の可能性もあり)。その後, パツァブ翻訳師逝去 (シアラワの死の前)。

1141年	シャラワ逝去（12/26日）。
1167年	サキヤ派の bSod nams rtse mo (1142-1182), 『仏教入門』を著す。ゴク翻訳師への言及はあれど, パツァブ翻訳師への言及はなし。
1169年	チャバ逝去。
1170年以降	この頃から, サンブ寺でもパツァブの知名度が徐々に上がる。特に rMa bya Byang brtson (?-1185) によりパツァブの学統は「[チベット] 全土に広められた (kun du dar bar byas so)」と云われる (『ニヤン仏教史』 p. 436.5)。

注. パツァブ翻訳師に関する上記の年代及び年齢は大部分概算である。

## 文献表

### 略号

- Apte V. S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*. Reprint, Kyoto, 1986.  
 BA *The Blue Annals*. Cf. Roerich 1949.  
 BSD F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Vol. 2: *Dictionary*. Reprint, Kyoto, 1985.  
 C チョーネ版大蔵経 (Cone dpar ma)  
 D デルゲ版大蔵経 (sDe dge dpar ma) : 『西藏大蔵経総目録』, 東北大学, 1934 [= 東北目録]  
 Das S. Ch. Das, *Tibetan-English Dictionary*. Reprint, Kyoto, 1988.  
 G 金写版大蔵経 (gSer bris bstan 'gyur)  
 K 『バンタンマ目録』 番号。Cf. 川越 2005.  
 KS 『カダム全集』 (*bKa' gdams gsung 'bum*)。注. 書誌情報は「蔵外文献」の箇所に記載。  
 MHTL *Materials for a History of Tibetan Literature*. Cf. 『アク稀観書目録』。  
 Mvyut Mahāvīyutpatti: 榊亮三郎編著, 『梵藏漢和四譯對校・翻訳名義大集』, 二卷, 国書刊行会, 1965.  
 N ナルタン版大蔵経 (sNar thang dpar ma)  
 P 北京版大蔵経 (Peking dpar ma) : 『影印北京版 西藏大蔵経総目録・索引』, 大谷大学, 1985. [= 大谷目録]  
 S 『太陽光目録』 番号。Cf. Schaeffer/Kuijip 2009.  
 TSD L. Chandra, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Reprint, Kyoto, 1990.  
 Y 『デンカルマ目録』 番号。Cf. 芳村 1950.  
 梵仏研Ⅲ 塚本啓祥その他 (編著) 『梵語仏典の研究Ⅲ : 論書篇』, 平楽寺書店, 1990.  
 梵仏研Ⅳ 塚本啓祥その他 (編著) 『梵語仏典の研究Ⅳ : 密教経典篇』, 平楽寺書店, 1989.  
 梵和 『漢訳対照 梵和大辞典』 (新装版), 鈴木学術財団 (編), 講談社, 第五版, 1990.

### 蔵文辞典・目録類

- 『アク稀観書目録』 (MHTL) : *dPe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer yid kyi kunda bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma bzhugs so*. In: *Materials for a History of Tibetan Literature*. Part 3. Lokesh Chandra (ed.), New Delhi, 1963, pp. 503-601.  
 『カダム全集第一集目録』 : *bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrigs thengs dang po'i dkar chag bzhugs so*. [『カダム全集』 第一集の付録]

- 『雪域人名辞典』: *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod*. Ku zhul grags pa 'byung gnas/ rGyal ba blo bzang mkhas grub (ed.), mTsho sngon mi rigs par khang, 1992.
- 『藏漢大辞典』: *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. 2 vols., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.
- 『太陽光目録』: bCom ldan rig pa'i ral gri, *bsTan pa rgyas pa nyi ma'i 'od zer*. Cf. Schaeffer/ Kuijp 2009.
- 『デブン古籍目録』: *'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), 2 vols., Mi rigs dpe skrun khang, 2004.
- 『トゥンカル大辞典』: *Dung dkar tshig mdzod chen mo*. Dung dkar blo bzang 'phrin las (ed.). Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.

## インド原典

- 『根本中論』(MK): Nāgārjuna, *Mūlamadhyamakakārikā*. Cf. 三枝1985.
- 『入中論』(MAv): Candrakīrti, *Madhyamakāvātāra. Madhyamakāvātāra par Candrakīrti, Traduction Tibétaine*. Louis de la Vallée Poussin (ed.). Reprint, Tokyo, 1977.
- 『宝行王正論』(RĀ): Nāgārjuna, *Ratnāvalī*. Cf. Hahn 1982.

## 蔵外文献

- 『ウーツァン名跡志』: 'Jam dbyangs mkhyen brtse'i dbang po, *dBus gtsang gi gnas rten rags rim gyi mtshan byang mdor bsod dad pa'i sa bon zhes bya ba bzhugs so*. In: *Sa skyai chos 'byung gces bsod*, Vol. 6, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 193-220.
- 『王統明鏡史』: Bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan, *rGyal rabs gsal ba'i me long*. Mi rigs dpe skrun khang, 1993.
- 『黄瑠璃史』: sDe srid sangs rgyas rgya mtsho, *dGa' ldan chos 'byung baiḍūrya ser po*. rDo rje rgyal po (ed.), Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1989.
- 『カダム全集』(KS): *bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so*. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang (ed.), Vol. 1-30, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006.
- 『カダム珍宝史』: bSod nams lha'i dbang po, *bKa' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nyin mor byed pa'i 'od stong*. In: *Two Histories of the bKa'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*. Gangtok, Sikkim, 1977, pp. 207-393.
- 『カダム妙海史』: [A mes zhabs] Ngag dbang kun dga' bsod nams, *dGe ba'i bshes gnyen bka' gdams pa rnam kyi dam pa'i chos byung ba'i tshul legs par bshad pa ngo mtshar rgya mtsho zhes bya ba bzhugs so*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang, 1995.
- 『カダム明灯史』: Las chen kun dga' rgyal mtshan, *bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2000.
- 『ガリ王統史』: Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pa, *Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pas mdzad pa'i mNga' ris rgyal rabs bzhugs lags so*. In: Vitali 1996, pp. 1-85.
- 『漢蔵文書集成』: sTag tshang rdzon pa dpal 'byor rgyal mtsho, *rGya bod kyi yig tshang mkhas pa dga' byed chen mo 'dzam gling gsal ba'i me long zhes bya ba bzhugs so*. In: *Sa skyai chos 'byung gces bsod*, Vol. 3, Krung go'i bod rig dpe skrun khang, 2009.
- 『ゲイエ仏教史』: dGe ye tshul khriims seng ge, *rGya bod kyi chos 'byung rin po che*. 『ゲイエ・ツルティムセンゲ』『インド・チベット仏教史』—校訂テキストおよび影印—. 大谷大学真宗総合研究所, 2007.
- 『賢者喜宴』: dPa' bo gtsug lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 2 vols., Varanasi: Vajra Vidya



- Library, 2003.
- 『サキヤ氏族史』（アメ造）：A myes zhabs Ngag dbang kun dga' bsod nams, *'Dzam gling byang phyogs kyī thub pa'i rgyal tshab chen po dpal ldan sa skya ba'i gdung rabs rin po che ji ltar byon pa'i tshul gyi rnam par thar pa ngo mtshar rin po che'i bang mdzod dgos 'dod kun 'byung bzhugs so: A History of the 'Khon Lineage of prince-abbots of Sa skya*. Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Centre, 1975.
- 『サキヤ氏族史』（タク造）：sTag tshang lo tsā ba shes rab rin chen, *dPal ldan sa skya'i gdung rabs 'dod dgu'i rgya mtsho zhes bya ba gzhugs so*. In: *sTag tshang lo tsā ba shes rab rin chen gyi gsung 'bum*. 2 vols. [Kathmandu:] Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang, 2007, Vol. 1, pp. 1-70.
- 『シュチェン聴聞録』：Zhu chen Tshul khrims rin chen, *Zhu chen tshul khrims rin chen gyi gsan yig bzhugs so. Record of Teachings Received: The gsan-yig of Zhu chen tshul khrims rin chen of sDe dge*. Vol. 1, Ngawang Gyaltzen/ Ngawang Lungtok. (ed.), Dehradun, 1970.
- 『スムパ年表』：dPag bsam ljong bzhang of Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor, part III. *Containing a History of Buddhism in China and Mongolia, preceded by the Re'u mig or Chronological Tables*. Lokesh Chandra (ed.), New Delhi, 1959.
- 『スルプケンチェン伝』：Lo tsā ba Ma ñi ka shrī dnyā na, *Zul phu mkhan chen gyi rnam thar bzhugs so*. In: *Bod kyī lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs*. Vol. 7, pp. 27-53 (1a-14a6).
- 『青冊』：'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1984. [= 活字本] 木版本：The Blue Annals. Śata-Piṭṭaka Series, Vol. 212, New Delhi, 1974.
- 『赤冊』：Tshal pa kun dga' rdo rje, *Deb ther dmar po*. Dung dkar blo bzang 'phrin las (ed.), 2nd ed., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.
- 『ターラナータ仏教史』：Tā ra nā tha, *rGya gar chos 'byung*, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1st ed., 1986, 2nd ed., 1994.
- 『中観思想史』：Shākya mchog ldan, *dBu ma'i byung tshul rnam par bshad pa'i gtam yid bzhin lhun po zhes bya ba bzhugs so*. In: *Sa skya'i chos 'byung gces bsodus*, Vol. 6, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 387-436.
- 『中観提要』：Phya pa Chos kyī seng ge, *dBu ma shar gsum gyi stong thun*. Cf. Tauscher 1999.
- 『定説全知』：sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen, *Grub mtha' kun shes nas mtha' bral sgrub pa zhes bya ba'i bstan bcos rnam par bshad pa Legs bshad kyī rgya mtsho*. In: *sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen gyi gsung 'bum pod dang po bzhugs*. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2007. pp. 93-361.
- 『デウー仏教史』：mKhas pa lDe'us mdzad pa'i rGya bod kyī chos 'byung rgyas pa. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1986, 2nd ed. 2010.
- 『道次第相承伝』：Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan, *Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar*. 1st ed. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 1900, reprint. Twaiwan, 2006.
- 『ニャン仏教史』：Nyang Nyi ma 'od zer, *Chos 'byung me tog snying po sbrang rtsi'i bcud*. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1988, 2nd ed. 2010.
- 『仏教入門』：rJe btsun bSod nams rtse mo, *Chos la 'jug pa'i sgo zhes bya ba bzhugs so*. In: *Sa skya bka' 'bum dpe bsdur ma las bSod nams rtse mo'i gsung 'bum pod gsum pa bzhugs so*. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2007, pp. 389-496.
- 『プトゥン仏教史』：Bu ston rin chen grub, *Bu ston chos 'byung*. rDo rje rgyal po (ed.), Krung go'i bod kyī shes rig dpe skrun khang, 1988.
- 『マントウ仏教史年表』：Mang thos Klu sgrub rgya mtsho, *bsTan rtsis gsal ba'i nyid byed lhag bsam rab dkar*

- zhes bya ba*. In: *Sa skya'i chos 'byung gces bsdus*. Vol. 5, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 169-402.
- 『ヤルルン仏教史』 Shākya rin chen sde, *Yar lung jo bo'i chos 'byung*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2012.
- 『ロンドル高僧名鑑』: Klong rdol Ngag dbang blo bzang, *rGya bod du byon pa'i bstan 'dzin gyi skyes bu dam pa rnams kyi mtshan tho bzhugs so*. In: *Klong rdol Ngag dbang blo bzang gi gsung 'bum*, Vol. 2, Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1991, pp. 353-418.

## 参考文献

井内真帆

- 2003 「Gu ge-Pu hrang 王国の仏教復興運動における lHa lde の役割について: 王位継承に関する一考察」『日本西藏学会々報』49, pp. 47-61.

稲葉正就

- 1966 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出 (上)」『仏教学セミナー』4, pp. 15-33.
- 1967 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出 (下)」『仏教学セミナー』5, pp. 13-25.

小野田俊蔵

- 1989 「チベットの学問寺」『チベット仏教』(岩波講座・東洋思想 第11巻), 岩波書店, pp. 351-373.

加納和雄

- 2006 「サツジャナ著『究竟論提要』— 著者及び梵文写本 —」『高野山密教文化研究所紀要』19, pp. 29-51.
- 2007 「ゴク・ロデンシェーラプ著『書簡 — 甘露の滴』— 校訂テキストと内容概観 —」『高野山大学密教文化研究所紀要』20, pp. 1-58.
- 2012 「アティシヤに由来するレティン寺旧蔵の梵本写本 — 1934年のチベットにおける梵本調査を起点として —」『インド論理学研究』4, pp. 123-161.

川越英真

- 1982 「Rin chen bzañ po の生涯とその活動」『文化』46-1/2, pp. 44-73.
- 1984 「rÑog Blo Idan shes rab と彼をめぐる人々」『印仏研』32-2, pp. 114-118.
- 1985 「Mar pa Chos kyi dbañ phyug と彼の Lo chuñ について」『印仏研』33-2, pp. 129-133.
- 2000 「Nag tsho Lo tsā ba について」『東北福祉大学研究紀要』25, pp. 293-316.
- 2001 「Nag tsho Lo tsā ba について (2)」『東北福祉大学研究紀要』26, pp. 275-295.
- 2005 『dKar chag 'Phags thangs ma』, 仙台: 東北インド・チベット研究会。

斎藤明

- 1987 「『根本中論』チベット訳批判」『仏教研究の諸問題』, 山喜房佛書林, pp. 23-48.

三枝充真

- 1985 『中論偈頌総覧』, 第三文明社.

佐藤長

- 1958 『古代チベット史研究』上巻, 同朋舎。
- 1959 『古代チベット史研究』下巻, 同朋舎。

津田明雅

- 2019 『ナーガールジュナの讃歌 — 諸著作の真偽性とあわせて —』, 起心書房.

ツルティム・ケサン (白館戒雲)

- 1986 「チベットに於けるナーガールジュナの六つの「理論の集まり」について」『印仏研』35-1, pp. 175-178.

2008 「チベットにおける大蔵経（カンギユル・テンギユル）開版の歴史概観 — ナルトンを思い起こすメロディー —」『真宗総合研究所紀要』27, pp. 39-116.

西沢史仁

- 2011 『チベット仏教論理学の形成と展開 — 認識手段論の歴史の変遷を中心として —』, 第一巻（全四巻）, 東京大学, 2011. [博士論文]
- 2012 「サンブ教学の歴史的展開に関する一考察」『日本西藏学会々報』58, pp. 1-14.
- 2013 「サンブ寺の帰属問題 — サンブ寺はカダム派所属の寺院であるのか —」『真宗総合研究所研究紀要』30, pp. 33-52.
- 2017a 「チャパ・チューキセンゲの中観思想 — その独自性と思想的背景 —」『日本西藏学会々報』62, pp. 25-39.
- 2017b 「中観帰謬派の開祖について」『印仏研』65-2, pp. 95-100.
- 2017c 「吐蕃王朝大蔵経編纂事情考（1）—『二卷本訳語釈』と『翻訳名義大集』—」『Acta Tibetica et Buddhica』10, pp. 83-141.
- 2018a 「吐蕃王朝大蔵経編纂事情考（2）—『デンカルマ目録』と『パンタンマ目録』の編纂事情—」『インド論理学研究』11, pp. 71-144.
- 2018b 「チベット初期中観思想における空性理解 — ゴク翻訳師, トルンパ, ギヤマルワ, チャパ —」『日本西藏学会々報』64, pp. 35-51.
- 2018c 「チベット初期中観思想における二諦説 — 二諦の分類の意味をめぐって —」『印仏研』67-1, pp. 188-193.
- 2019 「チベット初期中観思想における二諦説 — トルンパとギヤマルワの二諦を巡る論争 —」『真宗総合研究所紀要』65, pp. 79-93（要旨）; pp. 1-204（電子版本文）.
- 2020a 「サキヤ派中観思想史研究序説 — 師資相承の系譜の分析を中心として」『真宗総合研究所紀要』66, pp. 151-155（要旨）; pp. 1-175（電子版本文）.
- 2020b 「チベット中観思想史研究序説 — シャーキャチョクデン造『中観思想史』を資料として —」『大崎学報』176（2020年3月出版予定）

袴谷憲昭

1986 「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」『チベットの仏教と社会』, 春秋社, pp. 235-268.

羽田野伯猷

- 1954 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成 第一巻チベット篇 I.』法蔵館, 1986, pp. 46-191.（初出：『東北大学文学部研究年報』5）
- 1966 「チベット大蔵経縁起 1 — ナルトン大学問寺の先駆的事業をめぐって —」『チベット・インド学集成 第二巻チベット篇 II.』法蔵館, 1987, pp. 197-292.（初出：『鈴木学術財団研究年報』3）
- 1968 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」, 同1987, pp. 3-195.（初出：『東北大学日本文化研究所研究報告』4）
- 1983 「チベット流伝前期の王室仏教備考 — 勅裁小品 Vyutpatti と目録デンカルマをめぐって」, 同1986, pp. 216-238.（初出：『中川善教博士頌徳記念論集 仏教と文化』）

松本史朗

1997 『チベット仏教哲学』, 大蔵出版.

望月海慧

2016 『ディーバンカラシュリージュニャーナ研究』, 立正大学. [博士論文]

山口瑞鳳

1983 『吐蕃王国成立史研究』, 岩波書店.

- 1988 『チベット 下』, 東京大学出版会。  
山口益
- 1944 「中論偈の諸本対照研究要論」『中観仏教論攷』, 山喜房仏書林, pp. 1-28.  
吉水千鶴子
- 2006 「インド・チベット中観思想史の再構築へむけて」『哲学・思想論集』 32, pp. 73-112.  
2012 「チベットの中観思想」『空と中観』(シリーズ大乘仏教 6), 春秋社, pp. 113-135.  
芳村修基
- 1950 「デンカルマ目録の研究」『インド大乘仏教思想研究』, 百華苑, 1974, pp. 99-199. [初出: 1950]
- Chos 'phel
- 2002 *Gangs can bod kyi gnas yig lam yig gсар ma — lHo kha sa khul gyi gnas yig*. 1st. ed. 2002, 5th ed. 2012, Mi rigs dpe skrun khang.
- Dreyfus, G./ Drongbu Tsering
- 2010 "Pa tshab and the Origin of Prāsaṅgika." *JlABS* 32, 1-2, pp. 387-417.
- Hahn, Michael
- 1982 *Nāgārjuna's Ratnāvalī. Vol. 1. The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese)*. Bonn.
- Jackson, David P.
- 1987 *The Entrance Gate for the Wise (Section III): Sa-skya Paṇḍita on Indian and Tibetan Tradition of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols., Wien.
- 1994 "An Early Biography of rNgog Lo-tsa-ba Blo-ldan-shes-rab." In: *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Fagernes 1992*. Vol. 1, Oslo, pp. 372-392.
- Kramer, Ralf
- 2007 *The Great Tibetan Translator: Life and Works of rNgog Blo ldan shes rab (1059-1109)*. München: Indus Verlag.
- Lang, Karen
- 1990 "Pa-tshab Nyi-ma-grags and the Introduction of Prāsaṅgika into Tibet." In: *Reflections on Tibetan Culture*. L. Epstein/ R. Sherburn (eds.), Lewiston: Mellen Press, pp. 131 – 142.
- Naudou, Jean
- 1980 *Buddhists of Kaśmīr*. Brereton and Picron (trans.), Delhi, 1980. (1st French ed., Paris: Presses Universitaires de France, 1968.)
- Obermiller, E.
- 1932 *History of Buddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston, II. Part, The History of Buddhism in India and Tibet*. Heidelberg.
- Roerich, George N.
- 1949 *The Blue Annals*. 1st ed. Calcutta, 1949, reprint, Delhi, 1995.
- Ruegg, David S.
- 2000 *Three Studies in the History of Indian and Tibetan Madhyamaka Philosophy: Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought. Part 1*. WSTB 50, Wien.
- Ryavec, Karl E.
- 2015 *A Historical Atlas of Tibet*. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Schaeffer, R./ Van der Kuijp, L. W. J.

2009 *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature: The bstan pa rgyas pa nyi ma'i 'od zer of bcom ldan ral gri*. London: Harvard University Press.

Tauscher, Helmut

1983 "Some Problems of Textual History in Connection with the Tibetan Translations of the *Madhyamakāvataṛaḥ* and its Commentary." In: *Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy*. Ernst Steinkellner/ Helmut Tauscher (eds.), Wien, 1983, 1st Indian ed., Delhi, 1993, pp. 293-303.

1999 *Phya pa chos kyi sen ge: dBu ma sar gsum gyi ston thun*. WSTB 43, Wien.

Van der Kuijp, Leonard W. J.

1983 *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology: From the eleventh to the thirteenth century*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GmbH.

1985 "Notes on the Transmission of Nagarjuna's Ratnavali in Tibet." *Tibet Journal* 10-2, pp. 3-19.

1993 "Jayānanda. A Twelfth Century Guoshi from Kashmir among the Tangut." *Central Asiatic Journal* 37, 3-4, pp. 188-197.

Vitali, Roberto

1996 *The Kingdoms of Gu ge Pu hrang: According to mNga' ris rgyal rabs by Gu ge mhan chen Ngag dbang grags pa*. Dharamsala.

Wylie, Turrell V.

1962 *The Geography of Tibet according to 'Dzam-gling-rgyas-bshad: Text and English Translation*. SOR 25, Roma.

Yoshimizu, Chizuko, et. al.

2013 *Zhang thang sag pa 'Byung gnas ye shes, dBu ma tshig gsal gyi ti ka. Part I.: folios 1a-26a3 on Candrakīrti's Prasannapadā ad Mūlamadhyamakakārikā I.1*. Tokyo: Toyo Bunko.

## 注

- (1) 尤もバーヴィヴェーカの主著である『中観心論』(P5255/D3855)及びその自註『思釈炎』(P5256/D3856)の訳出は後伝期になされたので、一連の中観論書の中でも前伝期に訳出が優先されたのは、自立派の典籍というよりも、吐蕃王朝における仏教導入に多大な功績があったシャーンタラクシタ・カマラシーラ師弟及びその周辺の人物達の著作であった。龍樹の『広破論』(P5226/D3826; P5230/D3830)やアーリヤデーヴァ(Āryadeva)の主著である『四百論』(P5246/D3846)の訳出すらも後伝期の訳出を待つ必要があった。前伝期と後伝期の両時期における中観論書の訳出状況については、稲葉1966, pp. 17-21を参照。
- (2) レンダワ・ツォンカバ師弟による《中観復興運動》は十四世紀から十五世紀におけるチベット仏教界の動向を定めた思潮として筆者が設定した概念であるが、それについては、西沢2020a, pp. 56f., 66f. 参照。
- (3) 既に公表された研究としては、西沢2017ab; 2018bc, 2019, 2020abがある。
- (4) 『スムパ年表』p. 9,2参照。
- (5) 『青冊』p. 319参照。スムパケンボも『青冊』の年代を踏襲している(『スムパ年表』p. 9.1)。
- (6) 『青冊』pp. 117-122参照。他にも『賢者喜宴』p. 474; 『黄瑠璃史』p. 176参照。
- (7) 『ロンドル高僧名鑑』pp. 359.19-360.5にパツァブ翻訳師に関する記述が見出されるが、そこには、パツァブ翻訳師のインド滞在を二十五年と記したり、四大弟子を列挙する箇所では、ゴク翻訳師の直弟子である She'u gangs pa (sic, Gangs pa she'u) を挙げたり、rMa bya Byang chub ye shes を rMa bya Byang chub



- brtson 'grus と混同するなど誤りが多く、その記述には信憑性を置けない。このパツァブの四子に関するロンドルラマの情報源は、タクツァン翻訳師の『定説全知』であろう。同書には同様の誤った情報が記載されている（『定説全知』 p. 290.15-17）。
- (8) 本稿の主題及び紙幅の関係上、パツァブ翻訳師の思想的な主題や自立派と帰謬派の分類等に関する先行研究への言及は控えた。この件については稿を改めて紹介することにした。
- (9) 東北目録や大谷目録にはパツァブ翻訳師の翻訳でないにもかかわらずパツァブ翻訳師の翻訳として誤って記載されているものや翻訳後記には明記されていないのにパツァブ翻訳師の翻訳とされるものが散見する。前者の例は、P5261/D om.; P5470/D4556である。P5261は『入中論』のナクツォ旧訳にパツァブ新訳を校合したもので訳者不明、P5470/D4556は『菩提心釈』の七つの合採訳なのでパツァブ翻訳師の訳とは見なし難い。後者の例としては、D1128-1137は龍樹に帰される一連の讃歌であり、東北目録では Tilaka と Pa tshabnyi ma grags の訳としているが、翻訳後記には訳者は何れも記載されていない。なお D1121は Kṛṣṇa と Tshul khriims rgyal ba の訳とするが、翻訳後記には訳者は未記載である。また逆に現行の大蔵経所収作品の後記にはパツァブ翻訳師の訳として記載されていないが、実際には改訂作業に参与した可能性がある作品もある。その委細については後で適宜に言及する。
- (10) この『太陽光目録』は、ナルタン写本大蔵経を編纂する際にその作業用目録として記されたものであり、後の一連の版本大蔵経に見られない情報を提供してくれる貴重な情報源となっている。Schaeffer/Kuijip 2009はその校訂テキストと解説を含み、本稿でもその目録番号を採用した。『太陽光目録』とナルタン写本大蔵経の編纂事情については、ツルティム2008, p. 53; 西沢2011, pp. 279-281参照。
- (11) 『太陽光目録』には、パツァブ翻訳師ツルティムギェルツェン (Pa/sPa tshab lo tsā ba Tshul khriims rgyal mtshan) による『正法念処経』(*mDo dran pa nyer bzhas*, P953/D287) の翻訳が誤ってパツァブ翻訳師ニマタクの翻訳一覧に記載されている。Schaeffer/Kuijip 2009, p. 245, S28.1参照。同書では、それを D4502? と疑問符付きで同定しているが誤り。この著作は既に前伝期において部分的に訳出されていたが、後伝期において完訳された。その翻訳事情については、西沢2018a, pp. 86-87参照。
- (12) これは西沢2011, p. 223に掲載したパツァブ翻訳師の顕教翻訳作品一覧に密教経論の翻訳を追加して加筆修正したものである。
- (13) Tr. は翻訳者 (translator), Rev. は改訂者 (reviser) の意味。パツァブ翻訳師の共訳者名のみを提示。なお、本稿で「改訂」という場合、便宜上、蔵訳の改訂を含意するものとする。例えば、『根本中論』の改訂という場合、梵本の改訂ではなく、あくまでその蔵訳の改訂を意味するので、その点留意されたい。
- (14) 一連の版本の翻訳後記は、Mutitaśrījñāna の読みを示すが、Muditaśrījñāna と読む。
- (15) anupamapura は grong khyer dpe med, ratnagupta は rin chen sbas pa の還梵形。前者はカシュミールの都市名、後者は寺名である。委細は後述する。
- (16) Ra sa は lHa sa の古形。『蔵漢大辞典』 p. 2639参照。
- (17) 『太陽光目録』では、S28.2には *dBu ma tshig gsal* としか記されていないが、後続の文章から、偈註 (*rtsa 'grel*) の両者を含むことが分かるので、この番号を振り分けておく。
- (18) 一連の版本の翻訳後記には、Mutitaśri の読みを示すが、Muditaśri と読む。なお、東北目録及び大谷目録では共に Tr. とするが、後述するように、Rev. の誤り。
- (19) 東北目録及び大谷目録では共に Sūkṣmajāna と記載するが、Sūkṣmajana と読む。
- (20) このうち前三者は直後に紹介するように、表題には『根本中論』の註釈とあり一帙に纏められたものであるが、これと第四の『四百論』の註釈は、『デブン古籍目録』に記載されている。
1. Phyi tsa (24), 015415: *dBu ma rtsa ba shes rab kyi 'grel ba bzhugs*/. 88 fols.
  2. Phyi tsa (57), 015516: *rNal 'byor spyod pa bzhi brgya pa'i bsdus don bzhugs*/. 5 fols.

表題に多少の語句の出入りが見られるが、フォリオ数は全同なので、同一作品と思われる。なお、前者に収録されている三作品はラルン五明仏学院（Bla rung rig lnga nang bstan slob grwa chen mo）からウチェン書体に直したテキスト（以下、ラルン本）が活字本の形で出版されている。

*dBu ma rtsa ba shes rab kyi ti ka sgron ma gsal byed dang tshig gsal gyi dka' gnad spyi sdom bcas bzhugs so.* gSer ljongs bla ma rung lnga rig nang bstan slob grwa chen mo, nd.

- (21) この作品は無題であるが、奥書に記された題目らしきものを参考までに挙げておく。ちなみに、ラルン本では編者がその内容を鑑みて *dBu ma rtsa ba shes rab kyi spyi sdom* という仮題を立てている。
- (22) [...] の箇所は、速記体（'khyug yig）で別人の手により付記されている。
- (23) 『カダム全集第一集目録』ではこの三つを単一の作品と誤解して『根本中論』の註釈と記し（同 p. 19）、加納2007ではこの三つを『明句論』の難語釈と誤解している（同 p. 50, n. 34）。
- (24) この sGron ma gsal bar byed pa は、恐らくは、月称の秘密集会の註釈である *Pradīpodyotana* (Tib. *sGron ma gsal bar byed pa*, P2650/D1785) を念頭に置いた表現であり、*udyotana* は、*gsal bar byed pa*（明らかにするもの）と蔵訳されている。ここでは、「灯明という[対象を]明らかにするもの」という同格限定複合語で解し、端的に「明灯」（＝[対象を]明らかにする灯明）と訳しておく。
- (25) *pa ra* は、3b7, 7a2, *pa ra he ta* は、31a5, 40a11, 50a20に出る。
- (26) In: *Grub mtha' ris med kyi mkhas grub dag gi zhal gsung thor bu phyogs bsgrigs bzhugs so.* (sNgags rdzogs dbu ma'i skor gyi dpe dkon thor bu'i rigs phyogs bsgrigs.) gSer ljongs bla ma rung lnga rig nang bstan slob grwa chen mo (ed.), 2005, pp. 323-357.
- (27) ラルン本では *khe 'brel* と表記するが、*le 'brel* の誤記。
- (28) この語は、Dreyfus/Drongbu 2010, p. 392では、“*Pa tshab's Instruction on the Relation between the Chapters [of Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā]*” と訳されている。特にこの語義の解説は為されていないが、同様の解釈である。
- (29) 例えば、ゲルク派の僧院では律を修学する際には、各学堂の律の要句（*dul ba'i sdom*）を暗記する。それについては、西沢2011, p. 540参照。
- (30) ゴク翻訳師の著作とその著作形式については、西沢2011, pp. 139-147参照。
- (31) In: *'U yug pa rigs pa'i seng ge'i gsung 'bum bzhugs*. Vol. kha, Krong go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2007, pp. 1-105.
- (32) 但し、この作品は「要義」という題目から示唆されるように、科文の集成であり、テキストの内容を偈頌の形で要約した作品ではない。或る意味、これは要義から要句という註釈様式が成立する過度的形態を示すものと評することが出来る。
- (33) このことはレンダワの伝記資料から確認される。西沢2020a, p. 53周辺参照。
- (34) この件の手掛かりが一つ得られるとしたら、この写本の所蔵元であり、このテキストの性格上パツァブ翻訳師の学統を受け継ぐタンサク寺から請来された可能性が高い。タンサク寺にはパツァブ翻訳師由来の口訣が口承ないし文書の形で伝承されていたことはほぼ疑いなく、実際、『青冊』にはタンサク寺に伝承されたパツァブ翻訳師の師資相承の系譜が転載されている（同 pp. 418.17-419.2）。
- (35) 『藏漢大辞典』 p. 2295参照。
- (36) 「要義（*bsdus don/don bsdus*）」という形式の文献群には、①科文の集成と、②原典の簡略な註釈という二つの異なる型が含まれている。これについては、西沢2011, pp. 145-147参照。
- (37) これは、既に Ruegg 2000, p. 45, n. 88に紹介されている。
- (38) 例えば、『道次第相承伝』には、シャラワがパツァブ翻訳師に対して、①中観説の原理・道・果報の三つ（*gzhi lam 'bras gsum*）の設定は如何なるものであるのかということと、②中観の見解の否定対象は何であ

るのかということ、③その否定対象を否定する正理の主要なものは何であるのかということ、④中観の見解を修習する時、加行・本行・後行 (sbyor dngos rjes) の三つとして何をすべきかという詳しい質問を託して有慧の若い二人の僧をパツァブ翻訳師の下に送ったところ、パツァブ翻訳師はその回答として、①聖者龍樹の密意は尊師月称により註釈された中観の究極の見解であることと、②それを修習する時、加行・本行・後行の三つとして何をすべきかということは聖者龍樹師弟の口訣にこの通りにあるという詳しい回答を差し上げた旨が記されている (同 p. 253.1-7)。

- (39) Dreyfus/Drongbu 2010, p. 393, n. 13参照。典拠は, Khu byug, *Bod kyi dbu ma'i lta ba'i 'chad nyan dar tshul blo gsal mig 'byed*, lHa sa: China Tibetological Publications, 2004, p. 133であるが、筆者未見につき委細不明。
- (40) パツァブ翻訳師の略伝については、本稿で紹介する『ニヤン仏教史』、『プトゥン仏教史』、『青冊』の他、『中観思想史』 p. 420f; 『マントウ仏教史年表』 pp. 274-279に比較的詳しい。現代人チベット人学者によるものとしては、『雪域歴代名人辞典』 p. 958f; 『トゥンカル大辞典』 p. 1225f; 『カダム全集第一集目録』 p. 64f. を参照。パツァブ翻訳師に言及した一連の史書については、Ruegg 2000, p. 44, n. 87に言及がある。『中観思想史』の当該箇所は西沢2020b に訳出紹介したので参照されたい。
- (41) ニヤン・ニメーウーセルの生没年については、1124-1192年と1136-1204年に立てる二つの説がある。『ニヤン仏教史』序文 pp. 9-11参照。このうち同編者はドゥジヨム・リンポチェ (bDud 'joms rin po che) の仏教史に基づき前者の年代を採用している。『雪域人名辞典』は1124-1192 (1194, sic) 年 (同 p. 670), 『トゥンカル大辞典』では1136-1204年を取るが (同 p. 918f), 同史に見られるマチャ (?-1185) への言及の内容を鑑みるに、マチャよりも一世代は下った人物と推定されるので、1136-1204年の説を採用しておく。
- (42) この時代には、龍樹の一連の著作を「中観理聚 (dBu ma rigs pa't tshogs)」と表現することはあっても、それを六つに数える流儀はまだ成立していなかったことを示唆している。チベットの伝承における「中観六理聚」という用語の成立と展開については、ツルティム1986を参照。
- (43) この人物の委細不明。bongの補足は同書校訂者による。
- (44) マチャ・チャンチュプツウンドウは、後代の史書では、一般にチャパの弟子のみならず、パツァブの弟子に数えられることもあるが、この記述を見ると、『パツァブの四子』の一人に数えられるタルマ・ユンテンタクの孫弟子であり、パツァブに対しては曾孫弟子の位置付けにある。聴聞録では、同じく《パツァブの四子》の一人であるマチャ・チャンチュプイェシエの弟子とされるので (西沢2020a, p. 6), パツァブの孫弟子の位置付けである。この何れの場合にも、パツァブとマチャ・チャンチュプツウンドウの間には直接的な師弟関係は認められないので、後者は前者の弟子筋にあたるが、直弟子ではないと言わざるを得ない。この点は検討課題である。
- (45) lo tsā ba Pa tshab pa nyi ma grags kyis Kha cher lo nyi shu rtsa gsum sbyangs te/ paṅ ḡi ta mchog tu mkhas pa Shi (read: Ka) na ka warma zhes bya ba spyān drangs te/ dbu ma rig[s] pa'i tshogs dang/ de'i 'grel pa rnams dang/ rgyal po la gdams pa gnyis dang/ Zla ba grags pa'i bzhed pa rab tu rgyas pa *Tshig gsal* dang/ [b]stod skor gdams [pa?] dang/ bstan bcos phra mo mang po bsgyur ro// Pa tshab kyi slob ma Dar ma Yon tan grags/ de'i slob ma Pa [bong]\* kha pa/ de'i slob ma rMa bya Byang brtson no// des kun tu dar bar byas so// 注。\* [bong] の補足は同書校訂者による。
- (46) タントラ部には、さらに *Sragdharastotra* (P2564/D1691) と *Jambhalastotra* (P4566/D3748) という二点の讃歌が収録されている。
- (47) 『デウー仏教史』の校訂者によれば、同史は最初にケーパ・デウー (mKhas pa lDe'u) により十二世紀中葉に著作され、その後十三世紀前半にケーパ・チョナム (mKhas pa Jo nam) により註釈 (zhud 'grel) が作られ、同じ頃に他の或る学者が再度追記 ('grel snon) したものとされる (同序文 p. 5f)。パツァブ翻訳師

- の名前が見出されるのは註釈の部分であるので、この考証が妥当であれば、十三世紀前半頃の記述となる。
- (48) マルパ翻訳師の名前を有する人物としては、Mar pa Chos kyi blo gros (1012-1097) と Mar pa do ba Chos kyi dbang phyug (1042-1136) の二人が考えられるが、そのうちの何れを指すのか定かではない。
- (49) 『プトゥン仏教史』の著作年は奥書には明記されていないが、『トゥンカル大辞典』によれば、プトゥンが三十五歳の水戌年（1322）に著作された（同 p. 1394）。他方、羽田野伯猷は1320-1322年としている（羽田野1966, p. 281）。
- (50) Pa tshab nyi ma grags kiyang Kha cher lo nyi shu rtsa gsum sbyangs te paṅḍita Ka na ka warma spyang drangs te dbu ma'i skor rnam sbsgyur cing bshad pas slob ma Pa tshab kyi bu bzhi la sogs pa byung ngo//
- (51) 但し、このパツァブの記述の直後には、ドクミ翻訳師（'Brog mi Shākya ye shes, 993-1074）への言及が続くので、プトゥンの記述は必ずしも時系列を正確に反映しているわけではない。
- (52) 『トゥンカル大辞典』では1476年を著作完了年とするが（同 p. 1094）、羽田野伯猷によれば、『青冊』では1476年を「現在」としているが、著作完了は1478年である（羽田野1954, p. 65）。
- (53) 『六十頌如理論』のパツァブ翻訳師の共訳者である Muditaśrī のこと。
- (54) この記述は現行の『広釈明灯』の翻訳後記には確認されない。これについては後で検討する。なお引用の範囲については、レーリヒは、先行する「勝れた翻訳者として知られているリンチェンサンポは」の箇所から引用と捉えているが（BA, p. 342）、従わない。
- (55) 活字本では、sbo と記されているが（同 p. 417.4）、木版本の spos の読み（同 p. 305.2）を取る。
- (56) ペンユルについては、『ウーツァン名跡志』 p. 194; Wylie 1962, pp. 29, 86を参照。その地理については、Ryavec 2015, p. 69を参照。
- (57) ゴク翻訳師の生涯と事績については、稲葉1967, pp. 13-18; 羽田野 1968, pp. 153-157; Naudou 1968, pp. 211-212; Kuijp 1983, pp. 29-58; 川越 1984, pp. 114-118; Jackson 1987, pp. 165-169; 1994; 加納 2007; Kramer 2007 など参照。特に、Kramer 2007 はトルンバ造『ゴク伝』の訳註研究であり、その序文では、これまでのゴク翻訳師の事績に関する先行研究と関連する一連のチベット資料を紹介し、付録としてゴク翻訳師の翻訳書一覧、共訳者一覧、著作一覧を付しており有益である。これらを踏まえ、西沢2011, pp. 125-151においてゴク翻訳師に関する一連の主題について詳しく紹介したので、参照されたい。
- (58) 「シャン（Zhang）」は中国史書には「尚」と訳されるが、原義としては王の母方の伯叔父を指し、「ロン（blon, 論）」と呼ばれる大臣（政府高官）と並び、吐蕃王朝で強い権勢を誇っていた王家の外戚氏族の総称である。シャンとロンについては、佐藤1959, pp. 724-731; 山口瑞鳳1983, pp. 533-543; 1988, pp. 31-34を参照。パツァブ翻訳師の家系がシャンであることはタクツァン翻訳師やロンドルラマも言及している。『定説全知』 p. 290.3; 『ロンドル高僧名鑑』 p. 359.20参照。
- (59) 佐藤1958, p. 239; 1959, pp. 730, 751参照。
- (60) 『カダム珍宝史』 p. 323.7f: Zhang Shar ba pa chen po ni/ Pa tshab rom po'i rgyud du ... 'khrungs te/ ... シャラワの家系については後で再説する。
- (61) 『漢藏文書集成』 p. 152.9ff. 参照。
- (62) 『デウー仏教史』 p. 367.12-13: gcen A tsa ra la sras lnga/ sPa tshab rum po rje'i sras/ Klu lde dang/ lHa lde/ sPa tshab tsha 'Bum lde/ mGon btsan dang mGon brtsegs so//. tsha の語義については、山口瑞鳳1983, pp. 528-533参照。甥と孫の二義があるが、ここで何れの意味であるのか未詳。sPa tshab rum po rje'i sras と sPa tshab tsha の二語が何処まで掛かるか定かではないが、dang という語の入り方から、恐らくは前者は長男と次男、後者は後三者に掛かっているかと思われる。この点は検討課題である。なお、Pa/sPa tshab rom po と Pa/sPa tshab rum po は u/o の母音の交替が見られるが、恐らくは同一の語であり、シャラワが

属する氏族と考えられる。

- (63) Jo bo chen po de nyid kyis 'Phan yul Pa tshab tu Zhang Nyi ma grags pa zhes bya bar skye ba bzhes te ...
- (64) Naudou 1968, p. 267参照。
- (65) チャドルワの年代には異説がある。『青冊』(p. 109) や『賢者喜宴』(p. 486f) では1091-1166年、『カダム明灯史』(p. 668f) では1100-1174年とするが、チャドルワはチャバ(1109-1169)の具足戒の戒師を務めた人物であるので、それ相応の年齢差があったと考えられる。今は、Maṅikashrijñāna (1319-1423) 造『スルプケンチェン伝』に見られるチャドルワの臨終の際の記述に「鉄辰年(1160)、御年七十五歳となられた時」(4b2-3)とあるのに依拠して、1086-1160年を生没年として立てておく。チャドルワについては、西沢2011, p. 212f. 参照。
- (66) 『カダム珍宝史』pp. 344.7-345.1/69b7-70a1: ... lo bcu dgu la Pa tshab lo tsā ba la rab tu byung ste/ mtshan brTson 'grus gzhon nur btags/ ... nyer bdun pa la sNon gyi Gyad(sic) par/ Bya 'dzul 'dzin/ Phya pa Chos seng/ bTsun pa Chos mchog gsum la bsnyen par rdzogs/. この記述は『カダム妙海史』にも踏襲されている(同p. 141f)。
- (67) 『ゲイエ仏教史』p. 29.19-20: Pa tshab lo tsha la mkhan po zhus/ sTon pa Pad mas slob dpon mdzad dge tshul dang dge slong zhus/.
- (68) 『賢者喜宴』では、パツァブ翻訳師とチューキペーマの下で出家、チャドルワとチャバの下で具足戒を受戒とするが(同p. 722.3f)、特に受戒時の年齢は明記していない。
- (69) 木版本では Sa thang と表記(p. 413.7)。
- (70) 『雪域人名辞典』p. 165f; 『トゥンカル大辞典』p. 336f. 参照。
- (71) ... rGya dmar la bsnyen par rdzogs/ sPa tshab lo tsā ba la dbu ma gsan pas bsten long ma byung bar Dar Yon tan grags la rigs tshogs gsan/
- (72) ちなみに、レーリヒはこの箇所を “[he] did not have sufficient time to complete his studies under him.” と訳しており、修学を完遂するのに十分な時間がなかったと解しているだけである。
- (73) 両系譜は西沢2020a, pp. 6, 11より転載した。
- (74) この系譜から、パツァブの四子の一人である rMa bya Byang chub ye shes と rMa bya Byang chub brtson 'grus は別人であることが確認される。この両者はしばしば混同され、後者がパツァブの四子の一人と誤解されることも多々見られるので、注意すべきである。
- (75) 『青冊』には、この想定年代とは裏腹に、パツァブ翻訳師の年代が一世代後にズレる可能性を示す記述がある。即ち、カダム派のチャユルワ(1075-1138)の弟子 Khrom bzher Rin chen seng ge (1100-1170)の略伝に、Khrom bzherの同時代人(dus mtshungs)が列挙されているが(同p. 370; BA, p. 305)、そのうちの一人がパツァブ翻訳師なのである。他に同時代人として挙げられたのは、dGyer sgom pa chen po (i.e., dGyer sgom pa gZhon nu grags pa, 1090-1171), sNar thang pa gTum ston (i.e., sTum ston Blo gros grags pa, 1106-1166), sTabs ka ba chen po (sTabs ka ba Dar ma grags, 1103-1174)の三名である。パツァブの生年を1070年頃に立てる場合、チャユルワと同世代となるが、ここでは明らかにチャユルワの弟子の世代に位置付けられている。但しその場合には、ハルシャ王の在任期間(1086-1101)と齟齬を来すことになる。その在任期間自体に問題がある可能性も否定できないが、別の事例としては、パツァブの共訳者を務めたカナカヴァルマンがリンチェンサンポ(958-1055)の共訳者でもある事実もあるので、この記述に従い、1090-1100年頃にパツァブの生年を立てるのは年代的に困難かと思われる。
- (76) 『青冊』p. 283.11-12: sngar bcu bzhi lon pa'i tshes Pa tshab rGya gar la 'byon pa'i phyags phyir 'byon snyam yod pa la/ ...
- (77) 『雪域人名辞典』p. 1848; 『トゥンカル大辞典』p. 2149; BA, p. 230; Kuijp 1985, p. 4参照。



- (78) 正式には Gangs pa she'u Blo gros byang chub. 『青冊』 p. 404.7-12; BA, p. 332に比較的纏まった解説があるが、それによれば、彼は後述のギャマルワの師の一人でもある。
- (79) 『雪域人名辞典』 pp. 1282-1285; 『トゥンカル大辞典』 p. 1597参照。略伝は『青冊』 pp. 464-466に記載。この人物については、川越1985参照。
- (80) 『雪域人名辞典』 p. 1639参照。『青冊』にはマルパトワはロンソムに師事したと明記される（同 p. 464.10）。
- (81) Naudou 1980, p. 267参照。
- (82) 『漢藏文書集成』では、パツァブ翻訳師は、ゴク翻訳師や Mar pa do ba, lHo pa Mar pa lo tsā [Chos kyi blo gros]らの後に位置付けられている（同 p. 159）。
- (83) Vitali 1996, p. 343周辺参照。
- (84) Vitali 1996, pp. 74f., 338参照。
- (85) 直前の Muditaśrī と同一人物の可能性もあるが確定できないので、暫定的に分けて記載しておく。
- (86) Naudou 1980, pp. 214-216参照。
- (87) grong khyer dpe med は、稲葉正就、ノードゥ共に Anupamapura という梵語原語を示す（稲葉1967, p. 13; Naudou 1980, p. 208）。dped med の原語が anupama であることは、Mvyut 68に記載。ノードゥによれば現在のシュリーナガル (Śrīnagar, lit. 吉祥なる都市) に当たる（同 p. 209）。その場合、grong khyer は pura よりも nagara の訳語であり、Anupama-nagara という梵語原語も想定できる。『翻訳名義大集』には grong khyer の原語として nagara と pura の両方を記すが（Mvyut 5506, 5511）、nagara の方が一般的である。例えば、Mvyut 2819: Gandharva-nagara = Dri za'i grong khyer; Mvyut 4125: Kuśa-nagara = Ku śa'i grong khyer。他にも、Mvyut 3847, 4118参照。
- (88) 稲葉、ノードゥ共にこの梵語原語を示す（稲葉1967, p. 19; Naudou 1980, p. 210）。gupta が sbas pa の原語に当たることは、Mvyut 6343に記載。
- (89) 『他世間成立』の翻訳後記には、ratna rasmi (D) と ratna rasme (PNG) の二通りの表記を示すが、raśmi (光) が正しい綴りである。稲葉1967, p. 21; Naudou 1980, p. 210参照。
- (90) Naudou 1980, p. 267参照。
- (91) Naudou 1980, p. 206, n. 12参照。
- (92) Grong khyer chen po dPe med kyi dbus Ratna rasmi'i (D; rasme'i PNG) gtsug lag khang du Kha che'i rgyal po Shri Ha ri sha de ba'i sku ring la/ Kha che'i paṇḍi ta chen po sKal ldan rgyal po dang/ Bod kyi sgra sgyur gyi lo tsā ba dge slong Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur ba'o// //。sgra sgyur gyi lo tsā ba は直訳するならば「語を翻訳する翻訳師（ローツァーフ）」の意味であるが、煩瑣なので、「翻訳師」と一語で訳しておく。
- (93) ゴク翻訳師のバヴィヤラージャの下での論理学研究については、西沢2011, p. 127を参照。ゴク翻訳師訳出経論一覧は Kramer 2007, pp. 53-70に纏められている他、顕教関係は西沢2011, p. 132f. に分野別に整理されたものがある。
- (94) パツァブ翻訳師の一連の翻訳後記を見ると、師事した師の肩書には、「パンディタ (paṇḍita)」と「ケンポ (mkhan po)」の二形態が見出される。前者は非仏教徒、後者は仏教徒、特に、受戒した比丘として使い分けられている可能性が考えられる。本稿では、mkhan po (\*upādhyāya, 和尚, 親教師) は「戒師, slob dpon (\*ācārya, 軌範師) は「尊師」という訳語で統一したが、前者は梵語としては「教師一般」を指す言葉でもあるので (Apte, p. 471), 仏教的文脈で用いられる授戒師の一役職としての upādhyāya との使い分けが厳密に為されているのか否か定かではない。実際、後述するように、バラモンの家系に属するスークシュマジャナには mkhan po の肩書が付されており、単なる師の意味なのか、あるいは、仏教徒に改宗した人物を含意しているのか不明である。この点は検討課題であるが、バヴィヤラージャが非仏教徒であることは、

- 『デウー仏教史』に「外教徒バヴィヤラージャ (mu stegs sKal ldan rgyal po)」と明記されているところからも確認される (同 p. 362.8)。
- (95) ナクツォ翻訳師については、『雪域人名辞典』 p. 921; 『トゥンカル大辞典』 p. 1197f. の他, 川越2000, 2001 に詳しく解説されている。
- (96) この点は既に稲葉正就により指摘されている (稲葉1966, p. 33)。しかし, 同氏はこれをバツァブ翻訳師が改訂したと誤解している (稲葉1967, p. 19f.)。
- (97) 正式には, Kṛṣṇa Samayavajra (Nag po Dam tshig rdo rje) と称するが, この人物については, 川越2001, pp. 275-278参照。
- (98) rGya gar gyi mkhan po Kriṣṇa paṇḍi ta dang/ Bod kyi lo tsā ba Nag tsho Tshul khirms rgyal bas bsgyur ba las/ slad kyis rGya gar gyi mkhan po Ti la ka ka la sha dang/ Bod kyi lo tsā ba Pa tshab Nyi ma nyi ma grags kyis bsgyur ba ltar cung cad bcos pa/ don tshang zhing tshig bde bar bris pa'o// yon mchod bkra shis par gyur cig//
- (99) この新旧二つの『入中論』の翻訳については, Tauscher 1983を参照。
- (100) Kha che'i yul gyi Grong khyer dPe med kyi dbung(DG; dpung PN)/ Rin chen sbas pa'i gtsug lag khang du/ Kha che'i rgyal po dPal 'phags pa lha'i (PDG; la'i N) sku ring la/ rGya gar gyi mkhan po Ti la ka dang/ Bod kyi lo tstsha ba ban de (PN; bande D) Pa tshab (D; ba tsab P; pa tsab NG) nyi ma grags kyis Kha che'i dpe dang mthun par bsgyur/ ... 'dir 'grel ba'i (P; pa'i DNG) mdzad byang dang/ 'gyur byang gi steng nas thun mong ba rnam bkod pa ni/ rtsa ba logs su bsgyur ba dang 'grel pa'i nang gi rtsa ba gnyis sbyar nas zhus dag byas pa'i dbang du byas pa yin no//
- (101) 『入中論釈』の翻訳後記は以下の通り : Kha che'i yul gyi Grong khyer dPe med kyi dbus Rin chen sbas pa'i gtsug lag khang du/ Kha che'i rgyal po dPal 'phags pa lha'i sku ring la/ rGya gar gyi mkhan po Ti la ka ka la sha (PD; shum NG) dang/ Bod kyi lo tsā (PNG; tstsha D) ba Pa tshab nyi ma grags kyis/ Kha che'i dpe dang mthun pa ltar bsgyur/ (P5263, 411a7-8; D3862, 348a5-6; N, 'a, 414b6-7; G, 'a, 514a2-3)
- (102) このテキストについては, 梵仏研Ⅲ, p. 374f. 参照。
- (102) ティラカカラシヤについては, Naudou 1980, pp. 231-233参照。特にゴク翻訳師のティラカカラシヤの下での修学事情については, 西沢2011, p. 128f. 参照。
- (104) この点については, 西沢2011, p. 134f. で多少論じた。
- (105) 原語は, dbung であるが, これは中心や中央 (dbus/ dkyil) を意味する古語である。『蔵漢大辞典』 p. 1946参照。直後に dbus という語が続き, 「中心」と「中央」と便宜上訳し分けしたが, 同様の意味である。
- (106) dbang phyug dam pa'i mnga' bdag rgyal po chen po dPal lHa btsan po'i bka' lung gis/ rGya gar gyi mkhan po theg pa (D om. theg pa) chen po dbu ma pa/ Dznyā na garbha dang/ zhu chen gyi lo tsā (PNG; tstsha D) ba dge slong Cog ro klu'i rgyal mtshan gyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa/ 'di la rab tu byed pa nyi shu rtsa bdun/ shlo (PNG; shlau D) ka bzhi brgya bzhi bcu rtsa dgu yod/ bam po ni phyed dang gnyis su byas so//  
slad kyis Kha che'i(PD; phye'i NG) Grong khyer dPe med kyi dbung(NG; dpung PD)/ gTsug lag khang Rin chen sbas pa'i dbus su/ Kha che'i mkhan po Ha su ma ti dang/ Bod kyi sgra bsgyur gyi lo tsā (PNG; tstsha D) ba Pa tshab nyi ma grags kyis mi'i bdag po 'Phags pa lha'i sku ring la 'Grel pa tshig gsal ba dang bstun nas bcos pa'o// //
- (107) 『明句論』の翻訳後記だけを挙げておく : Kha che'i Grong khyer dPe med kyi dbung (PNG; dbus D)/ Rin chen sbas pa'i gtsug lag khang gi 'dabs su/ rGya gar gyi mkhan po rtog ge pa chen po/ Ma hā su ma ti'i (DNG; ta'a, sic, P) zhal snga nas dang/ Bod kyi lo tsā ba Pa tshab (DNG; Ba chab, sic, P) nyi ma grags

- kylis Kha che'i dpe dang mthun pa ltar bsgyur/ (P5260, 225b4-5; D3860, 200a5-6; N, 'a, 226b7-227a1; G, 'a, 279a1-2)
- (108) 『青冊』 pp. 418.17-419.2: *Thang sag pa rnam rang gi rGya gar ba'i brgyud pa brjod pa na/ Thub pa'i dbang po/ ...* 「タンサク寺の者達が自身のインド人の相承を述べたものには、牟尼主、……」この表現を見る限り、タンサク寺にはパツァブ翻訳師の師資相承の系譜を記した何らかの記録があったことが窺われる。
- (109) Sūkṣmajana の蔵訳の音写表記は、『四百論』及び『四百論広釈』の翻訳後記では、直後に示すように各版本に異読が見られるが、梵語としては Sūkṣmajana が正しい読みと思われるので、本稿ではその読みで統一的に表記することにする。
- (110) Kha che'i Grong khyer dPe med kyi dbus (PNG; dpung D)/ Rin chen sbas pa'i kun dga' ra bar/ rGya gar gyi mkhan po Su sma (PNG; smra D) dzā na dang/ Bod kyi lo tsā (PNG; tsta D) ba Pa tshab nyi ma grags kylis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o (PN; pa D)// 'dis bstan pa dang sems can la phan thogs par gyur cig// (PNG; sarba manggalam D)
- (111) dbon po という語は、『蔵漢大辞典』によれば、pha rgyud bu spun gyi spyi'i ming (父系の兄弟の総称) とあり、孫と甥の二つの意味があるが (同 p. 1949)、後述するように、ここでは孫の意味である。
- (112) dPal Grong khyer dPe med kyi dbus Rin chen sbas pa'i kun dga' ra bar/ rGya gar gyi mkhan po Sukṣa ma dzā na (PNG; Sukṣmadzān D) zhes bya ba gdung rabs grangs med par paṇḍi ta brgyud pa'i (D; ma'i PNG) rigs su sku 'khrungs pa bram ze chen po Rin chen rdo rje'i dbon po bram ze chen po Saddzā na'i (PNG; Sad dzāna'i D) sras gcig tu bde bar gshegs pa'i bstan pa la gces spras (DNG; sbras P) su mdzad pa bdag dang gzhan gyi gzhung lugs rgya mtsho'i pha rol tu son pa'i zhal snga nas dang/ Bod kyi sgra bsgyur gyi lo tsā ba dge slong Pa tshab (DNG; chab P) nyi ma grags kylis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa rdzogs so (PN; D om. rdzogs so)// //
- (113) この六賢門は、『ターラナータ仏教史』では、第三十八章のヴィクラマシーラ寺の寺統史において十二人の歴代座主の後に見出されるので (同 p. 314)、一般にヴィクラマシーラ寺の六賢門と解されているが、同史では、西門の守護者 Vāgīśvarakīrti (Ngag gi dbang phyug grags pa) の略伝の中に「王により招聘され、ナーレンドラ寺やヴィクラマシーラ寺の西門番 (nub sgo ba) として任命された」とあり (同 p. 284.15f.)、ヴィクラマシーラ寺のみならずナーレンドラ寺の門番ともされているので、ヴィクラマシーラ寺に限定せずに当時のパーラ王朝仏教界を代表する大学匠を示す表現と解釈しておく。
- (114) 『ターラナータ仏教史』 p. 290.10f.: Rin chen rdo rje'i sras Ma hā dza na/ de'i sras Sa dzdza na yin te/ Bod kyi chos brgyud rnam la'ang shin tu bka drin che'o// 「リンチェンドルジェの息子はマハージャナ (Mahājana)、その息子はサツジャナであり、チベットの法統に対しても非常に恩義が大きいのである。」  
なお、リクレルの『太陽光目録』には、このラトナヴァジュラは、リンチェンサンポ (958-1055) やナーローバと同時代人であることが明記されている。同 p. 225.2-3: lo chen Rin bzang/ Na ro pa/ Kha che Rin chen rdo rje dang dus mnyam/
- (115) 大谷目録には、パツァブ翻訳師は『四百論広釈』の改訂者として記載されているが、稲葉1967, p. 19に指摘されるように、翻訳者の誤りである。
- (116) その辺の事情は『青冊』所収の弥勒の五法の相承の箇所に説かれており (『青冊』 p. 422; BA, p. 347)、袴谷1986, p. 248に訳出紹介されている。同様のエピソードはゲー翻訳師の『宝性論』の註釈にも見出される。これは加納2006, p. 111f. に訳出紹介されている。
- (117) サツジャナの下でのゴク翻訳師の修学事情については、西沢2011, p. 128を参照。
- (118) 全ての版本で mu ti ta shri の表記を示すが、梵語としては、muditaśrī が正しい読みと思われるので、本稿ではその読みを採用しておく。ノードゥもその読みを取っている (Naudou 1980, p. 216)。

- (119) rGya gar gyi mkhan po Mu ti (read: di) ta shri'i zhal snga nas dang/ Bod kyi lo tsā (PNG; tstsha D) ba Pa tshab nyi ma grags kyis (PD; kyi NG) bcos te gtan la phab pa'o// //
- (120) この点は既に梵仏研Ⅲ, p. 114に指摘されている。
- (121) 『六十頌如理論』は Y592/K529, 『六十頌如理論註』は Y593/K530参照。
- (122) rGya gar gyi mkhan po Dzi na mi tra dang/ Dā na shī la dang/ Shī lendra (PNG; len dra DC) bo dhi dang/ zhu chen gyi lo tsā ba bande Ye she sdes bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o// //
- (123) 実際、『青冊』には、バツァブが『六十頌如理論』の月称註を翻訳(改訳)したことが明記されている(同 p. 416.11f.)。
- (124) 翻訳後記は以下の通り: rGya gar gyi mkhan po Mu ti (read: di) ta shri' dzyā na'i zhal snga nas dang/ Bod kyi lo tsā (D; tsa P; tstsha NG) ba Pa tshab (P om. Pa tshab) nyi ma grags kyis legs par bsgyur ba'o// // (P4566, 295b2; D3748, 84b2-3; N, nu, 300a3-4; G, nu, 361a5-6)
- (125) Naudou 1980, p. 216参照。ノードゥはバツァブ翻訳師がカナカヴァルマンと共にこのムディタシュリーを伴ってチベットに帰国したと解釈しているが(同 p. 212), 筆者の知る限り、ムディタシュリーがチベットを来訪したことを示す証左はない。
- (126) P4615, 73b6; N, pu, 74b2; G, pu, 108b4参照。デルゲ版にはこの作品は未収録である。なお、大谷目録には、Muditaśrījñānaと記載されているが、誤記である。北京版、ナルタン版、金写版全てにおいて Mutitaśrījña (\*Muditaśrījña) の読みを示す。
- (127) この人物については、Naudou 1980, pp. 240-242参照。そこでは、Alaṃkāraśāstraと修正された表記が挙げられているが、後述の *Yoginīsañcāra-tantra-ṭikā* という梵語テキストには paṇḍitācārya-Alakakalaśa と表記されており(梵仏研Ⅳ, p. 259), 梵語 (lit. 巻き毛の壺) としても有意味であるので、Alakakalaśa が正しい表記と考えられる。しかし、『次第内修優波提舍』と『大瑜伽怛特羅吉祥金剛鬘広註深義註釈』の翻訳後記は、何れも Alaṃkakalaśa の音写表記を示すので、本稿ではその読みを尊重しておく。なお、Naudou 1980, p. 241, n. 13には、Alakakalaśa という読みに対する言及も見られる。
- (128) 筆者の還梵による。tshangs pa 'byung ba は、tshangs pa 'byung gnas の意味で解し、\*brahmākara (ブラフマンの源) という梵語を想定したが、確証はない。なお、'byung ba 一語でも ākara の用例は確認される。TSD, p. 1724参照。
- (129) chos kyi gzhi dkon mchog gsum gyi sten dPal Tshangs pa 'byung ba'i gtsug lag khang du/ rGya gar gyi mkhan po A lam ngka (PNG; Ā langka D) ka la sha'i zhal snga nas dang/ Bod kyi sgra bsgyur gyi lo tsā ba bande Nyi ma grags kyis bsgyur ro// //
- (130) 梵仏研Ⅳ, p. 259参照。梵語写本の状態であり、まだテキスト校訂や研究は進んでいない。
- (131) 『青冊』 pp. 1223-1226; BA, pp. 1052-1054参照。『太陽光目録』にはテンバ翻訳師の訳出典籍一覧 (S28.59-70) が掲載されている。それによれば、テンバ翻訳師はトルンパ (Gro lung pa [Blo gros 'byung gnas]) の弟子とされる。
- (132) Tib. spyān gsum pa. レーリヒの補注によれば、カシュミールの著名な文法学者である (BA, p. 1053)。
- (133) 『青冊』 p. 1225; BA, p. 1053参照。
- (134) Naudou 1980, p. 240f. 参照。
- (135) 『青冊』 pp. 1225.18-1226.2; ... yang rGya gar du byon nas *Bye brag bshad pa chen mo* lo gsum du bslabs/ Bod du yang rGya dpe spyān drangs nas A langka de ba dang gnyis kyis bsgyur ba las sum gnyis tsam 'gyur ba na paṇḍi ta sku gshegs/. BA, p. 1054参照。この記述が史実であれば、『大毘婆娑論』の梵本はカシュミールから十二世紀前半頃にチベットに請来されていたことになるが、その後の消息は不明である。
- (136) 同じテキストが二つ現行の大蔵経には収録されているが、翻訳後記は順に以下の通り: ① rGya gar gyi

mkhan po Pu (N; Bu PN) nya sam bhawa dang/ lo tstsha ba (PD; zhu chen gyi lo tstsha ba N) Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur ba'o// (P363, 256a1; D676, 222b1; N, pha, 217b6); ② rGya gar gyi mkhan po Pu nya sambha (D; swa bhā P) wa dang/ lo tstsha ba Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur ba'o// // (P475, 62b2; D850, 64a2, N om.) ここで注目すべきは、前者のテキストの翻訳後記では、パツアップの肩書として、ナルタン版に「大校閲翻訳師 (zhu chen gyi lo tstsha ba)」の読みが示されている点である。それ以外の全ての版本では二つのテキスト何れも単なる「翻訳師 (lo tstsha ba)」の読みを示すので、その読みを採用しておくが、仮にこれが大校閲翻訳師の時代の翻訳であれば、後述するように、カシュミールではなくチベット帰国後の翻訳となる。この点は検討課題である。

(137) 『中観思想史』 p. 420.15f 参照。

(138) マハージャナがカシュミールパンディタであることは同書簡の翻訳後記に明記されている。D 70a2: Kha che'i mkhan po Ma hā dza na dang/ ...

(139) サツジャナとマハージャナは通常は前者が後者の息子と考えられているが、その逆の可能性もあることは、既に袴谷1986, p. 249に指摘されている。その後加納2006, p. 30では、『息子への手紙』に見出される skye[s] bo chen po khyod (D 69b7) という一文の skyes bo chen po は Mahājana という人名に比定されることを根拠として、マハージャナをサツジャナの息子とする解釈を提示している。興味深い指摘だが、同書にはそれ以外にも息子への呼びかけの表現として、「息子よ、汝は (bu khyod)」(D 67b3, 68a5, 68b3, 69a2, 4, 69b6) の他に、「賢者よ、汝は (mkhas khyod)」(D 68a2) という表現も見出される。同書冒頭部第一偈にはまさに mahājana という語が見出されるが、同氏自身それを「偉大なる人」と訳出しているように (同 p. 32), skyes bo chen po khyod は「偉大なる人よ、汝は」と解釈できるのであり、「賢者よ、汝は (mkhas khyod)」という表現と併せて考えるならば、その意味で解釈すべきである。この語がここで「偉大なる人」の意味の他に「マハージャナ」という人名をも含意した両義的な意味で使用されていることは十分考えられるが、これだけではサツジャナの息子の名前がマハージャナであることを示す決定的な証左にはならない。なお同氏は、『四百論広釈』の翻訳後記に、「その一人息子スガタ」なる人物が説かれているとするが (同 p. 44, n. 4), そのようなことは同後記には記されていない。恐らく同後記に、bde bar gshegs pa とあるのをサツジャナの息子の名前と誤解されたものと思われるが、これは直後の bstan pa という語に属格助辞で結び付いており、「善逝の教法」 (= 仏教) の意味で用いられている。同様の誤解は、Ruegg 2000, p. 18, n. 31 にも見られるが、この箇所は先に提示してあるので、参照されたい。

(140) この想定が妥当であれば、サツジャナ家の家系は以下ようになる : Ratnavajra → Mahājana → Sajjana → Mahājana (兄); Sūksmajana (弟)

(141) マハージャナはゴク翻訳師の共訳者として『法法性分別論』の世親釈 (P5529/D4028) を翻訳している。

(142) 現行の大蔵経にはマハージャナの翻訳として十七作品が収録されているが、その中にはサツジャナの『息子への手紙』のみならず、サツジャナの祖父ラトナヴァジュラの三点の作品の翻訳 (P2240/D1531; P2241/D1532; P4999/D om.) が含まれている。大部分は密教関係の翻訳だが、『法法性分別論』 (P5524/D4023, Tr. Seng ge rgyal mtshan), 『法法性分別論註』 (P5529/D4028, Tr. rNgog lo), 『沙弥学処経』 (P5632/D4130, Tr. gZhon nu mchog; Rev. Parahita, gZhon nu mchog) などの顕教関係の翻訳もあり、自著として、『般若波羅蜜多心経義正知』 (P5223/D3822, Tr. Mahājana, Seng ge rgyal mtshan) が残されている。但し、この中にサツジャナの父のマハージャナの翻訳が含まれている可能性もあるので、留意する必要がある。例えば、『沙弥学処経』は、マハージャナが gZhon nu mchog と共訳した作品だが、その後、同じく gZhon nu mchog は Parahitabhadrā と共に同書の改訂を行なっている。Parahitabhadrā は恐らく Sajjana と同世代かと思われるので、このマハージャナは Sajjana の父の方である可能性がある。その場合には、サツジャナの息子のみならず、父もまたチベット人の共訳者を務めたことになるので、その点慎重な検討が必要である。



ただ何れにせよ、この十七作品のうちには、パツァブ翻訳師との共訳は見出されない。

- (143) ... de'i dbon po Sad dzha (read: dza) na la rNgog los slebs/ de'i sras Ma ha dza na la/ 'Phan yul gyi Pa tshab nyi ma grags gyis slebs nas/ ... 注. slebs pa は「至る, 到着する」という意味であるが, ここでは文意を取って、「師事する (bsten pa)」の意味で訳しておく。
- (144) この当時のプランの周辺の地図は, Ryavec 2015, p. 72を参照。
- (145) TSD, p. 912: ti se, kailāsa; Mvyut 4153参照。
- (146) TSD, p. 1490; Mvyut 4151参照。
- (147) 『青冊』では, g-yu bo chen po phag skur/sgur zer ba zhiḡ と換言しており (同 p. 416.6; 木版本 p. 304.5. 注. 活字本は skur と表記するが, 木版本は sgur と表記), レーリヒは, “a large turquoise called 'Phag-sgur” と訳している (BA, p. 342)。『青冊』の著者は, 「phag skur/sgur と云われる大きなトルコ石」と解釈しているわけであるが, phag skur/sgur が何を意味するのか不明であり, その解釈の妥当性は自明ではない。文脈からは, 僧衆がパツァブ翻訳師に翻訳を請願し, その謝礼として, g-yu phag skur/sgur 等を差し上げたという意味であるので, 礼物として相応しいものを指す表現であることは疑いない。g-yu がトルコ石を指すことは『青冊』でも同様に解釈されているので問題ないが, 問題は phag skur/sgur という語である。『青冊』の著者は, これをトルコ石 (g-yu) の固有名詞と捉えているが, phag は猪の意味で, skur/sgur が語義不明だが, 「等 (sogs)」という語が付されていることを鑑みるに, 「トルコ石や猪や skur/sgur 等を献上し」とも読める。今は語義を確定できないので, 今後の検討課題として残しておく。なお, skur/sgur の異読は後で引く同略本の翻訳後記にも見出される。
- (148) gnyer ba という語は, 『蔵漢大辞典』によれば, (1)追求する (tshol ba) や(2)管理する (do dam byed pa), (3)怒りを示す (khro tshul ston pa) の意味があるが, それ以外にも, 古語として, 呼ぶ/招請する ('bod pa) の意味がある (同 p. 986)。ここでは最後の古語の意味で解釈しておく。
- (149) slob dpon Gang ba spel ba zhes bya ba/ chos mngon pa'i gzhung lugs gang chen mtsho'i pha rol tu son pas mdzad pa/ *Chos mngon pa mdzod kyi 'grel bshad/ mtshan nyid kyi* (D; kyis PNG) *rjes su 'brang ba zhes bya ba 'di ni/ gangs ri chen po Ti*(D; Te PNG) *se dang Yid bzhin gyi mtsho'i lho ngos Ri bo chen po sPos* (DG; sbos N; sos P) *kyi ngad* (PDG; ngang N) *ldang ba'i* (read: ldan pa'i) 'dabs (D; 'dab PNG) *yul Pu rangs su/ dge 'dun gtso bor gyur pa brgya phrag gcig dang/ dge bdun spyir gyis g-yu phag sgur la sogs pa phul te/ bkas gnyer nas rGya gar gyi mkhan po Ka na ka barma* (PNG; warma D) *dang Bod kyi lo tsā ba Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur ba zhiḡ go// //*
- (150) Gu ge と Pu hrang の王統譜は, Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pa の『ガリ王統史』に基づき, R. Vitali (以下, ヴィタリ) により作成されている (Vitali 1996, pp. 143-144)。
- (151) 『ガリ王統史』には, Byang chub 'od の厚遇を受けたアティシヤが, 「チベットの王が菩薩であるのは真であった (Bod kyi rgyal po byang chub sems dpa' yin pa bden par 'dug)」と語った言葉が記されているが (同 p. 64.10f.), この「菩薩の氏族 (byang chub sems dpa'i rgyud)」という一語によりこの領主ユンテンニマが王族の血筋であることが示唆されている。
- (152) 参考までに全文を引いておく :
- sa bdag Yon tan nyi ma byang chub sems dpa'i rgyud//  
bka' khirms bkod legs chos ldan gsung gi 'od zer gyis//  
mnga' 'og gdul bya'i 'chol ba'i mun sel lam ston pa'i//  
mchod yon bla blon dam pa rnams ni yol ba'i tshe//  
deng sang sil bu'i nad (PNG; nang D) chen rang dga'i gdon babs te//  
Pu rangs tshogs (PNG; tsho D) gsum dge 'dun chos khirms sman gyis gsos//

bsod nams dbang gis mkhas pa'i (PNG; pa D) 'od ldan pa'i//  
 dul (PDG; ngul N) ba'i gzi brjid byams pa'i dkyil 'khor can//  
 lo pan yon tan nyi zla shar ba las (D; la PNG)//  
 chos mngon rgya mtsho lugs kyi 'dzin khri'i gnas//  
 mnyan bshad brgyud pa'i dge ba'i dba' rlabs kyiis//  
 'chal pa'i ro bsal thar pa'i gnas thob shog// //  
 (P5594, 391a4-7; D4093, 322a5-7; N, nyu, 375b6-376a3; G, nyu, 501b2-502a1)

- (153) 当時のグゲ・プラン王朝では、在家者の王と出家者の王が並立し、それぞれが王位を継承したとされる。それについては、井内2003, p. 53参照。
- (154) このことはパツァブ翻訳師のスポンサーとしてプラン王家が背後にいた可能性を示唆している。パツァブ翻訳師の二十三年間ものカシュミール留学を誰が経済的に支えたのかということは検討に値する問題であるが、彼の一連の翻訳後記からはそれを窺わせる情報は得られない。可能性としては、後述するように、パツァブの翻訳の施主を行なったシャラワも考えられるが、カシュミール留学前から関係があったことを示す情報はなく、憶測の域に留まっている。
- (155) この二つを広本と略本と称することについては、梵仏研 III, p. 92参照。
- (156) 略本の翻訳後記は以下の通り : 'di gangts chen po Ti se (D; si PNG) dang Yid gzhin gyi mtsho'i lho ngos ri bo chen po sPos (PG; sbos DN) kyi ngad ldang ba'i (P om. ba'i; read: ldan pa'i) 'dab/ yul Pu rangs su dge 'dun gyi gtso bor gyur pa brgya phrag gcig dang/ dge 'dun spyir gyis g-yu phag (PDG; 'phag N) skur (PNG; sgur D) la sogs pa phul te bkas gnyer nas rGya gar gyi mkhan po Ka na ka barma dang/ zhu chen gyi lo tsā ba Pa tshab nyi ma grags kyiis bsgyur ba zhiḡ go// (P5597, 314b8-315a1; D4096, 237a1-2; N, thu, 321b7-322a2; G, thu, 388b4-5)
- (157) Naudou 1980, p. 214参照。同 p. 233f. にはカナカヴァルマンに関する比較的纏まった解説が見られる。
- (158) 具体的には、プランで訳出した『俱舍論註疏』広略二本、ラサで改訂した『根本中論』及び『明句論』、『入中論』偈頌及び自註の四点で合計六作品である。
- (159) 具体的には、『華鬘持讃』(P2564/D1691, Tr.), 『菩提心釈』(P2665/D1800, Rev.), 『善住儀軌略撰』(P3470/D2646, Tr.), 『宝行王正論』(P5658/D4158, Rev.) の四作品である。参考までに、翻訳後記を挙げておく。『華鬘持讃』の翻訳後記 : rGya gar gyi mkhan po Ka na ka warmā (D; barmma PNG) dang/ Bod kyi lo tsā (D; tsa PNG) ba Pa tshab nyi ma grags kyiis bsgyur ba las/ slad kyiis paṅḡi ta chen po Ma ṅi ka khri dznyā na'i zhal snga nas dang/ Chag (D; Phyang PNG) lo tsā (D; tsa PNG) ba shākya'i dge slong Chos rje dpal gyis cung cad bcos te dag par byas so// // (P2564, 56a7-8; D1691, 46a1; N, la, 48b6-7; G, la, 65b5-6) 「インドの戒師カナカヴァルマンとチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより翻訳されてから、後に大バンディタ・マニカシュリージュニャーナ (Maṅikaśrījñāna) とチャク翻訳師釈迦比丘チュージェベル (1197-1264) により些か改訂され訂正されたものである。」チャク翻訳師については『雪域人名辞典』pp. 542-545を参照。

『菩提心釈』の翻訳後記 : rGya gar gyi mkhan po Gu ṅa ā (D; a PNG) ka ra dang/ lo tsā (D; tstsha PNG) ba Rab zhi bshes gnyen gyis bsgyur cing zhus/ slad kyi[s] rGya gar gyi mkhan po Ka na ka warmā dang/ Bod kyi lo tsā (DNG; tstsha P) ba Pa tshab nyi ma grags kyiis bcos pa'o (D; pa PNG)// (P2665, 48a1-2; D1800, 42b4-5; N, gi, 46b1; G, gi, 62a5-6) 「インドの戒師グナーカラ (Guṅākara) と翻訳師ラブシシェーニエンにより翻訳、校閲され、後にインドの戒師カナカヴァルマンとチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより改訂された。」ラブシシェーニエンについては『雪域人名辞典』p. 1599f. を参照。それによれば、生年は十一世紀中葉頃とされる。

『善住儀軌略撰』の翻訳後記:rGya gar gyi mkhan po Ka na ka warma dang/ Bod kyi lo tsā (D; tsa PNG) ba Pa tshab nyi ma grags kyis bsgyur pa'o// // (P3470, 294b8; D2646, 272b7; N, gu, 278a4; G, gu, 355a4-5)「インドの戒師カナカヴァルマンとチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより翻訳された。」

『宝行王正論』の翻訳後記:rGya gar gyi mkhan po Dznyā na garbha dang/ Bod kyi lo tsā (D; tsa PNG) ba dge slong Klu'i rgyal mtshan gyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o// //slad kyis (D; kyi PNG) rGya gar gyi mkhan po Ka na ka warma dang/ Bod kyi lo tsā (D; tstsha PNG) ba Pa tshab nyi ma grags kyis rGya dpe gsum la gtugs nas legs par bcos pa'o// //"\*dis kyang 'khor ba sdug bsngal gyi rgya mtsho skem nus par gyur cig// // \* D om. \*.\* (P5658, 152b3-4; D4158, 126a3-4; N, nge, 146b1-3; G, nge, 181a5-6)「インドの戒師ジュニャーナガルバとチベットの翻訳師比丘レイギェルツェンにより翻訳、校閲され決訳された。後に、インドの戒師カナカヴァルマンとチベットの翻訳師パツァブ・ニマタクにより三本のインドのテキスト(梵文写本)を照合して正しく改訂された。これによっても輪廻という苦海を干上がらせることが出来ますように。」同書は『パンタンマ目録』及び『デンカルマ目録』に記載されている(K629/Y654)。後述するように、ここに言及されている三本の梵文写本は、『明句論』や『入中論』の写本と共にラモチェ寺に保管されていたものである可能性がある。もしそうであれば、この『宝行王正論』の翻訳はパツァブがラサ入りしてからの訳業ということになる。この点は検討課題である。

(160) 例えば、『漢蔵文書集成』p. 159.4参照。

(161) slad kyis Ra sa 'Phrul snang gi gtsug lag khang du/ rGya gar gyi mkhan po Ka na ka dang/ lo tstsha ba de nyid kyis zhu chen bgyis pa'o// //。この再改訂(大校閲)の記述はデルゲ版とチョーネ版のみに見られ、北京版、ナルタン版、金写版には欠落している。さらに北京版には、『明句論』所引の『宝行王正論』(RĀ IV, 55)が『根本中論』の根本偈(MK III, 7)として混入しているが(山口益1944, p. 4; 三枝1985, p. 102)、その翻訳後記に再改訂(大校閲)の記述を有するデルゲ版ではその根本偈は削除されている。津田明雅はこれを念頭に置いて、北京版所収の『根本中論』はパツァブがカシュミールで『明句論』に基づき改訂を加えた第一回改訂版であるのに対して、デルゲ版所収の『根本中論』はパツァブがその後ラサにおいて大校閲を加えた再改訂版であると解釈している(津田2019, p. 22)。非常に興味深い解釈であるが、その場合には、何故に大校閲前の不完全な訳が後代に伝承され、北京版系統の版本に収録されることになったのかという疑問が新たに浮上してくる。この件は検討課題として残しておきたい。なお『根本中論』の諸註釈所収の根本偈の系統とその蔵訳を巡る諸問題については、山口益1944; 斎藤1987に詳しく検討されている。

(162) 原語は nyi 'og shar phyogs である。nyi 'og は、Mvyut 9179に aparāntaka の訳語として記載されており、apara は、「他の」という意味の他に、「西の」という意味がある(Apte, p. 143)。BSD, p. 44には、“of the western border, or of the country called Aparānta” と記すが、「南方布」という漢訳の用例もあるので(梵和 p. 84)、西なのか南なのか判断としないところがある。『蔵漢大辞典』は三つの意味を示すが、第一義は「日下」の意味で「世間・世界('jig rten)」を含意する。第二義は「インド(rgya gar)」の意味、第三義は古語として「辺境(mtha' 'khob)」を意味する。ここでは第二義のインドの意味で解釈しておく。ちなみに、ゲルク派の定説書(grub mtha')では毘婆娑師は、通常、① Kha che bye brag smra ba (カシュミール毘婆娑師)、② Nyi 'og pa'i bye brag smra ba、③ Yul dbus kyi bye brag smra ba (マガダの毘婆娑師)の三つに分けられ、僧院では、nyi 'og pa はインド東部に結び付けて解説される。

(163) 『明句論』に引用されている多数の経論の典拠は既に翻訳があるものは、新たに訳出せずにその翻訳の通りに記した、という意味。この記述は、この当時、蔵訳経論のコレクション(写本)がラサのラモチェ寺にあり、パツァブがそれを閲覧できる環境にあったことを示唆している点で注目に値する。既に吐蕃期において、パンタンマ宮殿やデンカルマ宮殿に当時翻訳された蔵訳経論のコレクション—写本大蔵経に他ならない—が所蔵されており、それに基づき、『パンタンマ目録』や『デンカルマ目録』が編纂された訳だが、九

世紀中葉の吐蕃王朝の崩壊以後、その消息は不明であった。しかるに、この記述からそれはラサに移されてこのラモチェ寺に保管されていたことが読み取れる。一般に蔵訳大蔵經の編纂は、14世紀初頭頃にナルタン寺においてレルティ等により編纂されたことを以て、チベット最初の大蔵經成立と見なされているが、『デンカルマ目録』等が蔵訳大蔵經の目録である以上、実際には、既に吐蕃期において成立していたと認める必要がある。そして、吐蕃期に編纂された写本大蔵經はその後ラサに移され、十二世紀初頭にはラモチェ寺に保管されていたという経緯である。ナルタン写本大蔵經の底本、少なくともその中核となったのは、恐らくはこの写本大蔵經であろう。さらには、『明句論』や『入中論』を初め、その他の諸々の梵語仏典の写本—その中には、パツァブが依用した『宝行王正論』の三本の梵文写本も含まれていたかもしれない—もまたラモチェ寺に収集・保管されていたものである可能性も考えられる。この件はまだ憶測の域を出ないが、今後の検討課題である。

- (164) 後述の『入中論』自註の翻訳後記では、同様の但し書きに「根本偈と註釈 (rtsa 'grel)」と記されているが、ここでは「註釈 ('grel pa)」としか記されていない。これは、『明句論』の根本偈、即ち、『根本中論』は大校閲が為されたことを含意したものである。
- (165) パツァブ翻訳師の一連の翻訳後記には概して筆受者 (yi ge pa) の名前は明記されていないので、ここにそれが記されているのは注目に値する。これによれば、この後記は「ラマ」と云う語をその名前の一部に有する複数の人物達により記されたものであり、後記の作成が単一人物によるとは限らないことを示す点でも興味深い。
- (166) phyis Ra sa Ra mo che'i gtsug lag khang du Kha che'i mkhan po Ka na ka warma (PN; barma D; warba G) dang/ Bod kyi lo tsā ba de nyid kiyis Nyi 'og shar phyogs kyi dpe dang gtugs shing legs par bcos te gtan la phab pa'o// //
- khungs rnams ji ltar grags bzhin bris//  
'grel pa sgra don bzhin bsgyur la//  
phyin chad (PN; chang DG) skad gnyis 'byung srid na//  
gzu bor byos la dpyad par rigs//  
[注. デルゲ版は第二脚と第三脚が逆転]
- \*yi ge pa ni bla ma'i ming can dag gis bris bkra shis// /\* (D om. \*.\*\*)
- (167) phyis Ra sa Ra mo cher rGya gar gyi mkhan po Ka na ka warma dang/ Bod kyi lo tsā (P; tstsha D) ba de nyid kiyis nyi 'og shar phyogs pa'i dpe dang gtugs shings legs par bcos te gtan la phab pa'o// // 'dir 'grel pa'i (DNG; ba'i P) mdzad byang dang/ 'gyur byang gi steng nas thun mong (PDN; mongs G) ba rnams bkod pa ni/ rtsa ba logs su bsgyur ba dang 'grel pa'i nang gi rtsa ba gnyis sbyar nas zhus dag byas pa'i dbang du byas pa yin no// //
- (168) khungs rnams phal cher mdo bzhin bris// phyin chad skad gnyis byung srid na// rtsa 'grel sgra don bzhin bsgyur (DNG; bskgyur P) la// gzu bor byos la dpyad par gyis//
- (169) dpal Ra sa Ra mo che'i gtsug lag khang du gron khyer dPe med kyi paṅ ḍi (P; paṅḍi NGC) ta Ti la ka dang/ Bod kyi lo tsā ba chen po shākya'i dge slong Pa tshab nyi ma grags kiyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o// //。デルゲ版は翻訳後記を欠くが、デルゲ版系統のチョーネ版では翻訳後記が付されているので、チョーネ版は単なるデルゲ版のコピーではないことが分かる。
- (170) Bya sa'i gtsug lag khang du Shung kye (PN; Shud kyi D; Shud kye G) ston pa Dar ma rdo rjes zhus nas/ rGya gar gyi mkhan po paṅḍi ta chen po Ti la ka ka la sha zhes bya ba pha rol tu phyin pa gsang sngags kyi theg pa la sogs pa mtha' dag chub pa'i zhal snga nas dang/ Bod kyi sgra bsgyur gyi lo tsā ba chen po bande Pa tshab (D; tsab PNG) nyi ma grags kiyis bsgyur ba'o// //

- (171) チャサ寺の地理情報については、既に稲葉1967, p. 22に正確に指摘されている。ツェタンとチャサの近辺の地理については、Ryavec 2015, p. 69を参照。同書には Bya sa は Jsa と表記されている。チャサ寺の概要は、Chos 'phel 2002, pp. 40-41を参照。
- (172) 『ヤルン仏教史』 p. 65:2-3: ... de'i sras Jo dga' de'i sras gsum gyi che ba Bya sa lHa chen gyis Bya sa'i gtsug lag khang so ma bzhengs/. Chos 'phel 2002, p. 41によれば、チャサ寺の建立者として吐蕃王朝の贊普ティ・レルパチェン (Khri Ral pa can, alias, Khri gtsug lde btsan) に帰する説とラントルマの二子のうち 'Od srungs の長男 dPal 'khor btsan に帰する二説を紹介している (同 p. 41)。『ヤルン仏教史』によれば、dPal 'khor btsan は sMan lung 等の八つの寺院を建立したとされるので (同 p. 60)、そのうちのひとつと見なされたのであろう。前註に引いた『ヤルン仏教史』の記述には、チャサ・ラチェンが建立した寺は「新チャサ寺 (Bya sa'i gtsug lag khang so ma)」と記されているので、同地にはそれ以前から古い寺院があり、それが dPal 'khor btsan 建立の八寺の一つであった可能性も否定できない。この点は検討課題であるが、何れにせよ、吐蕃王家、所謂ヤルン・チョオ (Yar lung Jo bo) 縁りの寺院であることは確かである。
- チャサ・ラチェンは他の一連の史書所収のヤルン・チョオ王統史にも言及されている。例えば、『デウー仏教史』では、Jo dga' の子 Lo lha sta ba can の長男 lHa chen dpal 'bar と記されており、チャサで出家して領主 (dpon) を務めたとされる (同 p. 366.6)。『王統明鏡史』では、Jo dga' の長男 Bya sa lHa chen と明記され、傍註に Bya sa'i lha khang を建立したと付記されている (同 p. 247.19)。
- (173) 『青冊』では先行する箇所では Shung ke lo tsā ba Dar ma rdo rje と表記されているので (同 p. 443.14)、翻訳師であったことが判明する。
- (174) 活字本のみならず木版本 (p. 324) でも dbus の読みを示すが、レーリヒの英訳 “dbU-ma 'Phag skor (the Mādhyamaka system according to the method of Nāgārjuna)” に基づき、dbu ma と修正して解釈しておく。但し、龍樹は中観派の祖であるので、それに流派 (lugs) を付けて表現することに意味があるとは思えない。恐らくは、直前の「秘密集会聖者流 (Dus pa 'Phags lugs)」という表現に合せただけであり、深い意味はないと考える。
- (175) 活字本では mon nas だが、木版本 (p. 324.2) の mos nas の読みを取る。
- (176) 『青冊』の先行する箇所には、パツアップ翻訳師はシュンケから秘密集会のグー流 ('Gos lugs) を聴聞したとある (同 p. 443.10)。「Gos とは 'Gos lo khug pa lhas btsas のことであり、彼の略伝は『青冊』 p. 438f に掲載されている。マルパ・チュウキロトウ (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012-1095) と同時代人である (『雪域人名辞典』 p. 346)。
- (177) 『デウー仏教史』 p. 368.13; 『赤冊』 p. 42.2; 『漢藏文書集成』 p. 153.2; 『王統明鏡史』 p. 240.8; 『賢者喜宴』 p. 434.4f 参照。『ヤルン仏教史』では、ユムテンの家系は、Tshe ba (sic) Ye shes rgyal mtshan と Khri pa 父子までしか記載しておらず、lHa btsun sNgon mo に対する言及は見られない (同 p. 59)。
- (178) 『青冊』 p. 456.5; BA, p. 376参照。
- (179) 『雪域人名辞典』 p. 957f. 参照。略伝は『青冊』 pp. 1077-1083に収録されている (BA, pp. 923-929)。
- (180) 略伝は『青冊』 pp. 1083-1091に収録されている (BA, pp. 929-938)。
- (181) 『青冊』 p. 1084.5-6: lo bco brgyad kyi bar du Bya sa'i Jo bo lHa chen po dang lHa btsun sNgon mo gnyis kyi blon po lo gsum mdzad/. BA, p. 930参照。
- (182) 『青冊』では同じくギェルワ・テンネの略伝の後続の箇所に、チャサのチョオ・ラチェンポとラツウン・ゴンモ、チョオ・チュウチュンワ (Jo bo Bye'u chung ba) の三名がギェルワ・テンネに僧衣を纏うよう請願した旨が記されている (同 p. 1090; BA, p. 936)。彼らは恐らく師弟関係にあったのであろう。
- (183) ジャヤーナダについては、Naudou 1980, pp. 234-236; Kuijp 1993を参照。
- (184) 『大経集』の翻訳事情は、加納2012, pp. 142-143に紹介されている。



- (185) テキストには、全版本に 'dri mkhan (質問者) と記すが、文脈から、'bri mkhan (筆記者, i.e., yi ge pa) と読んでおく。
- (186) 仏教の時代区分では、仏滅後の時代を五百年単位に分けるが、現在は最後の五百年に当たり、「鬪諍の時代 (kaliyuga, 末世)」と表現される。ソナムツェモの『仏教入門』には、現在を仏滅後5000年と捉え、500年毎に十段階に分ける時代区分が紹介されている (同 p. 491)。
- (187) sa skor は、『藏漢大辞典』によれば、sa yul la skor zhib byed pa と解説されており、「巡礼各地」という漢訳が挙げられているが (同 p. 2888)、ここでは意味を為さないので、文脈から sa khul (地区) の意味で解釈しておく。
- (188) \*de lta bu'i rGya gar gyi phyag dpe las Bod kyi yi ger bsgyur ba'i sbyin par bya ba'i chos 'di ni rab mchog theg pa chen po'i rjes su 'brang ba shākya'i gnas brtan mkhas pa chen po Yon tan grags kyi thugs dam yin no//\* (D om. \*...\*) gang 'dir bsod nams su 'gyur (PNG; gyur D) ba de mkhan po dang slob dpon dang pha dang ma sngon du 'gro bar byas te/ sems can gyi tshogs mtha' dag bla na med pa'i ye shes kyi 'bras bu thob par bya ba'i ched du gyur cig// \*di 'dri (read: 'bri?) mkhan bhikṣu Ku mā ra pradznya'i (PG; pradznya'i N) lag gis bris pa'o//\* (D om. \*...\*)
- thub pa'i gsung rab rgya mtsho'i bdud rtsi'i bcud//  
 ltung dang nyon mongs nad gso'i sman chen 'di//  
 lnga brgya'i dus na bstan pa'i srog 'dzin pa//  
 shākya'i sras po **Yon tan grags pa** yis//  
 dPe med grong du sku 'khrungs rtsod dus kyi//  
 mkhas pa **rGyal ba kun dga'** la gsol nas//  
 ya rabs spyod pa ma nyams dad dang ldan//  
 Pa tshab ldong gi sa (PDG; gis N) skor (read: khul?) Zhogs kyi stod//  
 mkhas btsun 'byung gnas dam pas byin brlabs pa//  
 dPal ldan Ya gad (PDN; gang G) gtsug lag khang chen du//  
 skad gnyis smra la seng ge'i sgra sgrogs pa//  
 shākya'i dge slong **Nyi ma grags pa** dang//  
**Khu yi** (DNG; ye P) **ban de** (PD; dhe NG) **mDo sde 'bar** gyis bsgyur//  
 des bskyed bsod nams zla ltar bsil ba yis//  
 thub pa'i 'khor bzhi dang ni 'gro kun gyi//  
 ltung dang nyon mongs gdung ba zhi gyur cig// //
- (189) 後続の後記②の第三脚に言及された三人の人物のうちに gZhon nu shes rab という名の人物がいるが、同一人物かもしれない。
- (190) この人物については、『カダム珍宝史』 pp. 324.6-325.3 (Dol pa Shes rab rgya mtsho); 『ゲイエ仏教史』 p. 32.9-12 (Rog dol Shes rab rgya mtsho); 『青冊』 pp. 329..19-330.13 (Rog Shes rab rgya mtsho); 『カダム明灯史』 pp. 437-444 (dge bshes Dol pa); 『カダム妙海史』 p. 124.2-10 (Dol pa Shes rab rgya mtsho) 参照。『カダム明灯史』は比較的详细な略伝を含む。『黄瑠璃史』に記載されたラデン寺の座主の系譜にもその名が見出される (同 p. 183.3)。
- (191) 『カダム珍宝史』には、Zhogs [Ya] gad kyi dgon pa (同 p. 325.1), 『カダム妙海史』には、Zhogs Ya gad kyi gtsug lag khang (同 p. 124.4) 『ゲイエ仏教史』には、Ya gad kyi gtsug lag khang と表記 (同 p. 32.10)。『青冊』では、Yang gang と表記されているが (同 p. 330.7; 木版本241.5), Ya gad の誤記である。
- (192) 『カダム珍宝史』 p. 325.2参照。『青冊』では千人余り (stong lhag pa) と記し (同 p. 330.7), 『ゲイエ仏

教史』と『カダム妙海史』には、二千人程と記されている (同 p. 32.10; p. 124.6)

(193) Ryavec 2015, p. 69記載の中央チベットの地図上では、右上の囲み記事の中に 3. 'Phan yul Za gad と記されたものが Ya gad 寺に相当するかと思われる。

(194) 紙幅の関係上後記②の訳出は控えるが、テキストだけ挙げておく。

nam mkha'i mthar thug gyur pa ji tsam par//  
 sems can ma lus mtha' yang de bzhin te//  
 ji tsam las dang nyon mongs mthar gyur pa//  
 bdag gis smon lam mtha' yang de tsam mo//  
 deng nas bzung ste chos kyi sku//  
 gcig tu ma gyur bar du ni//  
 bshes gnyen khyod dang mi 'bral zhing//  
 sgrub pa'i sgo nas mnyes byed shog//  
 thos brtson dang ldan dge sbyong la gus pa//  
 Pa tshab dge bsnyen rDo rje g-yung drung dang//  
 bslab gus yid bzhungs (GN; gzhungs P) gZhon nu shes rab dang//  
 bzod ldan Rin chen bzang po yongs la drin//  
 gdung brgyud sa la 'phags pa Pa tshab ldong gi sras//  
 bslab gsum sgrub pas skyong bar 'jig rten rab grags pa//  
 da ltar lnga brgya'i dus kyi bstan pa'i srog 'dzin pa'i//  
**dge slong Yon tan grags** kyis (kyi PNG) rab tu bskul gyur pas//  
Kha che'i bram ze mkhas pa rGyal ba kun dga' dang//  
sgra bsgyur phul du phyin pa Pa tshab Khu gsum gyis//  
 ya rabs spyod pa ma nyams Pa tshab rom po'i khul//  
 gNod sbyin nor spel grags pa Zhogs lha phyug po'i dabs//  
 mkhas btsun bzhugs rjes skyong pa Ya gad (G; gang PN) gtsug lag tu//  
*mDo sde kun las btus pa* bsgyur cing legs par zhus//  
 Bod 'bangs yongs la sman pas sa yang rab tu g-yos//  
 dge legs bsam pa dag pas dgongs pa mthar yang chub// //  
 (P5358, 230a7-231a2; D3961 om.; N, khi, 225a3-b1; G, khi, 301a1-6)

(195) 『カダム明灯史』 p. 464.3; 『カダム珍宝史』 p. 323.7; 『ゲイエ仏教史』 p. 33.1; 『カダム妙海史』 p. 123.1 (注. Pa tshang 'om po の表記は誤記) 等参照。他方、『青冊』では、シャラワは、「チャン (北方?) のロムポ (Byang gi rom po) において或る遊牧民の息子 ('brog pa zhig gi sras) として鉄戌年に生誕した」とあり (同 p. 331.17f; BA, p. 271), シャラワをパツァブ氏とは見なしておらず、一遊牧民の子とする点で他の史書とは解釈が異なっている。しかるに、他ならぬシャラワが翻訳の施主を務めた『大経集』の翻訳後記にシャラワがパツァブ氏族に属することが明記されているので、その通りに解釈しておく。

(196) 活字本では、Kha che Dza ma ya ā nanda と表記されるが (同 p. 332.18), 木版本の Kha che Dza ya ā nanda の読み (同 p. 243.4) が正しい。

(197) 同様の記述は『カダム明灯史』 pp. 467.22-468.2に見出されるが、そこで『大経集』の著者をシャーンティデーヴァと記しているのは誤りである。明らかに *Sūtrasamuccya* を *Śikṣāsamuccaya* と混同している。

(198) 『賢者喜宴』 p. 716.5f. に極く短い言及が見られるほか、『道次第相承伝』にはより詳しい記述が見られる (同 p. 253.10-19)。

- (199) 前伝期においては、翻訳院 (bsgyur grwa) と仏典大校閲院 (dharma zhu chen 'tshal ba'i grwa) が組織として別立されており、それに応じて一般の翻訳師 (lo tsā ba) と大校閲翻訳師 (zhu chen gyi lo tsā ba) が身分的に区別されていた。翻訳師に上中下 (rab 'bring tha ma) の区別があり、上級翻訳師は大校閲を、中級翻訳師は中間校閲を、下級翻訳師は下訳作成を担当したと伝えられる。例えば、『賢者喜宴』 p. 402.20f.: ... rab 'bring tha ma gsum du phye nas rab gyis zhus chen/ 'bring gis bar zhus/ tha mas mchan bu'i lo tsā ba byed skad/. ここで上級翻訳師は大翻訳師、下級翻訳師は小翻訳師に相当するかと推定される。吐蕃期仏典翻訳事業の組織や翻訳師の区別については、羽田野1983, pp. 307-308; 西沢2017c, pp. 115-117, 132参照。他方、後伝期における仏典翻訳事業の内実については殆ど研究がなく、未知の状態に留まっている。この件については、稿を改めて検討することにした。
- (200) マンユル (Mang yul), プラン (Pu/sPu hrangs/rangs), シャンシュン (Zhang zhung, i.e., Gu ge) というガリ地方の三つの地域を指す。この表現は『テウー仏教史』に早くも言及されている (同 p. 360.5-6)。その概要については、『トゥンカル大辞典』 p. 760参照。
- (201) ガリ王家の王統については、諸史書により記述の相異があるが、例えば、『ヤルン仏教史』によれば、ウースンの二子のうち、Khri skyid lde nyi ma mgonの三子によりガリ三区域が統治された (同 p. 60.8-11)。
- (202) 他の可能性としては、バツァブ氏が外戚を務めていたユムテンの氏族によることも考えられるが、現状、翻訳後記にはユムテンの氏族に対する言及は全く見られないので、その可能性は低いと考える。
- (203) 『根本中論』の翻訳後記には、カシュミールでの肩書である「翻訳師」を受けて、「その同じ翻訳師 (lo tsā ba de nyid) と記されているが、同後記に「大校閲を行なった」と明記されているので、実質的に、大校閲翻訳師の肩書を有するものと解する必要がある。
- (204) 具体的には、『華鬘持讃』(P2564/D1691, Tr.), 『菩提心釈』(P2665/D1800, Rev.), 『善住儀軌略撰』(P3470/D2646, Tr.), 『宝行王正論』(P5658/D4158, Rev.) の四作品である。
- (205) ここでク・ドデバルもまた「大翻訳師」であることが確認できる。クもまた『大経集』の翻訳後記では、バツァブと共に「至上の翻訳師」と表現されていたが、この記述は、「至上の翻訳師」が「大翻訳師」を含蓄することを示唆する一証左となっている。
- (206) yongs kyi dge ba'i bshes gnyen chen po// Yon tan grags pa'i bkas/ Kha che'i pañḍi ta Dza ya ā nanda (D; nta ta PNG) dang/ Bod kyi lo tstsha ba chen po shākya'i dge slong Khu mdo sde 'bar gyis bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o// //
- (207) 『デンカルマ目録』では、「翻訳未完」とされるが (Y726), 『バンタンマ目録』では「大校閲未了 (zhu chen ma bgyis pa)」とされる (K692)。その事情については、西沢2018a, p. 87f. 参照。
- (208) 『カダム明灯史』 p. 472.5-7参照。
- (209) sTong nyid bdun cu'i 'grel pa ni// dge slong Dharma grags kyis bsgyur// gzhung grangs (DC; grang PNG) stong phrag gnyis dang ni// brgya phrag gcig gis lhag pa yin// dPal nā (PNG; na DC) lendra'i gtsug lag khang du pañḍi ta A bha yā (DC; ya PNG) ka (PNG; kā DC) ra dang/ sNur lo tsā (DC; tstsha PNG) ba Dharma grags kyis bsgyur ba'o// //
- (210) この一文の意味が判然としない。『藏漢大辞典』には、zhu gtug は「起訴、控告」の意味 (同 p. 2394), g-yar khral は「差事 (\*役目。仕事)」の意味 (同 p. 2617) しか記載されていないが、人頭税 (capitation tax) の意味もある (Das, p. 1151)。識者の教示を乞う。
- (211) rGya gar gyi mkhan po (NG add ā tsarya) Shraddhā (PDC; Shad dhha N; Shraddha G) ka ra warmma (PDC; warmma NG) dang/ zhus (PNG; zhu DC) chen gyi (om. NG) lo tsā ba dge slong Rin chen bzang pos bsgyur cing zhus (PDC; bcos NG) te gtan la phab pa'o (DNGC; pa P)// // \*rGya gar gyi mkhan po Shri Dznyā nā ka ra bas bshad nas/ Bod kyi zhus (P; zhu DC) chen gyi lo tsā ba 'Gos lHas btsas kyis zhu

gtugs g-yar khral 'tshal ba'o// yang slad kyis rGya gar gyi pañdi ta chen po(PD; po'i C) Nag po'i zhal snga nas gyis bshad nas/ Bod kyī lo tsā ba 'Gos lHas btsas kyis Yul dbus kyī dpe dang gtugs te bcos pa'o//<sup>\*</sup> NB. NG om. \*...\*

- (212) 『青冊』によれば、ナルタン寺において大蔵経（写本大蔵経）が編纂された際に、編纂を主導したリクレル等はチベット中から膨大な量の経論の古写本を収集したと伝えられる（『青冊』 pp. 410-411; BA, p. 338）。その古写本群に関する情報はその後の史書からは得られないが、敬虔なチベット僧がそれを全て破棄したとは考え難いので、今でも何処かに秘蔵されている可能性がある。
- (213) 『青冊』 p. 290; BA, p. 236参照。
- (214) 『青冊』 p. 1077; BA, p. 923参照。
- (215) サンプ寺の概要については、『トゥンカル大辞典』 p. 2094の他、小野田1989, pp. 352-354; 西沢2012, 2013など参照。その教学については、西沢2011, pp. 94-317を参照。
- (216) 西沢2020a, pp. 46-48参照。
- (217) 『中観提要』 pp. 58-69参照。『教次第大論』所引のMAv VI. 23も『中観提要』 p. 60にパツァブの翻訳が引かれている。
- (218) 『根本中論註疏』において rang rgyud pa/ thal 'gyur ba という用語が用いられている箇所は、西沢2017b, p. 100, n. 1に一覧にして示してある。委細は別稿にて論ずる。
- (219) 西沢2019, pp. 126-130参照。
- (220) ソナムツェモはサキヤ五祖の第二祖。十七歳の年（1158）にサンプ寺に入り、以後十一年程（ca. 1158-1168）チャパに師事して論理学や中観等を修学したと伝えられる。1173年には師チャパに対する讃歌（*Phya pa la bstod pa*）を著した。チャパの下での修学事情については、『サキヤ氏族史』（タク造） p. 28.4-6; 『サキヤ氏族史』（アメ造） pp. 68.5-69.3参照。前者では「三公子（jo sras gsum）」、後者では「四公子（jo sras bzhi）」と記されており、数え方に相異が見られる。『青冊』は「四公子」と記載（同 p. 406.2f.）、四公子と数えるのが後代では一般的である。
- (221) その委細は別稿にて論ずる予定であるので、ここでは典拠の提示と解説は割愛する。
- (222) 『仏教入門』 p. 490f. 参照。
- (223) 『ニャン仏教史』 p. 436.5: des kun tu dar byas so//
- (224) Vitali 1996, p. 296参照。
- (225) 『ガリ王統史』 p. 72f.; Vitali 1996, p. 323ff. 参照。rGya はラダック上地（La dwags stod）の王国。
- (226) Vitali 1996, p. 343参照。
- (227) Vitali 1996, p. 342参照。
- (228) 『ガリ王統史』 p. 67.18; Vitali 1996, p. 296参照。

\* 本稿は、令和元年度科学研究費「若手研究」（19K12951）の助成に基づく。